

台灣情報誌

交流

2013年1月 vol.862

公益財団法人 交流協会
Interchange Association, Japan

交流協会設立40周年記念号



交 流

2013年1月
vol. 862

目次

CONTENTS

交流協会設立40周年に寄せて(会長 大橋光夫)	1
交流協会設立40周年を祝して(外務大臣 岸田文雄)	3
交流協会設立40周年を祝して(経済産業大臣 茂木敏充)	4
台北事務所代表時代の思い出(顧問 池田維)	5
交流協会と日台関係40年	7
急増する日本企業の台湾投資	9
(田崎嘉邦)	
台北の歴史を歩く その17	
草山(陽明山)を歩く	20
(片倉佳史)	
台湾で人気を呼ぶ日本酒	29
(松崎晴雄)	
日台青年交流事業	34
【台湾内政、日台関係をめぐる動向】	
日本衆議院選挙と新政権に対する台湾の反応、手当削減政治の展開...	53
(石原忠浩)	
コラム:日台交流の現場から	
交流協会設立40周年と私の「自分史」	65
編集後記	66

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

● ● 交流協会について ● ●

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も太宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

交流協会設立 40 周年に寄せて

公益財団法人交流協会
会長 大橋光夫

新年明けましておめでとうございます。

昨年 12 月 交流協会は設立 40 周年を迎えました。交流協会は 1972 年 12 月 8 日に外務大臣、通商産業大臣（当時）の認可を受けて、外交関係が途絶えた日本と台湾の間の実務関係を維持発展させることを目的とする財団法人として設立され、昨年 4 月 1 日には新たに公益財団法人へと移行し、今日に至っております。同時期に設立された台湾側のカウンターパートである亜東関係協会も同じく 40 周年を迎えました。双方は外交関係のない日台関係の窓口機関として極めて重要な役割を果たしてきました。

40 年を経た日台間の実務関係を数字で表せば、人的交流では、2011 年に日本から台湾を訪問した数は 129 万人の過去最高となり、台湾から日本を訪問した数は東日本大震災の影響で大きく減少したものの 99 万人で、日本との国・地域別交流人数では世界で第 3 位でした。現在台湾からの訪問者数は回復しつつあり、台湾観光局の発表では、昨年の日台双方の往来は 299 万人に達しました。2011 年の日台間の貿易総額は約 740 億ドルで、台湾は日本にとって第 5 位の貿易パートナーであり、日本は台湾にとって第 2 位の貿易パートナーとなっています。日本から台湾への直接投資は 4.5 億ドルでした。また、2011 年に締結された日台民間投資取り決めや日台民間航空取り決め（オープンスカイ）により、今後益々、日台関係の大きな発展が期待されます。

経済のみでなく、日本と台湾との関係は外交関

係がないにも拘わらず、深い絆で結ばれており、極めて特殊な関係とも言えるものです。昨年 1 月に交流協会が台湾で実施した世論調査では、日本に親しみを感じる、どちらかという親しみを感じると答えた台湾人は 74 パーセントに上っています。また、台湾の在日代表機関である台北駐日経済文化代表処が 2011 年 5 月に日本で実施した世論調査では、台湾をととても身近に感じる、どちらかと言えば身近に感じると答えた日本人は 67 パーセントに上っています。

東日本大震災に対する台湾の 200 億円を超える世界一の義捐金、ならびに人的支援を忘れるわけにはいきません。二年近く経った今でも被災地でご支援してくださっている台湾の方々があります。こんなに強い心と心の絆は世界でも日台間だけにあるのではないのでしょうか。このように日台関係はこの 40 年で大きく発展してきましたが、これは日台双方の先人たちの努力の賜物であり、心から敬意を表します。

このように緊密な日台関係であります。この 40 年で日台双方の状況も大きく変わりました。世代交代が大きな要因と考えます。台湾では日本語世代といわれる方々が次第に減少し、日本でも台湾と深いつながりのある年配の方々が減少しています。今の台湾の若い世代は日本のポップカルチャーは大好きですが、日本語が話せるか、日本の歴史を理解しているか、日本の伝統文化を知っているかと言われると、残念ながら日本でさえそのような若年層は減少していると言わざるを得ま

せん。そこで交流協会では日本研究支援委員会を立ち上げ、台湾の五つの大学に日本研究センターを設置する支援を行い、その後も各種支援を続けています。また、日本の一般の方々も台湾について知っているのは故宮博物院と美味しい台湾料理が中心と言っても過言ではありません。従って、われわれは、今後の日台関係には次代を担う青年たちの交流が最も重要であると考えており、今後とも最重要課題として取り組みたいと考えています。また、急速に進む日台経済交流を更に深化させるためにも、台湾経済・企業の実力を日本各地の、特に中小企業の皆様にわかっていただき、台

湾や中国大陸への投資を台湾企業と協力して進める重要な時期となっており、このための広報努力もさらに強めて参ります。

台湾は日本にとり極めて重要な隣人です。終わりに当たり、台湾との日本側窓口機関である交流協会設立 40 周年に際し、関係する全ての方々に感謝申し上げると同時に、日台関係の今後の更なる発展のため、微力ながら私ども交流協会は日々努力する所存でありますので、日台関係に深い関心をお持ちの皆様方には、今後とも絶大なるご指導とご支援をお願いいたします。

交流協会設立40周年を祝して

外務大臣 岸田文雄



交流協会が設立40周年を迎えられたことに対し、心よりお祝い申し上げます。

台湾は、我が国との間で緊密な経済関係と人的往来を有する重要なパートナーです。世論調査によれば、日本と台湾のいずれにおいても、実に10人に7人が相手側に親しみを抱いているとの結果が示されており、東日本大震災時の台湾からの格別の支援やそれに対する日本側の感謝を示す数々の活動はこれを裏付けるものです。日台間にこれほど深い友情と固い絆が根付いていることは、極めて得難いことです。これは、交流協会が、維持会員の皆様をはじめとする多くの関係者の御支持を得て、我が国と台湾を繋ぐ懸け橋として、40年間にわたり日台関係を支えてこられた成果と言えます。そして、このような日台間の深い友情と信頼関係を支えているのは、民主、自由、平和といった基本的価値観の共有であり、台湾の人々が、この40年間に目覚ましい経済発展と政治の民主化を実現し、公平・公正な政治システムを根付かせてきたことは、これらの基本的価値を共有する我が国としても、誠に喜ばしいことと評価しています。

我が国及び地域、世界の平和、安定、繁栄を維持・促進していくこと、そして、そのために近隣諸国・地域との関係を発展・強化させていくことは、我が国の外交政策の重要な柱です。台湾海峡の平和と安定は地域と世界にとって極めて重要であり、かかる観点から、我が国は、近年、兩岸間の対話が間断なく続けられていることを歓迎しています。また、近年、交流協会とその台湾側カウンターパートである亜東関係協会との間で、経済分野を中心とする様々な互惠協力の枠組みが作られ、日台間の実務関係が着実に発展してきていることは誠に喜ばしい限りです。政府としては、日台間の協力関係が引き続き着実に発展していくよう期待しており、交流協会の活動に対して積極的に支援と協力を与えてまいります。

「四十にして惑わず」と申しますが、設立40周年を迎えた交流協会が、これまでに培われてきた日台間の良好な国民感情と緊密な実務関係を礎として、台湾側各界との相互信頼を引き続き強化し、日台間の各種協力を推進し、我が国と台湾の人々との間の友情が、時代を超え、世代を超えて、いつまでも瑞々しい輝きを放ち続けるよう強く願っています。

交流協会設立40周年を祝して

経済産業大臣 **茂木 敏夫**



公益財団法人交流協会が設立 40 周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。はじめに、東日本大震災に際し、台湾の皆様から数多くの心温まる御支援をいただきましたことに、心より御礼を申し上げます。その背景には、貴協会が日台間の様々な形の交流を育まれてきたことがあると思います。改めて永年にわたる御尽力に敬意を表します。

この 10 年間で、日台経済の協力関係は一層緊密度を増しております。特に、投資面では、日本から台湾への直接投資残高が 3 倍、一方、台湾から日本への投資も 1.7 倍に増えました。近年では、日台企業間で相互補完しながら第三国進出を行うなど、新しい形でのビジネス展開も拡大しています。

日台の産業連携を更に深化させるためには、地方による交流、中小企業同士の連携も期待されます。その観点では、交流協会と亜東関係協会との間で 2011 年に合意された「日台民間投資取決め」や、2012 年に合意された「日台特許審査ハイウェイ」、「日台民間相互承認取決め」及び「日台産業協力架け橋プロジェクトの協力強化に関する覚書」は、大変重要な成果です。

今後とも、貴協会が、日台間の制度調和や産業連携の進展に向け活躍されることを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

台北事務所代表時代の思い出

公益財団法人交流協会

顧問 池田 維

私は2005年5月より08年7月まで3年2か月の間、交流協会台北事務所代表として台湾で勤務した。はじめの3年間は陳水扁総統（民進党）の時期、あとの2か月間は馬英九総統（国民党）の時期に当たっていた。台湾での勤務は私にとって40年ぶりであった。この地は外務省入省直後の1962年～64年、在中華民國日本国大使館所属の外交官補として中国語研修を行った思い出の場所でもある。

この40年間における台湾の変化は実に大きい。経済規模の拡大、一党支配の戒厳令下から自由・民主・人権を重視する社会への明白な変容、「台湾人意識」の増大、などである。日本との間では、1972年9月、日中国交正常化と同時に外交関係は断絶した。

在勤中、とくにうれしかったことを挙げてみよう。「日本が一番好きだという人の数がアメリカを抜いて一位になった。これは画期的なことですよ」と台湾外交部のある幹部が教えてくれたのは2007年のことである。この時、外交部が委託して行ったアンケート調査によれば、台湾人が「最も親近感を感じる国」として、4か国のなかでは、日本35%、米国33%、韓国10%、中国9%の順となっていた。その後に取りられたいくつかの別のアンケート結果によっても、日本に対する台湾人の親近感是他国を抜いて断然多くなっている。東日本大震災の際、台湾の市民たちから日本に寄せられた義援金が、一国としては世界最大規模の200億円に達したことは、このような台湾の人たちの対日観の表れにちがいない。日本人は「患難見真情」（患難に際してはじめて、ひとの本心がわかる）

という諺の意味を噛みしめることになった。

2007年初頭に、多年の懸案であった台湾高速鉄道がついに完成し、開通にこぎつけたことは日台関係における画期的な快挙だった。一部ヨーロッパの技術との調整、BOT方式という新たな試み、などいくつかの難問を克服し、完成したこの高速鉄道は、日本新幹線技術の初の輸出例である。今日、345キロの台北・高雄間を、無事故できわめて順調に運行されており、その結果、台湾全土が「一日生活圈」に変貌した。

他方、在勤中、日台間で処理・解決の容易でないものもいくつかあった。2007年6月、李登輝氏は総統（1988～2000）退任後3回目の訪日を行ったが、それは、「奥の細道」を探訪する文化・学術を主目的とする旅であった。それまでの2回の訪日と異なり、その時はじめて李氏が首都東京の地をおとずれ、聴衆に対し講演し、記者会見を行えるよう必要な諸措置がとられた。中国はこれまでと同様、いろいろなレベルで李氏の訪日は「台湾独立という政治的活動のために舞台を提供するもの」として、日本政府に抗議した。これに対し日本側は、李登輝氏は総統をやめて何年にもなる一私人であり、かつ、日本文化に精通しており、台湾独立という政治的活動のために訪日するのではなく、問題はないと判断した。

台北における交流協会主催の天皇誕生日レセプションが開催されるようになったのは、2003年からであり、私が在勤中、3回主催する機会を得た。そして、2007年12月のレセプションの際、はじめて台湾側から外交部長（大臣）が出席し祝辞を述べたことに対し、中国の抗議を心配する声も

あった。しかし、他の国々が民間機構を通じ、同様の祝賀行事を台北で行う時とまったく同じ扱いであり、日本の場合にのみ抗議することはとうてい受け入れがたい、と日本側では考えた。以上の2例が示すように、本来、日台関係と日中関係は別物であるが、中国の動きにより、日中間で外交問題になるケースは少なくない。

在勤中、もっとも処理のむずかしかった案件は2008年6月、馬英九政権成立直後に、尖閣沖合で台湾遊漁船「聯合号」と日本の海上保安庁巡視艇が接触し、台湾船が沈没したケースだ。日台関係が一時的にせよ、これほど緊張したことを私は経験したことがない。日台双方の努力により、なん

とか尖閣の領有権と切り離した形で、日台関係全般に深刻な悪影響を及ぼすことなく収拾できたことは不幸中の幸いであった。その時、台湾との間では、尖閣をめぐる問題は、漁業交渉を通じ処理するのが正攻法であることを思い知らされた。

今日、日台関係は外交関係がないという限界をもつにもかかわらず、先人たちの努力により、全体として良好かつ緊密である。ただし、アンケートに示された台湾人の対日観に満足することなく、日本人としてはこのような台湾の人たちに何をすべきか、何が出来るのか、を常に自らに問いかけていく必要があるだろう。

交流協会と日台関係40年

72年 9 月	日中国交正常化、中華民国との外交関係終了
12月	東京で交流協会、台北で亜東関係協会がそれぞれ設立
	交流協会と亜東関係協会、在外事務所相互設置に関する取り決めに締結
73年 3 月	日華関係議員懇談会設立
11月	第1回東亜経済人会議開催（於：台北）
7 月	交流協会と亜東関係協会、民間航空業務の維持に関する取決めに署名
76年 2 月	交流協会と亜東関係協会、第1回貿易経済会議開催
87年 7 月	台湾、戒厳令解除
88年 1 月	蔣経國総統逝去、李登輝副総統が代理総統に就任
9 月	特定弔慰金等支給事務開始（1995.3終了）
89年 3 月	李登輝総統就任
91年11月	台湾、「チャイニーズ・タイペイ」名義でAPECに中国、香港と同時参加
12月	台湾で日本語能力試験開始
92年 5 月	日台ビジネス協議会発足
	「亜東関係協会東京弁事処」が「台北駐日経済文化代表処」に改称
12月	台湾、初の立法委員全面改選を実施
93年 4 月	第1回兩岸窓口機関トップ会談（辜汪会談）（於シンガポール）
11月	台湾、日本のテレビ番組と音楽を解禁
94年 4 月	名古屋空港で中華航空機着陸失敗、264名死亡
9 月	台湾、日本を含む12ヶ国に対する観光目的の短期間滞在査証を免除
10月	確定債務支払い請求に係わる受付業務開始（2000.3受付終了）
95年 5 月	李登輝総統訪米
7 月	中国、東シナ海公海上でミサイル演習を実施
96年 3 月	中国、台湾近海にてミサイル演習
	李登輝総統、初の総統直接選挙で当選
98年 5 月	交流協会、入管法改正を受け、台湾住民に対し従来の渡航証明書に替え査証を発給
	日本台湾学会設立
99年 9 月	台湾921大震災、日本から緊急援助隊派遣、緊急無償援助50万ドル等供与
2000年 3 月	陳水扁氏、総統直接選挙で総統に当選
12月	台湾高速鉄道システム導入につき日本企業連合が契約調印
2001年 4 月	李登輝前総統、治療のため来日
2002年 1 月	台湾WTO加盟
2004年 3 月	陳水扁総統再選
12月	日台航空協定改定、旅客・貨物便の輸送量増加、チャーター便数の制限撤廃
2005年 2 月	愛知万博期間中の台湾観光客向け90日以内の短期滞在査証免除
9 月	台湾観光客への短期滞在査証免除の恒久的実施

12月	交流協会と亜東関係協会で、有害廃棄物の移動及びその処分の規制に関する取決め署名
2006年 8月	駐日台北経済文化代表事務所、那覇支所開設
2007年 1月	台湾高速鉄道、正式開業
8月	交流協会と亜東関係協会で、運転免許証の相互承認取決め署名
2008年 3月	第1回日台観光サミット、2010年まで相互往来300万人目標を盛り込んだ 台北宣言調印 馬英九氏、総統選挙で当選
2009年 4月	日台ワーキングホリデー制度実施合意
9月	日本研究の拠点となる政治大学現代日本研究センター（台北）が設立
12月	駐日台北経済文化代表事務所、札幌支所開設
2010年 4月	交流協会と亜東関係協会で、日台双方の交流と協力の強化に関する覚書に署名
10月	羽田空港－松山空港（台北）間の直行便開設
12月	交流協会と亜東関係協会で、台風等に際する土砂災害の防止及び砂防に係る技術協力に関する取決め署名
2011年 3月	「海外美術品等公開促進法案」が国会で可決 東日本大震災後、台湾各界から約200億円の義捐金を提供
6月	大橋光夫昭和電工取締役相談役が交流協会会長に就任
5月	八田興一記念公園（台南市）が完成
7月	交流協会と亜東関係協会で「東日本大震災からの復興支援・観光促進に関する日台『絆』イニシアティブ」発表
9月	交流協会と亜東関係協会で、日台投資協定を締結
11月	交流協会と亜東関係協会で、日台民間航空取決め（オープンスカイ）に署名
2012年 1月	馬英九総統再選
2月	亜東関係協会会長に廖了以氏が就任
3月	交流協会台北事務所主催「東日本大震災1年追悼・復興レセプション」に馬英九総統、呉敦義副総統ら出席
4月	交流協会、公益財団法人に移行 「日台キズナ強化プロジェクト」で年間300人以上の台湾青少年を日本に招聘 張栄発氏、辜濂松氏が旭日重光章を受章
11月	交流協会と亜東関係協会で、電気製品分野の相互承認に関する取決めに署名 交流協会と亜東関係協会で、日台産業協力架け橋プロジェクトの協力強化に関する覚書に署名

急増する日本企業の台湾投資

野村総合研究所（台湾）有限公司
董事副總經理 田崎嘉邦

日本から台湾への投資件数は、2000年代に入ってから年間200～300件程度で推移していたが、2011年には441件と過去最高を記録した後、2012年1月～11月では563件と、過去最高を既に大幅に更新している。

本稿では、急増する日本から台湾への投資件数の状況を解説すると共に、日本企業にとっての台湾投資のメリットや課題及び対応策について考察する。

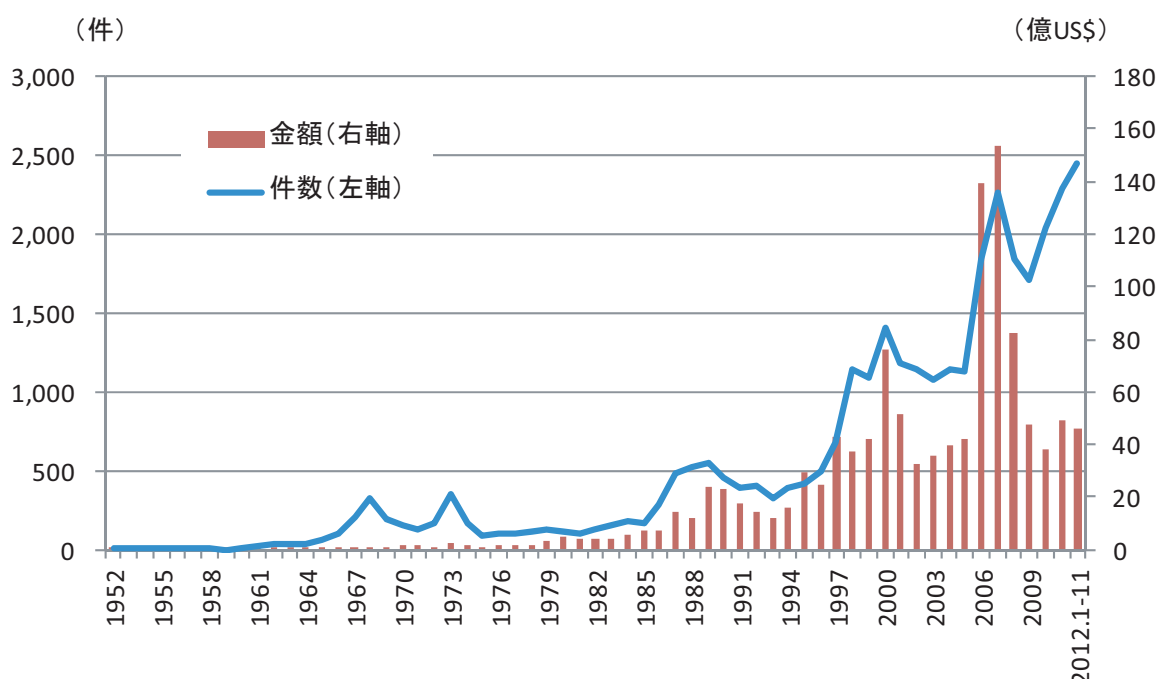
1. 海外から台湾への投資状況

台湾への海外からの投資は、1952年1月～2012年11月までの累計で32,641件、1,205億US\$に達している。投資件数は、1990年代後半から大きく増えており、2008年、2009年はリーマンショックの影響で一旦減少したものの、2012年は1月～11月で2,450件と過去最高を記録している。

（図表1）

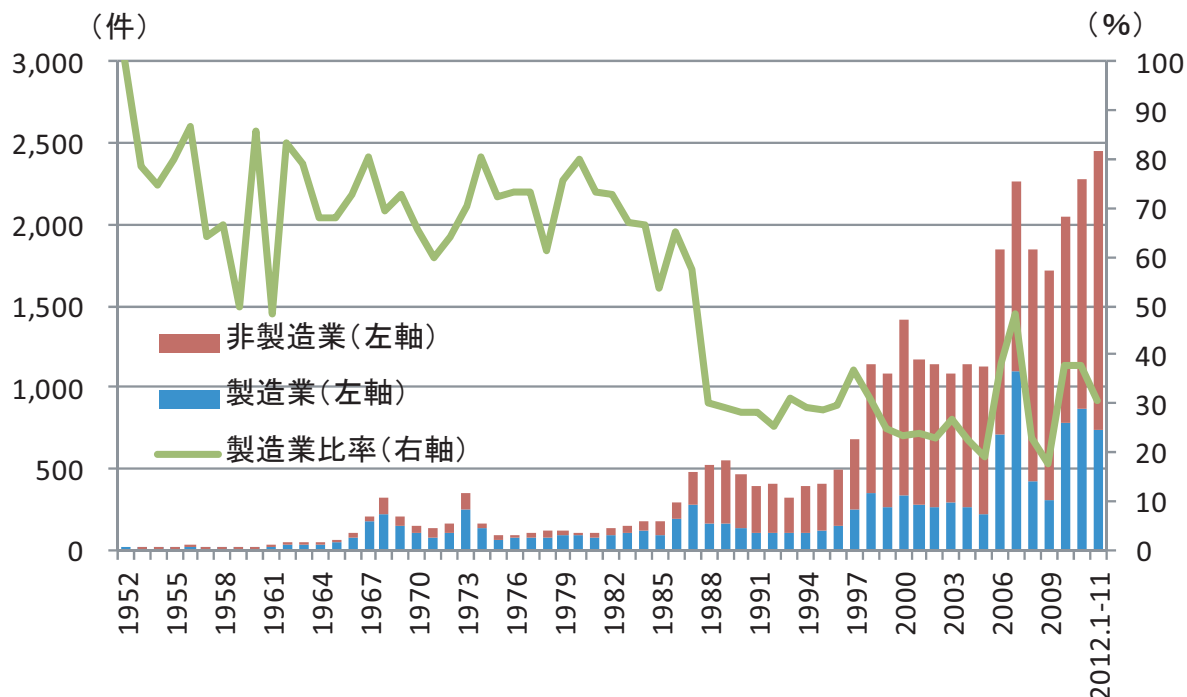
海外からの投資件数を業種別にみると、1987年までは一貫して製造業が非製造業を上回っていた。しかし、1988年に製造業と非製造業の比率が逆転した後は、逆に非製造業による投資件数が製造業よりも多い状況が続いている。非製造業による投資件数は、2006年に年間1,000件を突破した後、一貫して1,000件を上回っており、2012年1

図表1 海外から台湾への投資件数及び金額推移



出所) 經濟部投資審議委員会資料より NRI 作成

図表2 業種別にみた海外から台湾への投資件数推移



出所) 經濟部投資審議委員会資料より NRI 作成

月～11月は1,705件まで達している。一方、製造業の投資件数についても、2005年までは年間200～300件程度であったが、2006年以降は年間1000件近くまで増加しており、2012年1月～11月は745件に達している。(図表2)

次に、国・地域別の海外からの投資件数及び金額の状況を見ると、1952年～2012年11月までの累計件数では、日本からが7,454件で最も多くなっており、全体の25%を占めている。次いで、アメリカが4,984件(16%)、カリブ海英領が4,460件(15%)、香港が3,943件(13%)と続いており、日本、アメリカ以外では、タックスヘイブン地域や中華圏からの投資が多くなっている。

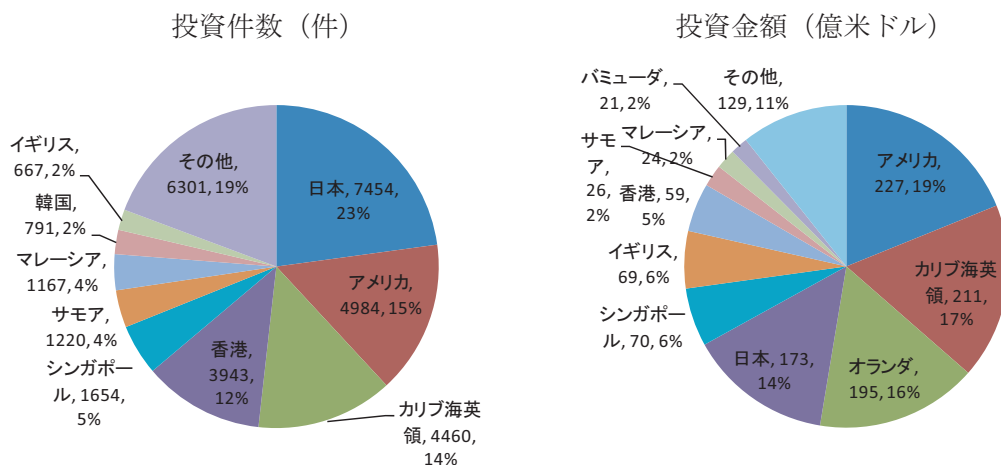
また、累計金額では、アメリカからが227億米ドルで最も多くなっており、全体の20%を占めている。次いでカリブ海英領が211億米ドル(18%)、オランダが195億米ドル(17%)、日本が173億米ドル(15%)と続いており、投資金額については、アメリカ、日本以外では、オランダやカリブ海英領、サモア、バミューダ等のタックス

ヘイブンヘイブン地域が上位に並んでおり、投資ファンドや台湾系企業の投資会社による投資が多くなっているものと思われる。(図表3)

一方、2012年1月～11月の投資件数と金額をみると、累計投資件数と同様、日本からが563件と全体の23%を占め、最も多くなっている。次いでカリブ海英領が301件(12%)、アメリカが264件(11%)、香港が247件(10%)と続いている。また、数は多くないものの、マレーシアやインドネシア等の東南アジアに加え、インドからの投資件数も41件存在することが注目される。

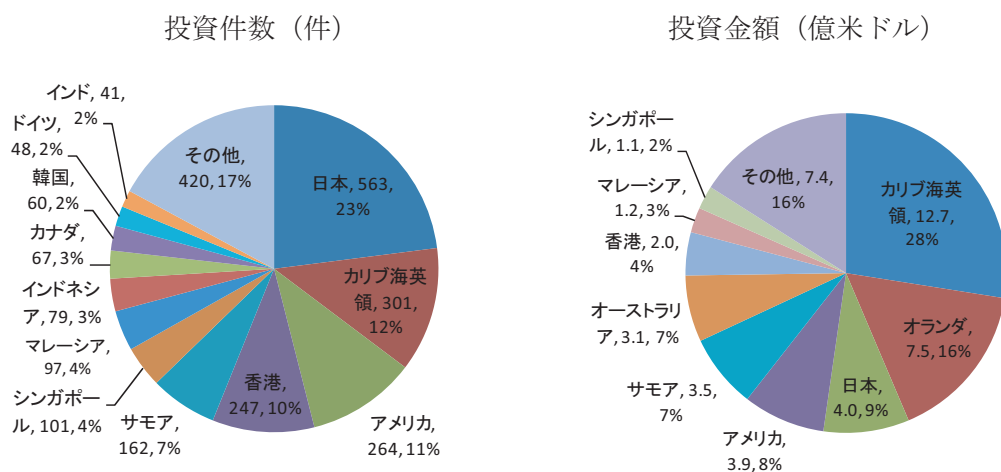
投資金額では、カリブ海英領からが12.7億米ドルで最も多くなっており、全体の28%を占めている。次いでオランダが7.5億米ドル(16%)、日本が4.0億米ドル(9%)、アメリカが3.9億米ドル(8%)、サモアが3.5億米ドル(7%)と続いており、タックスヘイブン地域やオランダ等からの投資が過半を占める状況となっている。(図表4)

図表3 国・地域別の海外から台湾への投資件数及び金額累計（1952年～2012年11月）



出所）経済部投資審議委員会資料より NRI 作成

図表4 国・地域別の海外から台湾への投資件数及び金額（2012年1月～11月）



出所）経済部投資審議委員会資料より NRI 作成

2. 日本から台湾への投資状況

1) 日本から台湾への投資推移

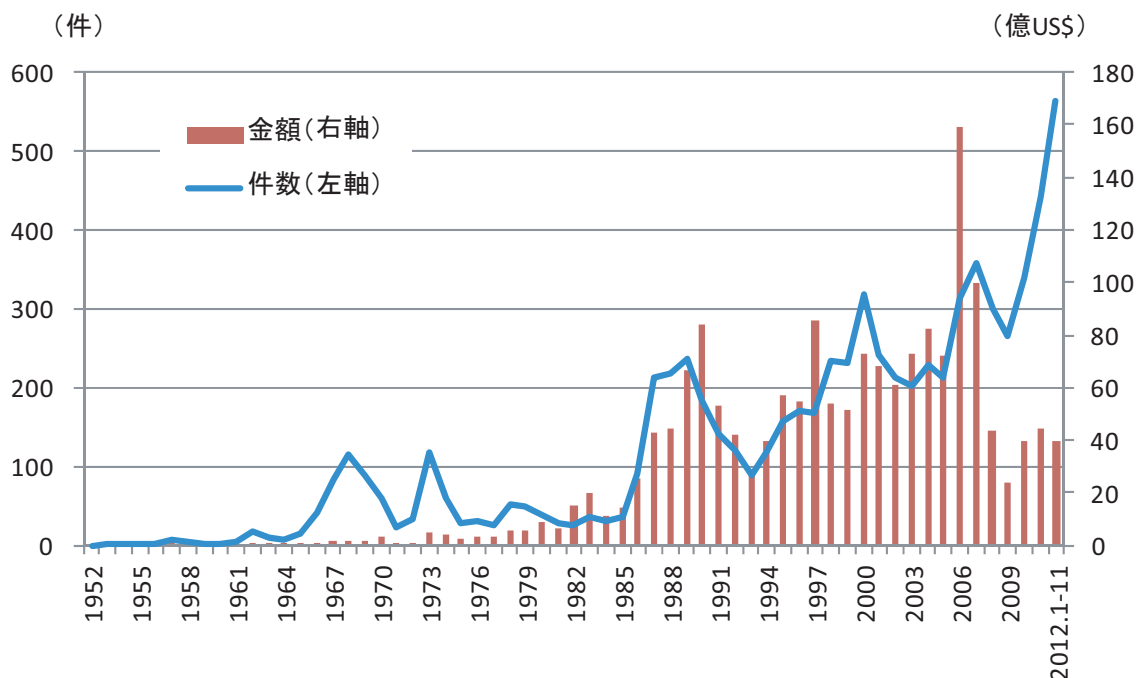
日本から台湾への累積投資件数及び金額は、1952年～2012年11月で7,454件、173億US\$に上っており、投資件数で第1位（25%）、投資金額で第4位（14.6%）となっている。

このように、台湾にとって日本は非常に重要な投資元となっているが、その推移をみると、最近5年間で注目すべき変化が見られる。2007年以降やや減少傾向であった投資件数及び金額が2010年に再び増加に転じ、特に投資件数は、2011

年には441件、2012年1月～11月には563件と、急増しているという点である。これは、製造業による投資が再び増えていると共に、特に2012年は非製造業による投資が非常に多くなったためである。（図表5）

なお、投資金額については、2008年以降4億米ドル程度に止まっているが、これは非製造業による投資の増加等によって1件当たりの投資金額が小さくなっているという理由以外に、台湾内で資金調達して投資を行うケースが増えていることが理由として挙げられる。投資審議委員会の統計は、海外からの直接投資件数及び金額のため、日

図表5 日本から台湾への投資件数及び金額推移



出所) 經濟部投資審議委員会資料より NRI 作成

本からの送金を伴わない投資は集計対象外となる。このため、既に台湾で拠点を有している企業が内部留保や台湾内の金融機関からの借入等で資金調達を行い投資するようなケースは、統計には現れてこないこととなる。実際、2011年、2012年には日本企業による大型の投資が相次いだ。投資審議委員会の集計に載っていないケースや、載っていてもごく一部の金額に止まっているケースが多々見られる。

2) 業種別にみた日本から台湾への投資状況

近年の日本から台湾への投資件数及び金額の推移を製造業と非製造業に分けてみると、投資金額については、殆ど変化が見られないが、近年急増している投資件数については、大きな変化が見られる。

製造業の投資件数は、2008年は58件であったが、2010年は131件、2011年は200件と急増した。2012年は1月～11月までで158件となっているが、それでも通年で200件近くに達するものと予

想される。一方、非製造業は、200～250件で推移していたが、2012年は急増し、1月～11月までで既に405件と、過去最高を大幅に更新している。(図表6)

2012年1月～11月の業種別投資件数及び金額のうち、最も多いのは卸・小売業となっており、257件、1.7億米ドルと、共に全体の半分近くを占めている。件数で次に多いのは機械設備製造業が58件、専門サービス、科学・技術サービス業が56件となっており、その他のホテル・飲食業や金融・保険業、支援サービス業等も含めて、非製造業が多くなっている。

一方金額では、金融・保険業が3,405万米ドル、建設業が3,342万米ドルと続いている。上位3業種がいずれも非製造業となっているのが2012年の特徴であるが、その後は、機械設備製造業、電子部品製造業、科学製品製造業等と、製造業が続いている。(図表7)

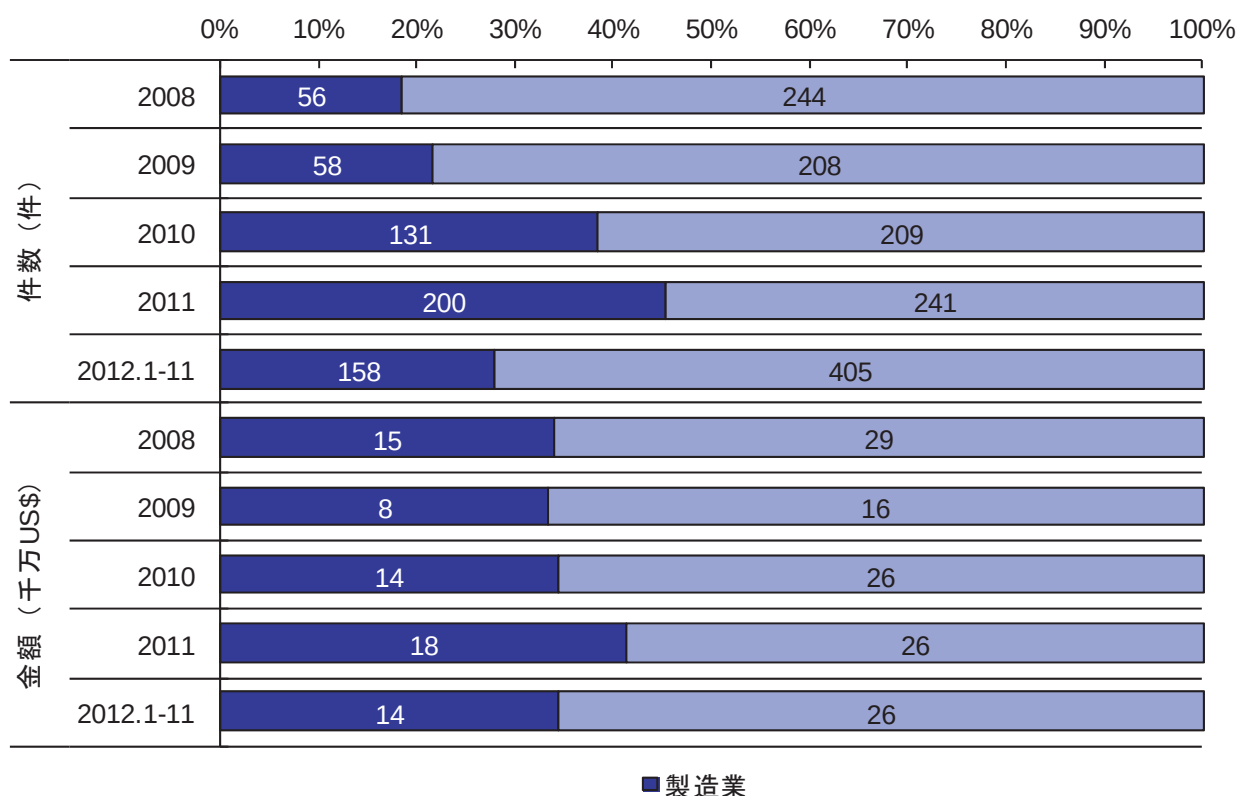
3. 2012 年の日本企業の台湾進出状況

これまで見てきたように、2012 年は日本から台湾への投資件数が急増し、2011 年に続いて 2 年連続で過去最高を更新した。特に、卸・小売業や飲

食業、専門サービス業等の非製造業による投資が活発であったが、製造業による投資も機械設備製造業や電子部品製造業等、2011 年に続いて堅調に推移している。

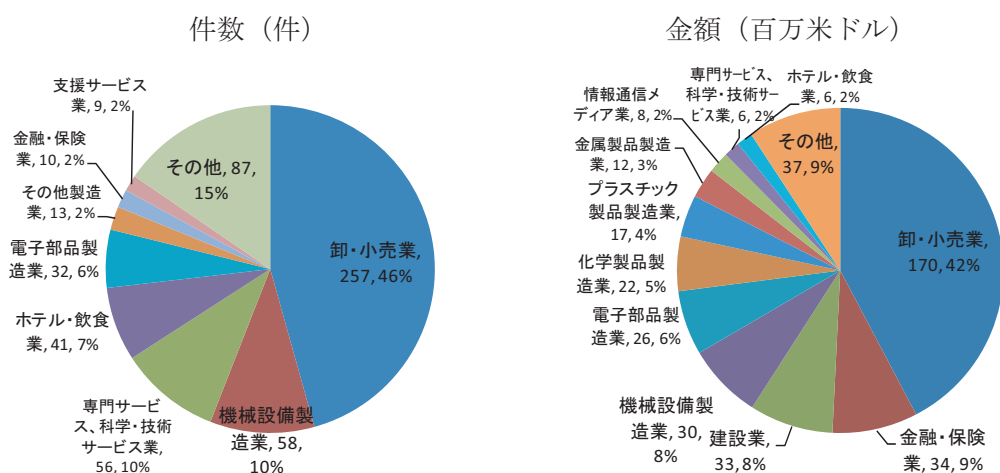
こうした近年台湾に進出する日本企業は、「半

図表 6 業種別の日本から台湾への投資件数及び金額推移



出所) 經濟部投資審議委員会資料より NRI 作成

図表 7 日本から台湾への投資件数及び金額 (2012 年 1 月～12 月)



出所) 經濟部投資審議委員会資料より NRI 作成

図表 8 2012 年に台湾に進出した日本企業例

業種	企業名	投資形態	投資内容
化学	荒川化学工業	合弁	新種樹脂「POMIRAN」の生産ラインを設置。半導体産業等向け。
化学	フジミインコーポレーテッド	独資	半導体製造プロセスにおける研磨材の製造工場を設立
化学	ナミックス	独資	半導体用封裝材料、接合剤の生産工場を建設。
半導体装置	高岳製作所	独資	半導体向け三次元検査装置の販売拠点開設。将来的に派生製品の製造販売拠点とすることも計画。
機械	和井田製作所	合弁	工作機械の工場を建設し、パートナー企業の販路も活用して、台湾及び世界市場で販売。
機械	ダイクレ	独資	熱交換器の新工場を設置。TJ パーク初進出企業。
食品	カルビー	合弁	パートナー企業の台湾ネットワークを活用し、台湾で自社製品の生産及び販売を実施。
小売	ウォーターダイレクト	独資	日本の天然水の販売会社を設立。海外初進出先として台湾を選択。
小売	再春館製薬所	独資	化粧品が無店舗販売のための販社を香港に続いて設立。製品は日本から輸入。
小売	住友商事	合弁	ドラッグストア「Tomod's」の初海外進出店舗を出店。
飲食	力の源カンパニー	合弁	ラーメンチェーン「一風堂」を出店。
飲食	モンテローザ	独資	白木屋を出店。海外進出先としては4カ国、地域目。

出所) 各社公表資料等より NRI 作成

導体や液晶等の台湾の顧客向け製品の製造、販売を行う企業」「台湾で自社製品の生産を行い、世界市場で販売する企業」「親日的な台湾一般消費者向けの事業展開を行う企業」の3つのタイプに大別される。

1つ目のタイプは、台湾に集積している半導体や液晶、LED、太陽電池等の企業向けの電子材料や装置の製造販売を行う企業である。このタイプは、図表8に示した荒川化学工業やナミックス、高岳製作所等、化学製品製造や設備関連メーカーが主体となる。台湾には半導体や液晶等の関連台湾企業の工場が集積しており、これらの企業は、従来は日本からの輸出で対応してきたが、円高の影響や日本国内での需要減少のため、台湾での生産拠点設立に踏み切った、というものである。

2つ目のタイプは、工作機械や設備等の製造メーカーである。図表8で示した和井田製作所やダイクレが該当するが、これらの企業はコストを抑

えつつ製品を生産し、台湾内だけでなく、中国を始めとする世界市場向けに製品を販売していくことを目的としている。台湾における技術力を有するサプライヤの集積を活かしたコストダウンや、台湾企業と組むことによる世界市場への販路の開拓といった狙いがある。

3つ目のタイプは、図表8に示したウォーターダイレクトやTomod's、一風堂、白木屋といった小売・飲食業に加えて、2012年はWebデザインやソフトウェア開発等のインターネット関連企業が多かった。小売・飲食業については、親日的な民族性に基づく「日本」自体がブランドになる市場の利点だけでなく、中国や東南アジア市場へのゲートウェイとして、台湾で事業ノウハウを蓄積することやパートナーとの関係を強化することを目的としていることが多い。今年増加したインターネット関連企業については、台湾では同分野における規制が殆ど無いことも大きな要因となっ

ている。中国ではインターネット関連事業に関する規制が数多くあるが、台湾では通信事業そのものを行わない限り外資規制や事業免許規制等は存在せず、事業を行う上で問題となる表現上の自由も十分に確保されている。このため、最初の海外進出先として、台湾を選択するケースが増加している。

4. 台湾への進出メリットと難しさ

3で述べたように、2012年も数多くの日本企業が台湾に進出し、それらは主に3つの進出タイプ及び業種に分けることが出来る。ここでは、近年台湾への進出が多い3つの業種毎に、台湾での事業展開のメリットと難しさを整理する。

1) 電子材料及び関連設備メーカー

電子材料及び関連設備メーカーの台湾進出は、台湾が強みを持つ半導体や液晶、LED、太陽電池等のメーカーやノートPCや携帯電話等の組立企業向けの部品や材料、設備等を製造する工場や技術サポートセンター、開発センター等の開設となる。この狙いは明確であり、台湾に顧客がいるためである。

台湾に顧客がいても、これまで生産拠点を台湾に設けない企業も多かったが、円高や日本国内での需要減少に伴い、輸出では対応しきれなくなってきたため、最近、台湾に生産拠点を新設するケースが増えている。但し、電子材料関連メーカーによる工場建設は増えているが、検査装置や製造設備製造メーカーによる工場建設は、未だ多く無い。これは、装置や設備メーカーの工場設置には技術力を有する部品サプライヤの集積が必須となるが、日本と同じレベルのサプライヤ群を台湾で見つけることが出来るかどうか分からない、という課題があるためと考えられる。しかし、台湾には金属加工や精密加工等の技術力を有する中小企業集積が存在するため、日本の半導体や液晶等の検査装置

や製造設備関連メーカーの台湾進出も、これから増えてくるものと思われる。

他方、2012年2月にJSRが研究開発センターを開設したように、R&Dセンターを設立する動きも出てきている。また、台湾企業や工業技術研究院等の政府機関との共同研究を行う企業も増えている。台湾の半導体や液晶、LED等の産業は世界をリードしており、これらの企業向けの新製品の開発を台湾で行うことのメリットは大きい。それに加えて、台湾政府は、台湾での研究開発機能の強化に力を入れており、研究開発向けの補助金や優遇税制制度も数多く設けていると共に、台湾の法律はバイドール法に準拠しているため、政府資金を受けて研究開発を行った成果は民間企業に帰属する。こうしたことも、日本企業が単独又は台湾企業や政府機関と共同で研究開発を行うメリットとなろう。

これらの企業が台湾に進出する際の大きな懸念材料は、技術流出の問題である。台湾に設立する工場で製造する製品は世界最先端の台湾企業向けであるため、当該企業にとっても最先端の製品であることが多く、技術流出をいかに防ぐか、という点が重要な課題となってくる。このため、これらの企業が台湾に進出する際には、独資の形態を取ることが多い。仮に独資の形態を取ったとしても、同分野では世界的に高いシェアを有する日本企業が多いため、顧客である台湾の半導体や液晶、LED等のメーカーとの販路に困ることは無く、これまでの輸出形態で既に販路も出来上がっているため、販路を期待して台湾企業と合弁会社を設立する必要性も高くない。なお、技術流出の問題については、2011年11月に全面改定されて罰則規定も含めて厳格化された台湾の専利法（日本の特許法に相当）の存在や、2012年4月に締結された日台特許ハイウェイ覚書に基づく日本で取得済みの特許の台湾での特許取得迅速化によって、法的にも保護される環境が整ってきている。

2) 工作機械や工場設備製造メーカ

工作機械や工場設備製造メーカの台湾進出は以前からあったが、近年も引き続き増加している。これらの企業が台湾に拠点を設ける主なメリットは、コストダウンと販路開拓の2つとなる。

コストダウンにおいては、台湾にある金属加工や精密加工等の技術力を有する企業集積や台湾企業のローコストオペレーション能力が重要なポイントとなる。台湾には、台中や桃園、高雄等において、伝統的に金属加工技術を有する中小企業の集積がある。こうした中小企業集積を活かして、台湾内で一定の品質水準を満たした比較的安価な部品の調達網を構築することが可能となる。また、台湾企業と合併を組む場合は、当該企業が有する「モノづくりのコストを抑えるノウハウ」を活かして、生産コストを下げることも可能となる。

一方、販路については、台湾企業が有する中国やその他地域への販路を活かすことができる。台湾の工作機械メーカ等は、既に中国に工場を有している企業も多く、中国に進出している台湾系企業だけでなく、欧米系企業や中国地場企業等、日本企業では取り引きすることが難しい日系以外の企業にも、サプライヤとして入り込んでいる企業が多い。また、台湾は世界第3位の工作機械輸出額を誇っており、台湾内で生産された工作機械の半分が輸出され、中国だけでなく、米国や東南アジア、インド、ロシア等の新興国市場にも数多く出荷されていることから分かるように、台湾企業は中国のみならず、世界中に販路を有している。こうしたことから、台湾企業と組むことで、日本企業単独では開拓することが難しい販路を構築することが出来るようになる。

こうしたメリットを活かすために、この分野での日本企業の台湾進出では、台湾企業との合併形態を取るケースも多い。台湾企業との合併は、多くのメリットをもたらすが、同時にリスクも存在する。

リスクの1つは技術流出である。合併先の台湾企業に技術だけを吸い取られては、合併会社を立ち上げる意味は無い。このため、例えば、工作機械に用いるコア部品については引き続き日本で生産する、或いは台湾ではミドルクラス以下の製品を生産してハイエンド製品は引き続き日本で生産する、等といった方策を取ることが考えられる。

3) 小売・飲食業

小売・飲食業にとって、一定の所得水準を有する中間層が多数を占める2300万人の台湾市場は、決して小さくは無い。このため、台湾において一定規模の事業を行いつつ、ノウハウを蓄積して、中国や東南アジア等の巨大市場に参入する、というのがこれらの業種の一般的な台湾活用のメリットである。

2012年は、既に他国・地域に進出済みの日本企業の台湾進出も目立ったが、日本のイメージが非常に良く、日本の製品や店舗であること自体がブランドとなる台湾は、これまで海外には未進出の日本企業の海外初進出先として魅力的である。しかしながら、台湾で事業を行うに当たっては、日本と全く同じやり方では通用しないことも多く、一部はローカライズ化が必要である。例えば、店舗オペレーションや広告宣伝方法、食品やメニュー等、台湾の消費者や従業員に合うように変更や追加を行わなければならないことは意外に多い。こうしたローカライズを行うことで、台湾市場に合う事業ノウハウを蓄積した上で、中国や東南アジア展開を行っていくことが良いであろう。

また、台湾を活用するメリットとしては、パートナー企業や人材も挙げられる。台湾企業は中国や東南アジア市場で積極的に店舗展開を行っている企業も多く、地元政府や企業等とのコネクションも含めて、既に強力なネットワークを有している企業も多数存在する。例えば、2012年に台湾証券市場に上場した注目企業は、中台でステーキハ

ウス等を展開する王品、85度Cというコーヒーションショップを展開する美食達人等、中国市場で積極展開を行っている飲食関連企業であり、2013年1月末にも、中国での積極展開を計画している大手小売企業である誠品生活が店頭上場する予定である。また、台湾での事業展開過程で成長した台湾人スタッフを中国事業展開時に活用できることも大きなメリットである。実際、モスバーガーは、中国市場進出の際、数多くの台湾人スタッフを中国に送り込み、中国事業立ち上げをスムーズに進めている。

更なるメリットとしては、近年急増している中国からの観光客が挙げられる。これまで中国の観光客の台湾への来訪は認められていなかったが、これが2008年に解禁された。当初は中国側の都市を限定した団体観光旅行のみの解禁であったが、その後団体観光旅行は中国全土から可能となり、2011年には個人旅行も解禁された。これに伴い、2007年にはゼロだった中国からの観光客が2011年には178万人まで増加し、2012年は1月～11月で既に236万人に達している。こうした急増する中国人観光客向けのアンテナショップ的な位置づけも考えられよう。

以上のように、小売・飲食業にとって、台湾進出はメリットが多いが、同時に注意しなければならないことも存在する。まず指摘したいのは、競合の多さである。これは日本文化への親和度が高いことの裏返しであるが、日本企業、台湾企業問わず、「日本ブランド」をウリにしている店舗が非常に多いという点である。また、台湾人は、年間130万人以上日本に行っているため、日本のことを良く知っている人も多く、こうした目の肥えた台湾消費者に対して、どう他社と差別化を図って特色を出していくかが問題となる。

次に、出店場所の確保の問題である。台湾の不動産価格は、この10年で2倍以上に上昇しており、商業用店舗賃料の上昇も続いている。香港や

シンガポールに比べれば、まだまだ割安ではあるが、特に台北市内では、事業採算性を確保できる賃料で出店可能な場所を見つけることが難しくなりつつあることも、現実的な課題として指摘できよう。

いずれにしても、単に親日であるというだけで、安易に台湾市場への参入を考えると、実際の事業展開上、問題が発生する危険性も大きいことから、十分な市場調査や検討を行うことが重要となろう。

4) 政策面からみた台湾進出のメリット

これまで3つの業種に分けて、台湾進出のメリットと難しさを述べてきたが、業種に係わらず、台湾政府は外資企業にとってメリットとなる政策を実施している。

台湾政府の政策として注目されるのは、まず、税率の引き下げが挙げられる。台湾では、2010年に法人税（営利事業所得税）が従来の25%から17%に引き下げられた。17%の税率は、アジアでは香港の16.5%、シンガポールの17%と並んでアジア最低水準となっている。また、同時に2009年には、これまで累進課税方式であった相続税（最高税率50%）を一律10%に引き下げ、中国を始めとした世界中に分散していた台湾人の資金の台湾への呼び戻し、ひいては株式市場や不動産市場、小売市場といった台湾内需に大きな効果を発揮した。

次いで、中国との間の規制緩和が挙げられる。これまで台湾と中国の間では、ヒト、モノ、カネの動きが厳しく制限されていたが、2008年に馬英九政権が誕生した後、これらの規制が大幅に緩和された。その代表例がECFA（中台経済協力枠組み協議）の締結である。ECFAは台湾・中国間の事実上のEPA（経済連携協定）であり、2010年6月に締結された。これにより、2011年1月1日より一部物品の関税引き下げが始まっていると共に、サービス業分野においても、相互進出の規制緩和が始まっている。

また、従来は認められていなかった台湾と中国との間の空路及び海路での直行便の就航が認められ、現在、台湾・中国間の空路の直行便は、中国側 41 空港と結ばれ、週 558 便が運航されている。これによって、従来は香港等を経由しないと往来することが出来なかったヒト及びモノの移動が、極めてスムーズになった。また、先に述べた中国の観光客の來台解禁と増加も大きなポイントである。

更に、中国から台湾への投資解禁も段階的に進められている。従来は、中国資本による台湾企業への出資は認められていなかったが、これも段階的に開放を進めている。これにより、台湾企業と中国企業との連携がより進むこととなろう。また、同時に中国資本による台湾の不動産取得も解禁されており、不動産市況の活性化に繋がっている。

5. 変化する日台企業の連携関係

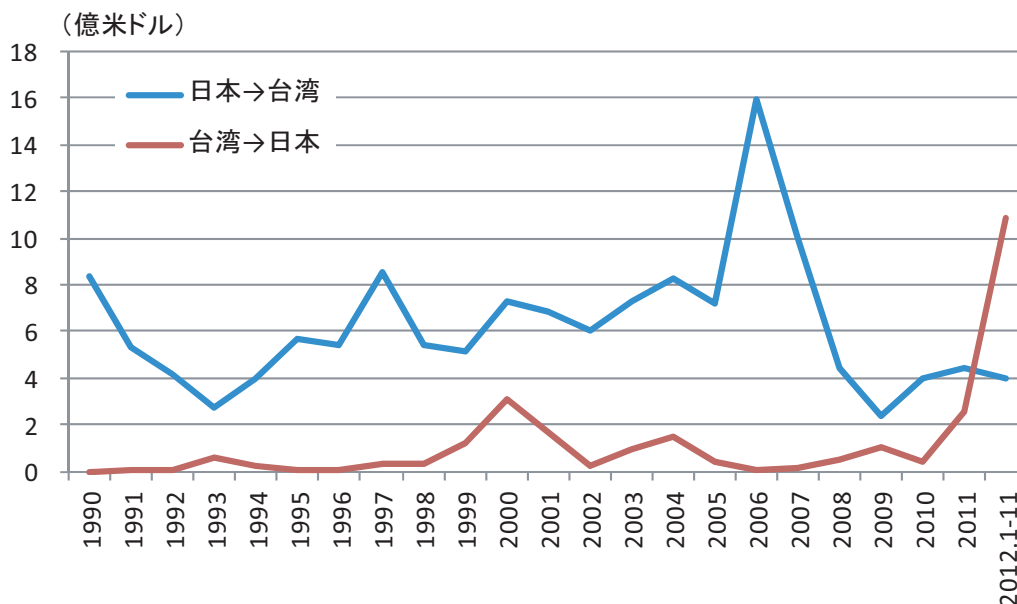
これまで、日本企業の台湾進出状況を見てきたが、2012 年は、日本と台湾との関係で、もう 1 つ重要なトピックがあった。それは、台湾から日本

への投資金額が、日本から台湾への投資金額を初めて上回る見通しだということである。

日台間の直接投資金額は、これまで日本から台湾への投資が圧倒的に多く、台湾から日本への投資は殆ど無かった。しかし、2011 年に台湾から日本への投資が 2.5 億米ドルに増加した後、2012 年は 1 月～11 月までで既に 10.9 億米ドルに達し、日本から台湾の 2.7 倍に達している。(図表 9)

2012 年は鴻海（ホンハイ）精密工業によるシャープへの出資が大きな話題となったが、現段階では、鴻海精密工業によるシャープへの出資は未だ行われていない。しかし、同社の郭会長の個人会社によるシャープ堺工場運営会社（SDP、堺ディスプレイプロダクト）への出資は 2012 年 6 月に既に行われた。また、2011 年に合意に達した台湾の中美矽晶（シノアメリカン）によるコバレントマテリアルの半導体シリコンウェハー事業部門の買収執行も 2012 年に入ってから行われている。更には、台湾の EVERSOLE と日本のウエストホールディングスが共同出資した会社が太陽電池パネル製造工場を愛媛県の松山市に設置した。

図表 9 日台間の直接投資金額の推移



出所) 經濟部投資審議委員会資料より NRI 作成

日本企業にとっての台湾は、これまでは日本企業による台湾での工場設置や台湾企業からの部品調達、台湾企業への生産委託、更には台湾企業への出資や合弁会社設立等、日本企業が主導して行われてきた。しかし、台湾企業による日本企業への出資や日本への投資が活発化してくる中で、両者の関係は、対等なパートナーの関係になりつつあると言えよう。

6. 2013年の日本企業と台湾との関係

日本企業を取り巻く経済環境は、安倍政権に代わってから円高は是正傾向にあるものの、大手メーカーによる生産拠点の海外移転や、人口減少に加えて景気低迷による消費の冷え込みが続く等、懸念材料は数多い。

こうしたことから、2013年も、日本からの台湾への投資は引き続き活発に推移するものと予想される。製造業については、先に挙げた2つの業種が今年も中心となると考えられるが、これまで海外に進出してこなかった中堅、中小企業についても、台湾企業とのアライアンス締結を含めて、台湾進出の動きが活発化するであろう。一方、非製造業については、地方を含めた小売、飲食関連企業やインターネット関連企業に加え、物流関連企業や、これまで台湾にはあまり進出してこなかった不動産関連企業も投資を活発化させる可能性があるだろう。

しかしながら、日本企業が、日本のビジネスモデルをそのまま台湾に持ち込んでも、上手くいくことは難しい。既に述べたように、B2C事業を

展開する日本企業にとって、親日的であり、且つ日本ブランドを高く評価する消費者が多いが高い価値を発揮する台湾市場は、一見、参入ハードルが低いように見える。しかしながら、台湾で成功している日系企業を見ると、日本と全く同じビジネスモデルを持ち込んでいる例は殆ど無く、現地台湾市場に合った現地化が不可欠であることがわかる。そのためには台湾の消費者や競合他社、規制等をきちんと分析した上で、事業戦略や体制形態を作り上げていくことが肝要である。

また、独資或あるいは合弁といった会社形態も大きなポイントである。早期に台湾事業を軌道に乗せ、中国や東南アジア等の第三国に進出するためには、先に挙げたような台湾企業との合弁も有効な手段ではある。しかしながら、日本企業の考え方を理解していると言われる台湾企業であったとしても、合弁事業が上手くいかず、結局独資に切り替えざるを得ないケースも散見される。こうしたことから、合弁相手の探索から提携交渉に至るまで入念に検討しつつ、相手とビジョンや事業内容、役割分担等についてすり合わせを行っていくことが大切である。

これまで見てきたように、日本企業と台湾企業との関係は、既に対等なパートナーとなってきた。また、相互に補完関係を有する部分も多い。こうした中で、台湾の自社拠点や台湾企業を通じて、日本企業がどのように国際展開戦略を図っていくのか、2013年の新たな日台経済関係の動向に注目したい。

草山（陽明山）を歩く

片倉 佳史

台湾の首都として君臨する台北市。その歴史をたどってみよう。今回は台北郊外の景勝地、陽明山を取り上げてみたい。日本統治時代は「草山」を名乗り、避暑地としても知られていた。今もなお、多くの行楽客が訪れる台北近郊の探索スポットである。

戦前からの行楽地・草山

現在、陽明山と呼ばれているエリアは終戦まで「草山（そうざん）」を名乗っていた。台北の北側に位置し、標高 1000 メートル前後の地域を示している。草山、陽明山ともに具体的な山峰を示すのではなく、地域一帯を示す総称である。現在は行楽地としても知られ、週末には山歩きや花見、ハイキングを楽しむ人々で賑わう。

一帯には温泉も沸いている。しかも、日本統治時代は北投や関子嶺、四重溪などと並び、台湾四大温泉の一つにも挙げられていた。湯量が豊富だけでなく、温泉が広範な地域にわたって点在しているのが特色となっていた。硫黄を含み、白濁した湯は多岐にわたる効能を誇っているため、浴場施設やスパリゾートがいくつも見られる。

この地域には数多くの山峰があるが、主峰と目されるのは 11 座である。この地のシンボルと

なっていた紗帽山（634 メートル）のほか、大屯山系の最高峰でもある七星山（1119 メートル）、面天山（997 メートル）、竹子山（1103 メートル）などがあった。

戦前に指定を受けた国立公園

この一帯は戦前からすでに国立公園の指定を受けていた。もともと 1926（大正 15）年に台湾日日新報が実施した「台湾八景」の公募で草山は台湾十二勝の一つとなっており、広く知られるようになっていた。

この公園は正式には大屯国立公園を名乗っていた。1937（昭和 12）年 12 月 27 日に発布された台湾国立公園協会の公示を受け、大屯、新高阿里山、次高タロコの三箇所が正式に指定されている。

大屯国立公園は総面積 8265 ヘクタールで、当時の国立公園の中では最小であった。それでも域内に含まれた範囲は広く、七星山や大屯山のほか、



陽明山は台北郊外の景勝地として親しまれている。中央は独特な山容を誇る紗帽山。



温泉地としてもその名を馳せている。陽明山中国麗緻大飯店の大浴場。



日本統治時代に発行された絵はがき。草山には泉源が複数点在しており、台湾最大の温泉域を誇っていた。



台湾国立公園協会が発行していた地図。北投や観音山も大屯国立公園に含まれているのがわかる。

淡水川（現淡水河）の対岸に位置する観音山も含まれていた。山々が連なる姿は秀麗で、噴火口やカルデラを数多く見ることができた。

また、このエリアには北投から金山にかけて、「金山断層」が走っており、地表の水が地下熱源によって加熱されて温泉となっている。それだけでなく、地殻の隙間から吹き出す噴気孔も見られ、中でも、大油坑や小油坑、馬槽などでは激しい噴出を見ることができた。

さらに、北投の温泉地を域内に含んでいたほか、竹子湖には蓬萊米原種田事務所、大屯山には高山気象観測所があり、淡水河や北麓の海岸線の景観

も知られていた（現在の陽明山国家公園には北投や観音山、淡水などは含まれていない）。

戦後を迎え、1963年には中華民国の国家公園（国立公園）制定の計画が浮上したが、この時は棚上げとなった。正式に国家公園となったのは1985年のことであった。

陽明山を彩る植物たち

陽明山の四季は常に花とともにあると言っている。

陽明山地区は標高がある程度高いこともあり、低緯度な割には冷涼な気候である。植生については温帯性で、また、季節風の影響も強く受けるため、この地における植物の研究は盛んに行なわれていた。

春は最も美しい花の季節とされている。梅や桜、色鮮やかなツツジなどで知られ、中でも緋寒桜は、憂鬱な天候が続く冬の暗さを忘れさせてくれる存在だった。これらの植物は日本統治時代に植樹が盛んに行なわれた。いずれも日本本土より一ヶ月ほど早くシーズンを迎える。その光景は現在にも受け継がれ、大地を美しく彩る様子をカメラに収める人々が集まってくる。

5月には早くも梅雨を迎え、これが過ぎると、夏を迎える。この時期は西南からの季節風が吹くために雨が多い。また、海拔が高いため、天候の変化は大きく、雨上がりの虹の美しさはこの時期の風物詩である。

台風シーズンを経て秋が訪れると、ススキの季節となる。台湾ではススキは北部のみに見られ、ここ以外では新北市の金瓜石や草嶺古道などが名所とされている。また、陽明山の場合、うっすらとではあるが、紅葉が楽しめることも特筆すべきことだろう。

冬は東北季節風の影響を受ける季節である。台北市や基隆市と同様、この時期はそれなりの冷え込みとなり、連日のように降雨が見られる。低温

高湿の状態となるため、霧がよくかかる。また、寒波の到来によって、まれではあるものの、七星山や大屯山などでは雪が降る。亜熱帯に属しながらも積雪が見られることは珍しく、雪化粧した姿を眺めにやってくる行楽客でちょっとした賑わいとなる。

なお、日本人は台湾各地の木材を伐採する際、必ずや植林を励行してきた。ここでは木材の伐採は行なわれなかったが、造林に関しては熱心に進



竹子湖（「湖」は盆地を示す台湾語）には原種田事務所が設けられ、米の品種改良と研究が進められた。日本統治時代の古写真より。



陽明山では換金性の高い花卉栽培が盛ん。「海芋（カラー）」をはじめ、今や地場産業として定着している。

められており、クロマツやアカシア、楓香などが植えられた。これらも陽明山の名物となっている。

草山（陽明山）の歴史

草山という地名は清国統治時代にはすでに文献などに見られる。日本統治時代を経て、戦後も引き続きこの地名は使われていたが、1950年3月に明国の儒学者・王陽明から「陽明山」と改名された。正直なところ、この地と王陽明には何ら関わりはないが、蒋介石率いる国民党政府の独裁時代、こういった地名改正は統治者の交替を台湾の人々に植えつける効果を狙い、各地で行なわれた。

この一帯はかつて硫黄の採掘が行なわれていた。硫黄は火薬を製造する際に用いられ、重宝された。台湾産の硫黄は良質なため、遠く欧米までもその名が知られていたと伝えられる。

硫黄採掘の端緒となったのは清国統治時代、郁永河という人物が台湾北部に硫黄の埋蔵を調査した時に遡る。この時にはすでに現在の行義路（紗帽谷温泉一帯）や陽明山付近まで到達している。その後長らく、火薬製造を取り締まるべく、硫黄の採掘は禁止されていたが、台湾巡撫（知事）の劉銘伝の時代には官営事業として採掘が復活している。

日本統治時代を迎えると、採掘の中心は七星山一帯にあったが、労働者の移入が進み、人口増加が進んだ。この頃は農地の開発も大幅に進み、冷涼な気候を生かした野菜栽培が盛んとなった。現在も陽明山一帯では野菜料理を供するレストランを頻繁に見かけるが、これらは味の良さで知られ、観光客の呼び込みに大きく貢献している。

日本人による草山の温泉開発は明確な記録はないものの、1909（明治42）年頃に始まったと推測される。北投に比べると、やや開発が遅いのは、領台当初、この一帯には土匪が跋扈しており、その対策に追われていたからである。しかし、その



冷水坑の様子。地殻の間から吹き出す噴気孔は域内で数カ所に見られた。日本統治時代の絵はがきより。

後の発展はめざましく、1913（大正2）年には公共浴場が設けられた。そして、旅館のほか、別荘や保養所などが年々設けられるようになり、温泉街が形成されていく。

道路については、投降させた土匪を使って工事が進められた。そして、以下に述べる皇太子行啓の際にも、大がかりな整備が進められた。

皇太子の台湾行啓と御大典事業

前回も触れたように、1923（大正12）年、当時、皇太子で摂政の地位にあった昭和天皇が台湾を行啓している。一行は4月12日に横須賀を出航した後、16日に基隆に到着。その後、27日までの間、台湾各地を巡った。

皇太子が北投を訪れたのは4月25日水曜日午前のことだった。一行は台湾総督官邸（現台北賓館）を出発した後、士林経由で草山に向かっている。草山ではこの行啓のために設けられた貴賓館（2013年現在修復工事中）で休憩をとり、13時5分に北投へ出発している。

皇太子行啓に際しては、いくつもの事業がその準備として行なわれている。草山では道路の整備はもちろんのこと、貴賓館の造営をはじめ、電灯や電話の設置が進められた。

現在、陽明山から金山へ向かう途中、道路の脇に「行啓並御成婚記念造林地」と刻まれた石碑が



道路脇に残る造林記念碑。草むらに埋もれているが、保存状態は良好である。



行啓に際して設けられた貴賓館。日本統治時代の絵はがきより。

残っている。1934（昭和9）年3月に建てられたもので、ほぼ完全な形で残っている。これは七星山や大屯山の一带に大規模な植林を行なうというもので、10年計画のものだった。

なお、面天山には北投の住民によって建てられた「皇太子殿下行啓碑」があったが、これは戦後、国民党政府によって文字が削り取られてしまっている。

景勝地として名を馳せた羽衣園

日本統治時代に発行された旅行案内書などを見ると、草山における温泉の条件は日本屈指のものであるという記述を見かける。その根拠として挙げられているのは、広い地域に泉源が点在してい

ることのほか、湯量が豊富なこと、交通至便であること、暑い台湾において避暑を兼ねられること、付近に清遊に適した歩道が数多くあることなど、枚挙にいとまがない。

草山へのアクセスは台北市内からバスを利用するパターンと淡水線士林駅からハイヤーを利用する場合の二つが知られていた。通常は台北からバスを利用することが多かったというが、後には道路の改良工事が施され、域内を日帰りで一巡できるようになった。

草山の温泉街の中心となっていたのは台北からのバス乗り場一帯であった。バスは巴（ともえ）自動車商会によって運営されており、平日は13往復、日曜・祝日の午前中は30分おきに便があった。バスは士林経由と北投経由があった。昭和12年の時点では、所要時間が前者30分、後者45分となっている。また、巴自動車商会は草山に旅館も経営していた。なお、日本統治時代の痕跡は残っていないが、バスが発着する地点は、今も日本統治時代と同じ場所である。

陽明公園についても紹介しておきたい。ここには日本統治時代、山本義信という人物が所有する羽衣園があった。山本は海山郡（現新北市中和区一帯）にて炭鉱を経営し、後に板橋街長、台北州議会議員などを歴任した人物である。街長時代は地域の水道インフラの整備に尽力したほか、台北帝国大学（現国立台湾大学）に平戸ツツジを寄贈したことでも知られている。

なお、草山という地名は長らくバス乗り場付近を示すに留まっていた。その北側に位置する土地は大庄と呼ばれ、これが山本義信の所有地であった。広さは10万坪におよび、公園のほか、別荘などが並び、松と桜、梅の植樹が施されていた。

羽衣園の敷地内には四箇所の泉源があったほか、随所に溪流や湧水があり、水に恵まれた土地だった。そして、先にも述べたように、桜を筆頭とし、ツツジや桃などが数多く植えられていた。

これらはいずれもその姿を留めており、四季を問わず、訪れた行楽客を癒している。

また、園内には清瀧神社と呼ばれる祠があった。祭神に天照大神のほか、大国主神（おおくにぬしのかみ）、少彦名神（すくなひこなのかみ）、大山積神（おおやまづみのかみ）に加え、瀬織津姫神（せおりつひめのかみ）を祀っていた。

瀬織津姫神は災厄拔除の女神であり、祓神や水神として知られるが、人間が山野を切りひらいて自然を破壊する罪を自らが負って人々の難を救うという神でもある。主神はあくまでも天照大神だったが、瀬織津姫神もまた、重要な祭神であったことは疑いない。

現在、清瀧神社の拝殿や本殿の痕跡は残ってい



陽明山は花の名所として知られている。桜や梅と並んでツツジの名所にもなっている。これを台湾に持ち込んだのは羽衣園の所有者・山本義信であった。



現在は陽明公園と呼ばれている羽衣園。ここには大きな花時計があり、記念撮影を楽しむ人々が集まっている。

ないが、鳥居がわずかに残されている。

陽明山教師中心—旧草山衆樂園

台北から路線バスに揺られて陽明山へ向かう。古くから台湾指折りのいで湯だったこともあり、数多くの湯治客が訪れていた。保養所や別荘が多かったため、活況という意味においては地味な印象だったというが、やはり温泉地としての知名度は高かった。

バスが陽明山に到着する前、かつて衆樂園と呼ばれていた公共浴場がある。ここは台湾屈指の娯楽施設で、旅行案内書では必ず紹介されていた。この建物が竣工したのは1930（昭和5）年10月31日のことである。正式にオープンしたのは同年の11月25日だった。その後、台北近郊の景勝地として草山の名が広まっていくと、この建物も絵葉書などの定番の構図となっていった。

竣工時、各メディアはとりわけ大きな扱いでこの建物を報じた。敷地面積は3614坪、建物は564・8坪というもので、どっしりとした構えを見せていた。用材はこの一帯で切り出された安山岩が用いられ、落ち着いた色合いとなっていた。石塊を組み合わせた壁面や広々とした館内など、注目したい箇所は少なくない。

この建物の工費総額は15万3千円と伝えられている。外壁は草山産の硬石が用いられ、鉄筋コンクリート構造、内壁は漆喰塗となっていたという。当時は珍しいリノリウム床となっていたのも特筆される。これは天然素材を用いた建材で、抗菌性が高く、耐久性にも優れていたため、病院や学校、公共建築などで用いられた。日本では1920年頃に最初のリノリウム材が商品化されたと言われ、この建物の場合、日本に出回りだして、すぐに採用されたことになる。こういったところからも、衆樂園の位置づけ、そして台北州の意気込みがうかがい知れる。

設備については、男女それぞれの大浴場、児童

浴槽、ビリヤード室、休憩室、娯楽室、食堂、売店、特別室などがあり、娯楽室には囲碁、将棋、各種図書、新聞、雑誌などを備え、浴客は自由に閲覧できたという。さらに、八畳敷き2室、六畳敷き8室の家族室も設けられていた。

オープン時に報道された台湾日日新報の記事によれば、開館時間は午前8時から午後8時までで、年中無休。入場料は大人（12歳以上）20銭、小人（6歳以上12歳未満）10銭で、入浴だけなら大人5銭、小人3銭だった。家族室の使用料は八畳敷1室80銭、六畳敷1室50銭となっていた。なお、30人以上の団体に対しては3割ないし7割の割引があった。

しかしながら、終戦を迎え、日本人が台湾を去ると、国民党政府はこの施設を敵性遺産という名



陽明山教師中心は堂々とした風格をまとう建物である。現在は教員の研修センターとして使用されている。



この建物には付近一帯で切り出した安山岩が多用されている。日本統治時代に発行された絵はがきより。

目で接收し、温泉浴場としての歴史は途絶えることになる。建物は「陽明山教師中心」という教職員向けの研修センターとなり、管轄も台北市に移された。シンボルとなっていた円形の大浴場もすでになく、現在、建物の中に浴場の設備はない。石造りの重厚な風格に触れることだけが、かつての姿を偲ぶ唯一の手段となっている。

草山行館—旧台湾製糖株式会社招待所

陽明山国家公園内には日本統治時代に建てられた貴賓館も残っている。草山行館は台湾製糖株式会社が所有していた建物である。建坪 549 坪で、正面部分は石造りだが、後方は木造家屋となっている。玄関部は付近一帯で切り出されたという自然石で作られており、威厳を感じさせている。

この建物は私企業が設けた招待所だが、1923(大正 12) 年に摂政の立場で台湾を訪れた裕仁皇太子が立ち寄ることを想定していたという。結果的には皇太子がここを訪れることはなかったが、念には念を入れた造りであったのは言うまでもあるまい。

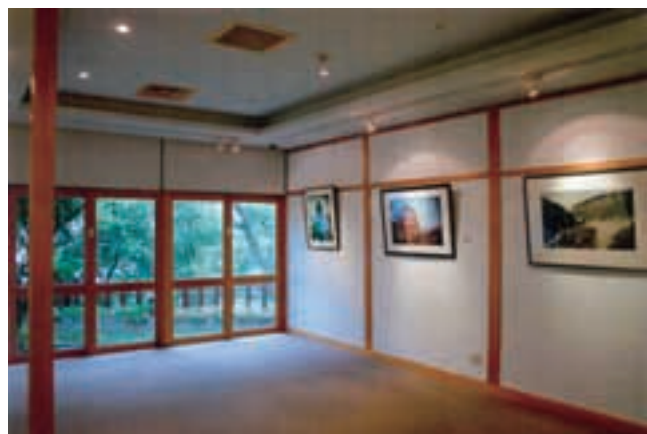
館内は採光と風通しが強く意識されている。こういった保養施設は屋内のどこにいても自然光が差し込んでくるように工夫されており、中庭が設けられていることが多い。このスタイルは日本本土であれば大正時代、台湾であれば昭和初期に建てられた別荘や保養所などに散見できる。

終戦を迎え、この建物も敵性遺産として国民党政府に接收された。そして、1949 年からは蒋介石の住居として使用された。現在の名で呼ばれるようになったのもこの時からである。草山という地名は「陽明山」と変えられたが、この建物については日本統治時代の地名がそのまま付される形になっている。

現在は台北市が管理する古蹟となっており、2003 年からは芸術展示空間として使用されている。しかし、案内板やパンフレットでは蒋介石と



樹林の中に忽然と現れる草山行館。行館とは中国語で貴賓館を意味する。付近には別荘のような家屋が並んでいる。



現在は公共スペースとなっており、絵画展や書画展などが随時開催されている。

その妻である宋美齡が暮らしたという一面だけが取り上げられ、建築や歴史的見地からの紹介は少ない。それでも、陽明山を訪れたなら、ぜひとも足を運びたい歴史の現場ではある。

なお、この建物は 2008 年 4 月 7 日に火災に見舞われ、大部分が焼失している。しかし、蒋介石に関わる歴史遺産という名目で、台北市は火災後、すぐに修復を決め、実行に移したのは記憶に新しい。

草山第三水源地と水管橋

最後に、ほとんど知られることなく、それでいて、今もなお立派に機能を果たしている日本統治時代の遺構を紹介しておきたい。それは陽明山と

北投を結ぶ道路沿いにある水源地で、亜熱帯特有の濃い緑の中に存在している。

日本統治時代、草山には三カ所の水源地が設けられていた。ここはその一つで、海拔 303 メートルの地点にある。北投から草山に向かう道路は草山道路と呼ばれていたが、ここには戦前からバスの便があり、舗装と拡張工事はされているものの、そのルートは今も変わっていない。途中には展望台もあり、素晴らしい眺望が楽しめる。水源地はこの道路から石段を下りていった先にある。

ここは陽明山第三湧泉と呼ばれている。日本統治時代の名称は草山第三水源地となっていた。1925（大正 14）年に計画がたてられたが、使用開始となったのは 1932（昭和 7）年 3 月からだった。

ここは平時は水質保持と安全管理上、閉鎖されており、域内に立ち入ることはできない。訪れる人は極度に少ないようで、私が取材に赴いた際も草が生い茂っており、足元をしっかりと見ていないと危険な感じだった。

水源室は水管橋のたもとに位置する小さな建物である。しかし、その外壁は切り出された安山岩とコンクリートを用いて造られており、堅固な様子が容易にうかがえる。湧水量は非常に豊富で、勢いよく流れ出てくる清水は圧巻なかぎりだった。水道局の資料によれば、水量は毎日 8 千から 1 万 2 千立方メートルあるという。

この水源室の正面にはかつて「湧泉臺」と記された扁額が掲げられていたという。残念ながら、現在はその文字を確認することはできない。ちなみにこれを揮毫したのは台北市長や新竹州知事、専売局長を務めた田端幸三郎だった。

水源室の前には一直線にのびる橋がある。名称は草山第三水管橋といい、送水を目的に設けられたものである。竣工は 1929（昭和 4）年 6 月 12 日。橋の長さは 48.4 メートルで、幅は 1.99 メートルとなっている。橋の上に立っていると普通の橋のように思えてしまうが、足下には水管が埋め



この水道設備が使用されたのは 1932（昭和 7）年からだった。それ以来、台北市民の水瓶として人々の暮らしを支えてきた。



第三水源は水質の良さで知られ、東洋随一の湧泉とも評されていた。濾過を要さずそのまま飲用できたという。1943（昭和 18）年 7 月にはやや下流に第四水源も設けられた。



草山水道系統では三座の橋が設けられていた。ここは其中最も新しい。すぐ脇には滝が見られる。

込まれており、勢いよく清水が流れている。

この橋は松溪という溪流が形成した谷の中にある。橋のすぐ脇には高さ約 30 メートルという滝が眺められる。なお、この河川水は多量の鉱物を含んでおり、河原の石は赤茶色に焼けている、水源室内の湧水とは全く水質が異なっており、飲用はできないというものも興味深い。

この水道施設の設計者は佐野藤次郎という人物である。日本ではダム工学の権威として知られており、台湾水道の父と言われたウィリアム・バルトンの弟子でもある。このように、日本を代表する技術者が台湾の水道の設計に関わっていることも、台湾の歴史をたどっていく上で押さえておき



北投・草山付近の地図（鉄道旅行案内より）

たい事実である。

先述したように、水源の管理上、外部への公開はされていないが、現在はこの水管橋のみならず、各種水道施設が古蹟の指定を受けており、湧水池から水管、貯水池など、全 14 カ所の施設が現役で使用されたまま、保存対象となっている。

片倉佳史 (かたくら よしふみ)

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックは35冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けており、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動も行なっている。著書に『台湾に生きている日本』（祥伝社）、『観光コースでない台湾』（高文研）、『台湾に残る日本鉄道遺産』（交通新聞社新書）など。編著に台北生活情報誌『悠遊台湾』がある。台湾でも『台湾風景印-台湾・駅スタンプと風景印の旅』『台湾土地・日本表情』（玉山社）などの著作がある。昨年5月には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』（宝島社）を手がけた。最新刊は共著『日本人、台湾を拓く。』（まどか出版）。

ウェブサイト台湾特搜百貨店 <http://katakura.net/>

台湾で人気を呼ぶ日本酒 (2012 年 8 月、台北・高雄でのイベント報告を中心に)



日本酒輸出協会 会長 松崎 晴雄

日本固有の文化が“COOL JAPAN”と称され海外で人気を呼ぶ中、日本酒もその一つのカテゴリーとして近年輸出が好調に推移している。親日的な台湾ではかねてより日本酒の消費が盛んで、1990 年代半ばまで輸出量では第 1 位の座にあった。その後米国や韓国が伸張し、2011 年の輸出量では 1680.1kl (金額では 5.3 億円)、国別で見ると第 3 位に後退 (別表参照) したものの、現在でも主要な輸出先の一つであることに変わりはない。

特に 2002 年台湾が WTO (世界貿易機関) に加盟したのを機に、民間業者による輸入販売が解禁されると市場は一変。それまでは公売局 (現在の TTL) といわれる政府機関によって、「月桂冠」「大関」「日本盛」といった灘 (兵庫) や伏見 (京都) の大手ナショナルブランドに制限されていた状況から、「浦霞」(宮城)「八海山」(新潟)「司牡丹」(高知) など日本でもおなじみの地酒が輸入されるようになった。台湾にいながらにして日本と同じく、これらの銘柄がデパートや高級スーパーで購入でき、また日本料理店でも楽しめるようになったのである。

その間に変化してきた市場の状況について、2 年前本誌 2011 年 1 月号において「台湾・日本酒事情」というタイトルで寄稿したが、今回は昨年 8 月台北と高雄の 2ヶ所で行われた「日本酒フェスティバル」の模様を取り上げながら、最新の台湾における日本酒事情、今後のビジネスの行方などについてレポートしたい。

・「台湾・日本酒フェスティバル」について

冒頭に述べたとおり WTO 加盟で市場が一気に開放され、新たに多数の日本酒が台湾目がけて輸出されることになった。元来日本酒に対する需要や関心の高いマーケットではあるが、ナショナルブランドとは商品性の異なる地酒銘柄について、その価値や販売方法などについて決して広く理解されていたわけではなかった。そこで懸案事項として、その違いをきちんと伝えていく場が必要であることが挙げられていた。

それは輸入や販売に携わる台湾側だけでなく日本の蔵元サイドにも強く、その要望を受け高品質な日本酒の普及啓蒙を目的として、台北にて大きな試飲やセミナーを交えたイベントを行うことになった。日本酒に造詣の深いジャーナリスト、料理研究家などが中立的な実行委員会を組織し、台湾への輸出に取り組む国内清酒メーカーや現地輸入業者に幅広く参加を呼びかけて、2005 年第 1 回「酒フェス

ティバル・イン・台北」を開催。以後同様に 2007 年、2010 年と、計 3 回の大きな試飲イベントを実施してきた。私自身 1997 年酒造メーカー有志と「日本酒輸出協会」という任意団体を設立、会長職として世界各地で日本酒の試飲会やセミナー等を主催してきたが、「酒フェスティバル・イン・台北」にも第 1 回より実行委員長として関わっている。

参加者にとってみれば、台湾にはまだ輸入されていない商品も含め、普段なかなか味わうことができない多くの日本酒を飲み比べするのが、このイベントの何よりの楽しみである。特に日本酒にかかる関税が約 140% と高額な台湾では、末端の小売価格が日本国内の 2 倍から 3 倍以上に跳ね上がる。現地の人たちからすれば、日本酒は明らかに非日常的な超高級酒の部類に入ってくるのである。

それが 500 元 (約 1400 円) の会費で自由に飲めるわけであるから、毎回 200 名から 300 名の参加者を集めて行われてきたのも、至極当然のことといえるかもしれない。しかしながら、ただ大勢集

まってくるというだけではなく、年齢層は回を追うごとに若くなり、日本酒に対する知識もレベルが上がっていることが感じられる。また深く酩酊する人もなくスマートにパーティーを楽しもうといった感覚で、参加者のマナーについても、年々向上している感があるのは喜ばしいことである。

さて昨年8月に第4回を開催するにあたって、まずは東日本大震災の復興支援の観点から、東北地方を中心に酒蔵を募ることとなった。結果として全国19社の酒造メーカーと岩手、秋田、山形、福島の4酒造組合、宮城県食品輸出促進協議会の計24団体（日本から渡航したのは11社と宮城県庁の計12団体）が出展。また今回は交流協会との共催ということになり、はじめて台北だけでなく台湾第2の都市である高雄においても、同内容のイベントを開催することとなった。タイトルも新たに「台湾・日本酒フェスティバル」と改称され、2ヶ所とも第1部・酒類業者を対象とした試飲商談会、第2部・日本酒セミナー、第3部・消費者向け試飲パーティーの3部構成で行われた。



台北でのイベント第1部・試飲商談会。飲食関係をターゲットにしているが、参加者は圧倒的に若い人たちだ。

・イベント参加者に見る料飲市場の変化

台北でのイベントは8月25日、会場は台北市内有数の5つ星ホテル「シェラトン台北（台北喜

来登大飯店）」で行われた。

午後2時に開場し酒類業者向けの試飲商談会からスタートしたのだが、第一に感じられたのが、来場者の多くは20から30歳代を中心とする若い人たちであるということ。今の日本にも共通していえることだが、若い飲食店経営者が増加し盛んに若者向けの新しい業態開発を進めていることが窺える。もちろん先述したとおり相当高額な日本酒を扱うわけであるから、業態といっても高級和食店、日本食を取り入れたダイニングバーなどに限られてくる。ただし参加者の名簿や名刺などを見ると、現在台湾で人気になっている焼肉店や、和食以外のレストランの名も散見できる。それだけ日本酒を提供する飲食業者はジャンルを越えて増えてきているのだ。

私が初めて台北を訪ねたのは1998年。当時やその2、3年後の状況を思い出すのだが、高級日本料理店のほとんどは日本人のオーナー、板前、そうでなければ日本で修行したり、台湾の有名和食店でのキャリアを持つ台湾人によって営まれていた。そのたたくまは料亭、割烹、居酒屋等、あくまでも日本の様子を模したものであり、料理についても調理法から盛り付けに至るまで、忠実に日本式を導入するという感があった。

その後2002年WTO加盟で“日本酒自由化”の年を迎えるのだが、ちょうどこの時分よりそのような従来型の日本料理店以外に、インテリアの洗練された和風ダイニングやフュージョン系の料理を提供する店が増加し、時を同じくして台湾における和食市場においても大きな変化が起きたと感じられたのである。多様化する日本酒によってその動きがもたらされたと言え言い過ぎかもしれないが、オーナーたちの意識の中にはステータスを保ち他店との差別化を図っていく上で、高品質な日本酒は戦略商品として不可欠なものになっていったのだろう。その考え方は経営者だけでなく従業員たちにも共有され、成年して間もない現

場で働く若い人たちの間でも、日本酒に対する興味、関心が芽生えていることが感じられる。

今欧米では吟醸酒や純米酒などについて、その香りや味わいの違いを教えながら、日本酒は“新しい感覚の食中酒である”という情報を発信している。古くから日本酒に親しんできた台湾では、あえてそのようなことを行わなくても自然に浸透していこうという考え方もあるかもしれない。しかしながら日々進化していく飲食業界にあって、料理の多国籍化、業態の多様化、飲食店経営者の世代交代は世界的なトレンドである。台湾も同じ傾向にあるわけであって、特に若い層に向けて常にこのような情報発信を進めていくことが重要であると実感した。



第3部の試飲パーティでは、若いカップルや女性同士のグループでの参加も目立つ。

・若い人たちに人気の日本酒

第2部のセミナーをはさんで、午後6時から是一般愛飲家向けの試飲パーティーとなる。こちら第1部と同様に圧倒的に若い客層が多く、特に女性同士2～4名で連れ立って来るグループが目につく。“女子会”という言葉で括られるように、日本では最近女性だけで飲食を楽しむ傾向が強まっているが、台湾においても同様のトレンドが芽生えてきているということなのだろうか。職場の同僚や友人

同士と思われる女性たちが、こぞって着飾って日本酒を飲みに来ってくる光景を目のあたりにして、日本国内以上に好意的に日本酒を受け容れてくれていることが、ありがたくまた頼もしく感じられた。



出典した東北4県の酒造組合のうち、最も出品数が多かったのは秋田県だった。

若い客層が増えているのは、前回第3回（2010年開催）にも共通する現象であった。しかしながらこの時はフェースブックを利用して集客に努めた結果、若年層が多く集まったと理解をしていた。今回の結果を見ていると必ずしもフェースブック等SMSによる集客手段に拠るだけでなく、純粋に台湾の若い人たちの間で日本酒が高く評価されているということが理解できる。

台北での開催日は土曜日で好天に恵まれこともあり、当初予定していた人数を大幅に上回り、第3部だけでも約300名、3部あわせて延べ約600名が参加。今まで3回実施してきたフェスティバルを凌ぐ最大の規模となった。交流協会等のルートによる在留邦人の参加者も決して少なくはなかったが、参加者名簿によると日本人：台湾人の比率はほぼ2：8で、見た目にも地元の人たちが断然多く感じられる。台湾の人たちの間で日本酒が確実に浸透していることを実感した。

・高雄ではじめての大型日本酒イベント

台北での2日後8月27日には、台湾南部の大都市・高雄でイベントが行われた。生憎こちらは月曜日であり、大型の台風が接近中とで一時は開催も危ぶまれるほどで、客足も大いに心配されていた。第1部試飲商談会での流通・料飲関係の参加者は20数名と台北の4分の1程度。輸入業者も多くいろいろな地酒銘柄が出回っている台北に比べると、高雄の市場はまだ発展途上という感じで、製法や香味の違いなどに対する興味がようやく端緒についた段階といった印象である。

実は2003年8月にJETROの嘱託を受けて、自由化後の台湾日本酒市場がどのように変わったのか調査を行ったことがある。高雄市内のデパートやスーパー、あるいは輸入を検討している業者などを回り、販売されている銘柄や価格を調べたのだが、当時は高雄にも台北を通さずに、日本から直接日本酒を輸入する業者が複数見受けられた。

ところが今回市内の漢神（阪神系）、大立（伊勢丹系）という日系のデパート2ヶ所の売り場を見て回った限り、その際見かけた業者のものは見当たらなかった。おそらくは当初想像していた以上に日本酒のマーケットが広がらず、その後輸入を中止したのではないかと推察される。これは台湾に限らず一般的に言えることなのだが、海外で日本酒が定着するかどうかという点については、日本からの距離の遠さや市場人口、あるいは在留邦人の数、市場性の違い以上に、情報量の少なさが影響していると考えられている。

高雄の市場に充てはめてみれば、まずは末端の消費者にとっていろいろな日本酒に接する機会が少ないことである。小売店では先の2店以外に多くの銘柄を揃えている店は少ないし、料飲店においても同じような状況にある。台北に本拠を置く輸入業者の中でも、高雄に支店や倉庫を設けて営業、配達を行っているところはまだないようだ。

流通量に情報量は比例するわけで、なかなか日本酒が浸透していかないのであろう。

ところが台風襲来も何のその、実際蓋を開けてみれば3部あわせて約200名以上が参加し大盛況となった。1部と2部の間に行ったセミナーには予定していた以上の人たちが集まり、用意していた椅子が足りなくなるほどで、同地における日本酒に対する関心の高さを実感することができた。最初に高雄を訪れた時から数えると10年にも満たないが、その間さまざまな流通業者の消長があったのであろう。しかしながらまた新たな人たちの間で、日本酒に対する興味が着々と芽生えてきているのである。

その芽を育てていくためには、日本酒の魅力に触れてもらう機会をどれだけ設けていくことができるかが大事である。つまり今回のようなイベント、セミナーを継続して続けていくことが必要なのだ。高雄市内にある「国立科学工芸博物館」では本年3月31日まで、酒に対する特別展が開催されている。日本酒に関する展示もあるということなので、今まで以上に同地で日本酒への関心が高まっていくことを期待したい。



高雄での第2部・セミナーの様子。（壇上中央が筆者、左がフリーライターで著書「大吟醸100」が台湾でも現地語訳されている藤田千恵子女史、右は通訳の陣匡民女史）

・今後の日本酒ビジネスの展望について

今回2ヶ所でのイベントを通じて、ビジネスと

して日本酒やその周辺に興味を感じているという現地在住の日本人に何名か出会った。新たに輸入を始めるという以外にも、台湾市場進出を目指す酒造メーカーをサポートする業務などに、ビジネスチャンスを見出しているということであった。中には台中に拠点をおく日系の機械メーカーで、新規参入を計画しているという人もいた。

本業とはまったく異なる複数の業種を同時に営むケースは、台湾ではよくあること。若い人たちの間でも人気が出始めた日本酒に、事業として関心を寄せるのも当然のこととうなずける。しかしながら関税率の高さや、別表に見るように上位にあっても他国に比べ輸出数量の伸びが少ないこと、そして一時は雨後のたけのこのように乱立した輸入業者もその後淘汰されたことを考えると、新規の市場参入は決して容易なことではない。

一方数年前より台中郊外で、日本の地酒メーカーの技術援助を得て製造を開始した小さな清酒製造所があり、「初霧」という銘柄で純米吟醸酒などを生産している。こちらは台湾人の経営によるもので、創業後間もないながらも国際的なコンクールで受賞した、台湾北部・宜蘭で製造するウ

イスキー「KAVARAN」のように、本場産に匹敵する存在になれば大いに話題となるだろう。

長い目で見ればむしろ今は台湾の人たちに向けて、日本酒の香りや味わいの違い、複雑な製法から生まれる特殊性やさまざまな料理にも合う汎用性など、じっくりとその奥深さや素晴らしさを伝えていく時期にあるように思う。台北での第2部セミナーでワインスクールを運営している台湾の若い経営者が来ていた。日本酒もワインと同じようにコースに取り入れていきたいという。興味を持ち始めた消費者や、実際に販売に従事する流通、料飲業者の受け皿として、日本酒の知識を学ぶ場を増やしていくことができれば、将来的に大きな市場が育つことになるだろう。

海外における日本酒ビジネスは今や日本人だけのものではなく、その国の人たちにとっても魅力あるものとして捉えられている。台湾でもその動きが出始め、今後その傾向はますます進んでいくことだろう。日本酒業界に携わるものとして、また一人の日本人としてその行方を楽しみに見守っていきたい。

上位5か国の数量（千ℓ）・金額（億円）

順位	国名	2007		2008		2009		2010		2011	
		数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額
1	アメリカ合衆国	3,852.4	34.8	3,843.4	35.4	3,574.9	30.1	3,705.4	31.7	4,070.9	32.4
2	大韓民国	1,069.0	4.7	1,529.3	6.7	1,953.7	8.3	2,589.7	11.7	2,828.2	12.1
3	台湾	1,699.5	5.5	1,626.1	5.1	1,381.1	4.2	1,639.3	5.0	1,680.1	5.3
4	香港	1,006.2	7.1	1,213.2	9.4	1,308.3	10.2	1,436.3	12.6	1,659.7	15.3
5	シンガポール	302.1	2.1	306.0	2.4	377.7	2.8	359.8	3.1	375.3	3.3

（データ出典：財務省貿易統計）

日台青年交流事業

交流協会では、日本と台湾との若者世代の交流促進のため様々な招聘・派遣事業を実施しています。平成 24 年 9 月 2 日から 9 月 9 日まで台湾で日本の人文社会科学研究（歴史・社会科学・経済・政治・外交・法学・商学・教育等）を学んでいる大学生 20 名を現代日本社会や文化に対する理解を一層深めるために広島、姫路、京都、神戸、大阪に招聘しました。

訪日前には、日本の政治、外交、社会情勢等について 2 日間の集中講義を行うとともに、日本では姫路獨協大学における日台の学生による意見交換、また、文化体験では、ホームステイ、茶道、着物等の日本の伝統文化を体験し短期間の日程ながらも多くのプログラムを通じ学術や文化・習慣に触れることが出来たようです。

今回招聘した 20 名のうち、男性 2 名女性 5 名の訪日報告書をご紹介します。

愛すべき日本

政治大学企業管理学科
方嫩伶

まず私は交流協会が私をサマーキャンプに参加させてくれたことに感謝しなければなりません。一年間夢見ていた国に降り立った時、心の中で抱いていた幻想の日本はこの 8 日間で見聞した日本へとはっきりとしたものになりました。感動は言葉では表せられず、ただ日本の全てを貪欲に求めることでこの活動の参加に応えようと思います。

【経営方式】

まず日本・関西地域のコンビニを分析したいと思います。今回の旅行でファミリーマート、セブンイレブン、ローソンを訪れました。それらコンビニエンスストアの経営方式は大きく異なったものでした。

ファミリーマートの外見はとても明るく、店舗の設計もとてもモダンで、都市のモダニズムとその速い生活リズムを強調していました。ターゲッ

トの客層は恐らくサラリーマンです。セブンイレブンは日本では親しみやすい路線を走っていました。どの店舗でもセールを促すポップに満ちていて、それらは天井から地面にまで垂れ下がっていたり、冷蔵庫に貼られていたり、至る所にありました。しかし店内は人が歩くスペースはとても狭く、まるで雑貨店を見ているかのようです。客層の多くは付近の老人や仕事帰りの OL、たまたま通りかかったサラリーマンです。台湾でほぼ独占状態にあるセブンイレブンも温かみのある路線を走っていますが、空間は広く保たれ、現代的な設計は日台で全く異なるものでした。

そしてセブンイレブンの次にくるのがローソンです。ローソンの店舗は主に関西地区にあります。しかし広島、神戸、京都などの場所では繁華街の角地という一等地に店舗を構えています。店舗内は広く商品の種類も豊富で、郵便業務なども行っており、とても利用しやすい環境を整えています。更に多くのサービスを行うと発展する余地も大きくなり、もしかするとセブンイレブンを越えるかもしれません。消費者は主に若者や通勤客などの極一般的の人たちです。（私はこの店名を大前研一著作の『個人経済』の中で初めて見まし

た。当時はまだ日本を訪問したことはなく、本の中に登場する企業にはほとんどそのイメージがなかったために、読み進めるのが辛く感じましたが、今回の旅行を終えてそれらが具体化し、今後は日本の企業管理関連書籍を読む際にはとても大きな手助けとなるはずです。）

総合的に見ると、台湾のコンビニはベンチ等客をもてなす空間を作る店舗が少しずつ広がっており、付近の人々がベンチに座って食事をしたり、おしゃべりしたり、休んだり、仕事の話をする人までもいます。そうやって客数を増加させ、個人の消費額を上げようとしているのです。しかし日本・関西地区でのコンビニにはベンチのような座席はありませんでした。その理由は恐らく土地利用効率と顧客の習慣でしょう。一つは地価が高く、商品を置くスペースを確保することを第一としている、第二に日本人はコンビニを社交活動を行う場として選ばないのだと思います。ですから、日台でその設計が異なるのだと思います。

【都市比較】

日本の街にはどこにもその場所のキャラクターがあり、各々の街はその雰囲気や全く違います。

飛行機で最初に降り立った広島空港はとて小さく、それは広島の純朴さを表しているようでした。私たちはホテルで道を尋ねると、フロントのスタッフが親切にもパソコンで調べてくれて、更にその店に電話をかけて私たちが知りたかった情報を聞いてくれました。距離感を感じさせない広島の人とはとても親切で、日本の好印象を私に残してくれました。

新幹線とともに私たちは西へ赴き、にぎやかな神戸に到着しました。駅の外にはゴミと吸い殻に溢れ、若者はグループを形成し、目つき悪く見知らぬ歩行者を睨んでいました。退勤するサラリーマンは急ぐように道路を横断し、カラオケの店員はサービス券を片手に至る場所で客引きを行って

いました。更にホームレスはバスの待ち合い椅子を占拠し、堂々と道ばたで眠っていました。興味があり客引きの多い通りに行きましたが、23時を過ぎても多くの人がおり、タクシーは歓楽を求める客を乗せてきているようでした。光り輝く看板の下に立ち、酒池肉林の神戸の夜を体感した時、私は突然純朴で静かな広島が懐かしくなっていました。

数百年の歴史を持つ京都はやはりその評判通りでした。至る所に寺社や仏閣があり、それらは五重塔の高さを超えてはいけないという規定まであるそうで、そのためこの街の空の輪郭はとて和むような感覚を与えてくれます。京都の人同様に古都には悠久の気質があり、早くもなく遅くもなく適度な早さで私たちに「ゆっくりとこの街の美しさを見て行って下さい」と言われているような気がしました。江戸時代に建てられた町家に入り、畳や坪庭、縁側や湯船など私は日本文化の薫陶に浸りました。しかし観光景勝地としての京都で私は地元の匂いを感じました。観光客が多い清水寺に行くと周りには多くの台湾人がいたので、聞き慣れた台湾訛りに思わず笑顔になりました。

商業都市大阪にやって来ると、台湾の信義区に戻ったかのように感じました。しかし異なる点は大阪には商業ビルとも調和している大阪城や神社等の建築物があることです。体育の授業で大阪城の周りをランニングしている中学生を見ると、彼らの生活が世界文化遺産に溶け込んでいるようで、とても羨ましく感じました。地下鉄の駅にいた慌ただしくしながらも表情がないサラリーマン、心斎橋で地図を片手に興奮している観光客、ホームで両手に買物袋を下げた女性や老人など、昼間の大阪はとて輝いていました。しかし夜になると東通街には若者が奇抜な服を着て道路の入り口で話をしており、楽しみを求めている男性は無料案内所が蔓延る道へと入って行きました。日

本人は一樣に謹直で己を律していると主張しているものの、それは恐らく日中、外に対してみせる社交的な表情なのでしょう。夜の享樂の時間になると開放的な場面を見ることが出来ます。繁華街の路地には多くのスナックやクラブがあり、そのような歓樂街は恐らく仕事や生活のストレスを解放する場所で、一種現実逃避の言い訳になっているのだと思います。

【日台の差異】

日本の風呂文化は私にとって大きな衝撃でした。台湾では水着を着てみんなと一緒に温泉に入ります。しかし日本式の温泉はまさに一糸まとわぬ姿で一緒に温泉に入ります。今回私は日本でそれを2度経験しました。溪山閣ではルームメイトと一緒に温泉に入りましたが、脱衣所から身体を洗う時までずっと恥ずかしくてバスタオルで体全体を覆っていました。しかし、温泉に浸かると身体が一気にほぐれ、隣に居たNさんやLさんと一緒におしゃべりしたり、ルームメイトともはしゃいだりしました。六甲山YMCAの浴室もとても特別な風景でした。日本の友人たちが自然と服を脱ぎ、身体を洗いながらおしゃべりしている様子はとても特別で不思議でした。「恥ずかしくないの?」「入浴はプライベート」という考えを持っていた私は日本の浴室で再度このカルチャーショックを体験したのです。

しかし旅行とは自己の再発見でもあります。新しい事に対して好奇心を抱くものの試してみたくないという思いが、いざ試してみたらその楽しさが理解でき、もっと試してみたいくなります。恐らく入浴とは日本人にとって一般的な付き合い方であり、裸での交流は日常生活における人間関係の制約や社会に於ける距離感を補うものであるのだと思います。

他に、ビニール袋の使用問題をここに取り上げます。日本ではドラッグストアやコンビニ、土産



こちらは広島平和記念資料館内の店舗で働いているおばあさん。温かく優しく話しかけてくれました。

物店で買物をする際、店員は無料のビニール袋を客に渡します。日数と客数を考えるととても膨大なゴミ処理問題を引き起こします。台湾ではビニール袋は早くから有料化され、消費者が使用する機会は減少しています。私はこの事に対してとても懐疑的な態度でしたが、日本のビニール袋はとても薄く、使用してもすぐに破れてしまうことに気づきました。それでインターネットで資料を調べると日本のビニール袋の多くが燃やしても毒性物質を放出しない種類のものだと知りました。

【感想】

出発前台湾での授業の多くは政治関連のもので、最近の尖閣諸島問題等がメインでしたが、それにより日台中の三角関係の複雑さを少し理解することができました。主催団体の周到的な気遣いに感謝致します。

今回は私にとって初めての日本訪問で、座禅・温泉・茶道・神社参拝・居酒屋体験・関西の学生との交流等初めて外国語に身を置く体験でした。自分の語学能力でのみ相手とコミュニケーションを図らなければならず、その状況が私にもたらした身震いは相当なものでした。しかしそれにより私は日本語検定に合格しようという目標が芽生え

ました。今回のサマーキャンプは私と日本を繋いでくれた架け橋です。それにより、私は日本文化に対してより強い興味を持ちましたし、より深く日本に関して掘り下げたいという多くの動機が生まれました。

最後に再度今回の旅行の手配及び随行をしてくれたNさんとSさん、そして劉団長と交流協会のLさんに感謝します。ありがとうございました。

夢のような充実した日本旅行

国立高雄第一科技大学 応用日本語学科
柯伯翰

今回「2012年日本研究支援サマーキャンプ」に参加できたことをとても光栄に思います。交流協会と政治大学当代日本研究センターが主催するこの活動は先に政治大学で2日間の授業に参加しました。初日は「目下の日台関係の状況」と「日台関係の回顧と展望」に関する授業で、私は現在の日本の政局や日中関係が経済・貿易に於いてお互いに依存している状況などを学びました。また、日本と台湾との関係は中国大陆と比べると明らかに密接であることや尖閣諸島問題に於ける日中関係についても理解しました。最近交流協会によって台湾で実施された調査報告書によると、台湾人は親しみのある国や近い国（アメリカや中国を含む）に日本を選んでいるのです。2日目は「日台関係と日米安保体制」の授業で、日米安保と台湾海峡の安全の歴史について学びました。日台は断交して40年になりますが、台湾という場所に於ける戦略価値と日本の経済大国の本質から見て、台湾海峡の平和と安定は日本の重大な安全戦略利益や両国の緊密な経済関係に影響を及ぼします。それゆえに、私たちは既に「運命共同体」になっているのです。



続いて日本の部分に関してです。この8日間は本当に夢のように素晴らしい旅でした。初日広島空港に降り立った際、歴史と文化が溢れる街だと感じました。空港はデザイン性があり、宿泊した広島リーガロイヤルホテルはとても高級でした。2日目から正式に充実した旅が始まりました。まず広島原爆ドームと平和記念資料館を見学しました。そこでは当時広島が原子爆弾を投下された惨状を学びました。原爆が投下された爆心地ではここは悲劇が起こった場所であり、同時に人類が原子爆弾を開発する上での犠牲の地であることを実感しました。続いて宮島「厳島神社」です。さすが世界文化遺産です。典型的な日本の神社の風貌から荘厳な雰囲気漂っていました。その後路面電車に乗って八丁堀という繁華街へ行きました。新鮮に感じたのは台湾では見られない道路を走る電車です。その夜は居酒屋で食事をしました。日本のビールはとても濃く、香り高い気がしました。それに飲み放題でした。興味を引いたのは「日本式乾杯」と「台湾式乾杯」が異なることです。日本式乾杯は一口飲めばいいですが、台湾式乾杯は底が見えるまで飲み干すことを言います。ここからも文化的相違点が生み出される面白さを見て取ることが出来ます。

3日目は日本の新幹線に乗る体験をし、姫路へ

と行きました。新幹線の外観は流線型で、内装は台湾の新幹線と大差ありませんでした。しかし走りだすととても穏やかで快適でした。姫路獨協大学との交流で特別だったことは姫路獨協大学は現在私が勉強している高雄第一科技大学と姉妹校であったことです。交流はグループに分けて行われ、各グループそれぞれテーマが与えられ、討論しながら交流して行きます。しかし台湾の学生は準備十分で臨んでいましたが、日本の学生はほとんど準備していなかったように感じます。私たちの日本語は日本の学生の中国語に比べると流暢でした。その後世界遺産である「姫路城」を参観しました。城壁が高く聳え、古代の技術で如何にして石でこんなにも壮観な城壁を作り上げられるのか想像するのも難しく、まさに神業と言えるでしょう。

4日目は阪神淡路大震災の記念館、人と未来の防災センターを見学しました。そこで日本の防災技術と防災意識、地震に対する準備や耐震構造や免震構造をによって被害を最小に押さえる技術を学びました。午後は抹茶の点て方とパフェ作りを体験し、清水寺と八坂神社を歩きました。昼食前に現地の日本式温泉旅館に到着しました。男性は甚平、女性は浴衣を着て夕食を頂きました。嬉しいことに、旅館の女将さんは私たち20人の台湾人に一人一セットの浴衣、甚平をプレゼントしてくれたのです。日本式の温泉は一条まとわず入浴しなければなりません。この習慣はとても特殊です。日本式温泉は身も心も安らぎ、その場を去り難く感じました。

5日目の朝は人力によって船を漕ぐ保津峡川下りに乗船しました。川の流れと人の力によって動力が生み出され、勢い良く前へと進み、山や谷の自然の美しさを感じました。その後世界文化遺産の天龍寺を訪れました。とても静かで、途中には広大な竹林が広がっていました。まるで映画の中から切り取ったかのような美しさで、荘厳さを漂

わせていました。最も印象深かったのは退蔵院の座禅体験です。私たちに座禅の説明をしてくれた住職の話の中で、座禅の本当の目的は集中力をつけ、人間性を養うことだと知りました。正式な座禅は何日も休まず行われますが、私たちはたった15分で限界でした。本当の修行というのは大変なのですね。続いて、その夜に宿泊する場所はただ目を見張るばかりでした。所謂「京町家」で、以前は商人の邸宅でした。日本の別荘のようで、とても高級で、多くの著名人もここを訪れ泊まったことがあるそうです。この夜はとても贅沢で、一生にこんな高級な別荘に泊まれるチャンスがあるなんて、本当に交流協会の細やかな手配に感謝します。

6日目と7日目はこの活動の最後の2日間でしたが、とても素晴らしい2日間でもありました。まず大阪で日台学生会議の日本と台湾の学生と出会い、交流し、クイズラリーを行いました。内容はとても面白く、指定された時間内に指定された場所でグループ全体の写真を撮り、指定された食事を食べるのです。それにより私たちはとても短い時間で大阪の様々な特色ある建物に触れることが出来ました。例えば通天閣、大阪城天守閣などです。また大阪のお好み焼きやたこ焼きを食べることもできました。やはり台湾の味とは全く異なったもので、本当に美味しかったです。一日のクイズラリーとその夜のBBQを終え、私たちは日本の学生とより深く知り合えましたし、日本の学生の温かなもてなしを受けました。翌日、午前中はグループに分かれて日本の神話劇を行いました。みんなで分担し、協力し合い、台詞を考え、小道具を作り、踊りを踊りました。最後の本番までどのグループも各々の趣向を凝らしており、とても素晴らしかったです。その夜は重要な交流協会部長による送別会でした。料理が豪華だっただけでなく、部長の温かな歓迎に感激していました。内心私は必ず日本に戻ってこようと決意しまし



た。今後日本の学生たちにも台湾に来てもらい、私たちのお返しをさせてもらいたいです。

8日間の充実した日本理解の旅は本当に収穫が多く、日本の文化や生活面に対して一層深い知識を得ることが出来ました。私は応用日本語学科の学生ですが、大学での練習には限りがあります。今回の機会を得て、日本で実際に交流・見学をしてみて、本当に多くのことを学びました。日本是我们が多くのことを学べる国です。どの方面に於いてもとても進んでおり、生活の質も高いです。今回交流協会が主催するこの活動に参加できたことで、私は考えを改めました。交流協会奨学金を目標に努力し、今後交流協会の奨学金を手にし、日本の大学院で研究することを夢見ています。

2012 年晩夏、日本理解の旅

成功大學外国語学部
周宜澄

2000 字の論文でこの活動に応募したことが私が交流協会と関わりを持った始まりでした。テーマの決定から始まり、成功大学総合図書館を歩き来しては資料や電子雑誌を探し、最終的に本当にサーマーキャンプに合格した時の喜びは文字では

書き表せません。すぐに台湾新幹線のチケットを予約し、自分の日程を手配しなおしました。日本に行って交流し、日本文化を体験できる喜びと興奮を押さえることはできませんでした。

最初の2日間は政治大学での授業です。最初に知り合ったのは同じグループの柯柏翰、席祖詒、林之婷でした。政治大学に慣れていない私たちは席さんに国際関係センターを案内してもらいました。日本人の先生や劉先生、その他の先生から日本文化関連の研究結果を教えてくださいました。その中で最も印象深かったのはやはり劉先生が私たちにして下さった姫路城と広島原爆ドームの紹介です。先生は映像を見せながら私たちに日本語のヒアリングを練習させてくれ、私たちはこの2つの場所の知識を更に完全なものとししました。

9月2日は出発日です。しかし事前に私は何度も行程表を見ていました。私はこれまでに何度か日本を訪れたことはありますし、日本で交流活動に参加することも初めてではありませんでしたが、関西と広島は今まで訪れたことが無い場所でしたし、何よりこれは交流協会が主催した日本を理解する活動ですから、その日程の背後には十分な意味があるのだと思います。このような期待を抱えて、私たちの7泊8日晩夏交流旅行が始まったのです。

広島空港は私たちの旅行の最初に訪れた場所です。私は密かに資料を調べて、原子爆弾による被害と歴史に関して知識を得ていました。ガイドのSさんの詳しい説明によって、私は更にその不幸な歴史を知ることができました。想像して下さい、当時は私たちが訪問した日のような晴天で、原爆はそこから落ちてきました。爆心地の半径500 m以内の死亡率は99%、1 km以内の死亡率は90%で、その後原爆の影響で白血病や奇形児などの後遺症を発症した人もいたそうです。どうして何の罪も無い一般市民がこのような惨劇に遭わなければならないのだろうか、と思わず考えてし

まいりました。当時日本の軍国主義はむろん他国に危害を加えるものでした。しかしその報復がなぜ広島と長崎の人たちだったのでしょうか？原爆爆発後に残された原爆ドーム、そして資料館の中に展示してある広島市長が各国政府に宛てた反原爆の長々と書かれた手紙を一通一通見ていると、歴史の采配にはどうしても納得がいきません。

もし広島と長崎への原子爆弾投下が日本の軍国主義、真珠湾攻撃に対する代価であるならば、阪神淡路大震災はどうなのでしょう？2012年に大阪と神戸を旅した私は1995年1月17日にこんなにも大きな自然災害が発生したとは思えませんでした。しかし、同様に地震帯で生まれた台湾人は予測不能な地震の大きな恐怖を体感しています。台湾921大地震の時私は小学生でした。震源地から遠い台北に住んでいましたが、あの晩の天地が揺れ動く様とその後ニュースで流れる崩れ落ちた家々、家族と離散した痛みなどの悲惨的な状況は今でもはっきりと覚えています。そして防災センターを参観した時阪神淡路大震災の映像とそれらが結びつき、思わず目を赤くしてしまいました。しかし、防災センターで私たちは日本人が自身の安全のため不断の努力で改築や耐震技術の研鑽に励んでいること、家屋の構造を強くするには2種類あることを知りました。他に液状化現象による建物倒壊を防止する杭や地震救難バッグの準備等とても周到です。彼らが生命や財産の損失を減らすよう努力しているのを見てとても感心しましたし、同時に台湾はこの方面に関して非常に大きな努力を要すると感じました。

この2つの少し重い日程以外に交流協会は多くの日本文化体験の場所を用意してくれていました。京都では初めて全て豆腐を使った料理を食べました。事前に京都の水質が良く、京豆腐はとても有名であると聞いていましたので、今回その美味しく、柔らかい豆腐料理を堪能できてとても嬉しく思いました。その中でもごまダレがかかって



いた前菜の豆腐は忘れられません。台湾にも日本料理店は多いですが、このような伝統的な料理は京都でないと食べられません。ここまで書いて、私は京都に戻り、古都の雰囲気の中、あの繊細で美味しい豆腐料理を食べたくなりました！

京都は私にとって日本の代表と言ってもいいでしょう。京都だから私は交流協会への論文を書いたのです。それにより本活動に参加することができ、また京都の鴨川べりで川床料理を楽しむことができ、にぎやかな市の中心部から道を一本過ると一瞬にして300年前から存在する花街、花見小路へと足を踏み入れることができたのです。舞妓さんや芸妓さんの華やかな和服姿。伝統的な髪型と化粧。一人だったり、お客さんに付き添ったり。提灯の灯りの下を歩いている姿を望めば、まるで時空を超えたようでした。彼女たちと一緒に写真を撮りたかったですが、デジカメを持っていた私はその雰囲気に躊躇させられ、私は友達と一緒に静かに道の端で立っていました。一人また一人と通り過ぎる和服の影に私たちはどれが舞妓さんでどれが芸妓さんかを声を潜めて話をしたりしながら、その特別な夜は過ぎていきました。その後町家に戻る途中で小さな問題が発生しました。私たちは道に迷ったのです。私は何度も海外に出ていますが、今まで道に迷ったことはありません

でした。もしかすると、京都が醸し出す人を酔わせるような雰囲気には飲まれたのかもしれませんが。暦が2012と示されている場所で地図を見ていましたが、私はそんなに早く自分の位置と方向を探し当てなくても、と願っていました。時代を超えた京都をゆっくりと歩いていたかったのです……。

他に深く日本文化を体験できたのは溪山閣という温泉旅館でしょう。浴衣と甚平を着ると私たちは人が変わったようでした。こちらの会席料理は至極の美味しさで、牛肉にはさしが入っており、まるで日本のテレビ番組で見るように口に入れると溶けてしまうようでした。食材もとても新鮮で、刺身はワサビや醤油が必要ないくらいに美味しかったです。しかしその中で一番新鮮に感じたものはやはり漬物です。それに小鉢にはカボチャと野菜が入っており、特別な味でした。台湾にある日本料理店ではほとんど見かけないものばかりでしたので、私はこの機会を利用してたくさん食べました。そして溪山閣で一番素晴らしかったことは浴衣を着られたことです。日本の伝統衣服を着られてとても嬉しかったです。日本式の部屋に座り精緻な料理を堪能し、その後温泉に浸かり、最後には大きな畳の部屋で就寝します。まるでテレビに出て来る温泉旅行のようで、忘れられない経験となりました。

今回は多くの寺院拝観もその日程に含まれていました。日本の寺院と台湾の寺院の差はとても大きいものでした。日本の寺院は作庭をととても重視しています。枯山水の印象はとても深く、観光客が多いにも関わらず静けさが保たれていました。寺院後方の借景と竹林はとても優美で、歴史的要素も加わり、宗教目的以外で、ここが多くの観光客に選ばれていることに納得しました。そして私たちは幸運にも座禅体験ができました。私は以前日本のドラマの中で高校生が合宿中に行っているのを見ていたため、大まかな状況は知っていまし

たが、今回住職の解説を聞いてよりその原則と意義が理解できました。そして長年仏法を研鑽している人の心に対して敬意が生まれました。座禅が終わり、私は「打たれる」経験をしました。それにより精神集中の助けと励ましになり、完全な形で座禅をすることができましたが、とても痛かったです！他に厳島神社特有の鳥居は印象深かったです。特に宮島の大鳥居は満潮時には水に浮いているようで、この世のものではない美しさがありました。鳥居を眺めていると平清盛が船で鳥居をくぐり神社に参拝している様子が脳に浮かびます。帰る頃には少し雨が振り出し、その美しさに磨きをかけていました。

日台の交流方面に関しては2つの日程が組まれていました。1つめは姫路獨協大学でのグループ毎の討論です。私たちのグループは携帯電話に関して話し合いました。現在スマートフォンが普及していますが、討論をしていると日本人と台湾人で好むゲームやアプリに違いがあることが分かりました。しかしその後私たちのグループは討論のテーマが横道にそれて行き、次第にテーマから遠ざかり、日本の番組や芸能人などが話題となりました。2つ目の交流は大阪で日本各地から来た大学生と一緒にいった活動と六甲山への旅行でした。私はこの活動がとても好きになりました。5



時間という時間でしたが大阪の学生たちはとても優しく私たちを遊びに連れて行ってくれました。それに多くの人が私が成功大学から来たと聞くと、成功大学で活動に参加したことがある、と話してくれました。それに私たちには共通の友達がいたのです！このようにその活動中ずっと話をし、地下鉄や11系統のバスに乗り、私たちは通天閣に上り、大阪城、心斎橋、道頓堀、梅田を訪れました。多少残念だったことは時間が短かったことで、あまり詳しく参観することはできずに、写真を撮ったらすぐに次の場所へと移動してしまったことです。その夜はみんなで一緒に六甲山へ行きました。奈良から来たKさんは私たち六甲山YMCA121号室の室長でした！彼女はとても優しい関西の女の子で、すぐにみんなで打ち解け合うことができました。夕食のBBQの時には日本各地から来た人たちとたくさん知り合うことができました。Yさんは台湾に8回も言ったことがあり、今後政治大学に交換留学するそうです。私は日本語で一人の大阪大学の大学院生とずっと話していたのですが、しばらくして振り返ると彼が別の人と中国語で話していたのです。私は思わず「中国語上手だね！」と言ったら、「だって台湾人ですから」と言われ、涙が出るほど可笑しかったです。交流協会がこんなにも豪華なBBQを準備してくれていたことに感謝します。牛肉はさしが入っていてとても美味しく、みんなで食べながら、遊び、そして写真を撮りました。知らない間に日本語が進歩したようでした。少し肌寒い六甲山はみんなの楽しい思い出の場所となりました。

8日間は長いと言えば長いし、短いと言えば短い日程です。一分一秒が過ぎ去っていると考えると、自然と寝るのが遅くなり、朝起きるのが早くなりました。毎晩ホテル付近を歩き回り、朝には昇ってくる太陽を拝みました。全部で35時間も眠れていない私は旅人として全てのことを把握したく、日本を目の底と記憶の中に焼き付けようと

しました。人生とはまるでエスカレーターのように、例えば自分が前に進みたくなくても、時間の経過とともに必然的に動いてしまいます。このように日本での最後の夜が訪れました。東北料理を提供する日本料理店で、私たちは東京から来られた交流協会部長とお会いしました。私たちに対して宴会の挨拶をして頂いただけでなく、机をまわって私たちと話をして下さいました。心の中には今回この活動に参加できた感謝の気持ちでいっぱいでした。いつか日本で勉強できるよう努力しようと思います。Nさん、Sさん、Lさん、交流協会の皆さん、日本の全て、暫くお別れですが、私は必ず戻ってきます！

旅行の意義—日本・関西

政治大学財政学部

李旻潔

一・台湾部分

選ばれてから説明会に参加するまでの期間、今回の日程に関しては全くわからず、どのように出国して交流をするのか、どのような準備をすれば良いのかも全くわかりませんでした。説明会の当日になって、交流協会を訪れ、ようやく今回の日程がとても厳粛なものであることがわかりました。選ばれた学生は各地から来た精鋭で、私は少し気後れを感じました。台湾での2日間の日程は主に日本に関して研究を行っている教授たちから日本の政府や日台関係の紹介がありました。しかし教授たちが話してくれたそれらの知識は実際の訪日ではほとんど利用することは無く、劉教授が詳細に話してくれた8日間の日程に関する補助的知識は多くの場所で使うことができました。この2日間でおおよそ知り合った同じ団員たちはやはりとてもすごい人たちでしたが、とても親しみやすい人たちで、溝は感じず、私はこの8日間の共

同生活に一層期待が持てました。

二・日本部分

(1) 広島

20時過ぎに広島空港に到着しました。成田空港と異なることは周囲が一戸建ての家屋と田畑が中心だったことで、飛行機から見た感覚ではまるで田舎に来たようで、関西に関して好奇心が湧き上がってきました。バスに乗り、初めてこの8日間私たちを案内してくれるSさんとNさんにお会いしました。Sさんの話し振りを聞いていると、とても面白い人だと分かりました。そして日本人が学ぶ中国語は大陸の話し方が主流であることを初めて知りました。ですからやはり最初は聞き慣れませんでした。ホテルについて、私たちが宿泊するホテルが広島でも一二を争う高級ホテルだと知りました。外観はとても気品があり、どの角度からでも窓の外には広島城を見ることが出来ました。荷物を置き、私たちは付近の商店街を歩いてみました。日本の店は21時頃にはほぼ閉まっていますが、少数の遅くまで開いているレストランを数件探し当てました。日本に到着した初日にどうして何もせずに過ごせるでしょうか！私たちは日本で有名なラーメン店、一蘭を選びました。この時私たちは事前準備の重要性を知りました。なぜなら団員の中に出国前に既に近くの商店街や開いているお店を調べて来ている人がおり、それにより私たちは大きく時間を省けたのです。翌日、数人の団員と一緒に近くの広島城を散歩することを約束しました。広島城は1599年に完成しました。周囲を堀で覆われた城で、以前は軍事目的で作られたことは一目瞭然でした。広島城の敷地内には護国神社があり、私たちがこの旅行で初めて遭遇した神社です。記念としてお守りを購入しました。その後の行程は原爆ドームと平和記念資料館です。Sさんが解説する第二次世界大戦中の核爆弾爆発時の状況を聞くと鳥肌が立つほど恐

ろしく感じました。地面の表面温度が3000度に達し、更に強風と強震がそれに加わりました。そして最終的に広島「好天」が広島に原子爆弾を落とされる最終地点となる決め手となったのです。何か皮肉めいたものを感じました。簡潔に言えば、広島は大都市だとあまり感じない都市です。歩調は比較的ゆっくりで、東京と比べると私はこのような速度の方が好きです。

(2) 宮島

高速船に乗って外界と隔絶された宮島にやってきました。まるで高雄の旗津か淡水の八里のような感覚でした。ここで有名なものは水上に立つ鳥居で、本当に美しかったです！宮島は今回の訪問先で私が一番好きだったと言ってもいいと思います。なぜなら島に到着するとすぐにあちこちに人懐っこい鹿が闊歩しているのです。本当に印象深かったです！他に宮島で最も有名なお土産はもみじ饅頭で、一口食べると好きになってしまいました！ですから、何箱も持って帰り友達に分けました。宮島で私たちは厳島神社を参拝しました。そのお守りの裏には鹿、または鳥居ともみじの絵が描かれており、とてもその土地柄を表していました。その他宮島の景色は美しく、参観にはとてもいい場所です！



(3) 姫路

3 日目は新幹線に乗って姫路へ行きました。ここでは姫路獨協大学の学生と交流しましたが、当初の想像とは大幅に異なっていました。私たちと同じグループの学生はあまり話をしなからず、日本語ばかりを話しています。名簿には彼らは外国語学部で中国語を学んだことがあると書いてあるのにです。しかし彼らはあまり中国語と英語が得意でないようで、代わりに社会人学生の方が真っ先に発言し、できるだけ中国語でコミュニケーションを図ってくれました。そうでなければ、姫路獨協大学の学生は今回の交流に対して私たちのように重視はしていないのではないだろうか、とさえ思わざるを得ません。どうやら彼らは当日に討論のテーマを知ったようでしたし、服装もカジュアルでした。それに比べて私たちは交流協会から再三これは厳粛な活動で、先に準備資料と小さなプレゼントや名刺を用意しておくように言われました。しかしこれは恐らく大学方面の問題で、情報の伝達がうまくいっていなかったのだと思います。日本の学生はとても礼節を重んじると信じています。交流後、姫路城の見学をしました。ちょうど数十年に一度の改修時期に遭遇しました。姫路城修復のため周りを保護する建物で覆うことで天気の影響を受けずいられるのです。台湾の状況を考えると、このような旧跡の補修というのは比較的少なく、それにこんなにも大掛かりなものではありません！その後孫文記念館(移情閣)へ行きました。孫文は日本でも国父級の扱いを受けているなんて思いもしませんでした。移情閣を實際目の当たりにするととても驚かされました。それは建築の美だけではなく、周囲の風景が更に美しいのです！

(4) 神戸

その夜神戸モザイク広場を訪れました。ここから神戸港を眺められるのですが、香港のビクトリアハーバーとは異なった風景でしたが、大いに視



界を開かされました。夜のランプが港周辺の建物を更に美しくしていました。翌日人と未来の防災センターへ行き、1995年に起こった阪神淡路大震災に関連する写真や映像を見ました。大自然の力は予測不可能ですが、私たちは十分な準備をすることができるのです。参観終了後、私たち台湾は日本と比べるとあまり災害の事前準備に関する方面を重視していないことを反省しました。地震帯に身を置いているのですから、台湾はこの方面に対して大きな発展の空間が存在しており、これは命に関わる問題ですから、政府にはより重視してもらいたいと思います。

(5) 京都

京都で最初に訪れた神社は清水寺です。京都で最も古い神社で、険しい崖の上に立ち、上から望める景色はとても美しかったです。他に天龍寺と龍安寺に行きましたが、それほど壮観なものではありませんでした。京都で私たちは保津峡川下り船に乗りました。これはとても特別な体験でした。船をただ浮かべているような感じですが、とても安全で、途中の風景は山や川があり、まるで世間から隔絶された桃源郷に身を置いているようでした。そして半分ほど下ると物を売る船が私たちと並走して、とても珍しく感じました。午後は退蔵院で座禅体験をしましたがとても貴重な体験

でした。住職は眠くなったりした際の本の板を打ち付ける様子を見せてくれましたが、その時の力の入れ方にとっても驚かされました！ですから私たちは座禅をしている際には集中を怠ることはしませんでした！京都の最初の夜は温泉旅館で、女将さんは私たち一人一人に浴衣をプレゼントしてくれて、とても嬉しかったです！翌日の夜は町家に泊まりました。それは一棟の家を貸出し旅館にしているようでした。初めてこんなにも多くの人と一緒に泊まるので、とても特別な感じがしました。まるで日本の家にいるかのようで、とても温かく、個人旅行では体験しにくい部分でした。

（6）大阪

大阪という都市はとてにぎやかでした。そして宮島に続き好きになった場所でした！ここの人は優しく、私たちは夜に街へ繰り出しラーメンを食べに言った時も日本人が私たちに話しかけてくれました。まるで個人旅行をしているような感覚です！大阪では日台学生会議の学生とクイズラリーをしました。数日前の姫路獨協大学の学生とは異なり、どの学生も積極的に活動に参加し、また中国語や英語、日本語を使ってできるだけコミュニケーションを図ろうとしてくれました。夜には一緒に六甲山でBBQを行いました。この行程のおかげで私たちは日本の学生と近づくことができました。翌日の午前中は日本の神話の劇を行い、午後は六甲山牧場を見学し、この2日間は日程の中で最も忘れ難い部分となりました。私たちと日台学生会議の学生は親友になり、お互いの連絡先を交換しました。なぜなら今後彼らが台湾に来たら一緒に遊びに行く約束をしたからです！

三・感想

8日間の旅に参加でき本当に楽しかったです。日本の多くの文化（茶道・座禅・神社参拝・浴衣・温泉等）を体験し、本場の美味しい日本食（刺身・土瓶蒸し・ビール・トンカツ・ラーメン・たこ焼

き・お好み焼き等）を堪能しました。今回の旅行で私は日本を更に好きになりました。今後日本で勉強したいという思いが湧き上がってきました。今後数年日本語を勉強し、留学の奨学金を申請し、再度日本と相見たいです。

一期一会

静宜大学日本文学学科
曾郁棋

今回のサマーキャンプに参加できたことは本当に嬉しかったです。なぜならこれまで日本に対する認識は教科書の内容に限られていました。日本という国をちゃんと理解する機会がなかったのです。しかしこの1週間の活動を経て私は改めて日本を好きになりました。

まず、私たちは政治大学で2日間の集中講義を受けました。ここで習ったことと私たちの訪日の日程に大きな関連性はありませんでしたが、私にとってはとても有意義なものでした。先生たちは私たちに過去の日台間の歴史や親密な日台関係、更には現在の日台情勢に関して話して下さいました。最近話題にあがる尖閣諸島問題に関しても、先生たちはそれを避けることなく私たちと討論しました。このような授業は私に多くのことを考えさせてくれます。同様に島国である台湾は日本と同じ問題を抱えています。中国の強大な圧力の下、主権問題は一触即発の状態にあります。どのように処理をすればよいのか、みんなの関心が向いています。しかしこのような総合的に日本を理解できる授業はほとんどありません。最も新鮮だったことは異なった学部から来た学生が集合したことです。どの学生も違った角度から日本を認識しています。日本語学科と言えども日本を理解しているとは限りません。先生の質問により、私たちは各々の意見を発表しました。それにより、

今回の旅行で最も重要な目的は恐らく日本文化の交流だと思いますが、他に人との心の交流も軽視してはいけないのだと感じました。

今回初めて日本にきました。ですからこの短い一週間の滞在は毎日が探検しているように楽しく、食べるもの、見るもの、遊ぶもの、どれもが台湾と異なっていました。以下には各異なった方面から私が受けた影響を説明しようと思います。まずは当然「食文化」です。今回の旅行で私は日本の様々な豪華で精緻な料理を頂きました。しかしその中でも私が最も忘れられないのは京都で食べた湯葉料理です。最初の料理から最後の料理まで全て湯葉で作られています。以前に日本の地理の授業で京都では湯葉が有名であることは知っていましたがまさかこんなにも多種多様に料理に使われる何て思いもしませんでした。冗談でこれは湯葉地獄だ、なんて言う人もいましたが、本当に一生忘れられません。もう一つの新鮮な体験は日本の居酒屋です。日本のドラマの中でよく出て来る場面が本当に私の人生で演じられているのです。みんな止まることなく様々な種類のお酒を飲んでいました。サワー、焼酎、日本酒などです。自分でお酒を注ごうとしている人がいましたが、Nさんに止められました。日本では自分でお酒を注がないそうです。なぜならこれは相手があなたのコップが空になったことに気づいておらず、相手に対してとても失礼であることを意味しているそうです。それを聞いて私はとても驚かされました。台湾では当然の行為が日本では180度変わってしまうのです。日本人の堅苦しく、慎重な一面を見ました。まさにカルチャーショックはこのような小さな場所から始まったのです。

続いては日本の観光名所に関してです。私が一番好きだったのは保津川下りです。水の流れに沿って上流から下流へ流れて行き、日本の自然の風景を眺めました。エンジンの雑音はなく、聞こえるのは船頭さんの船を漕ぐ音とサラサラという

水音だけです。まるで都市の束縛を離れ、この木々の中で世間と隔絶した生活をしているかのようでした。このような美しい景色をみて、日本人の自然の生態保護に対する力の入れようには驚嘆せざるをえません。観光と生態の間で両者がバランスをとった発展のポイントを探し当てたのです。そして私たちの旅行では3箇所の世界文化遺産を訪れました。それらはどれも政府が積極的に保護しており、最も美しい様子を人々に見せていました。京都はこの旅行で私が最も期待していた都市の一つです。テレビ番組ではよく京都の古き良き宗教建築や神秘的な舞妓さんの紹介が行われていますが、自分で訪れてみて、それが紛れもないものだと分かりました。観光客は絶えず、人力車は人の群れの中を走って行きます。ゆっくりと街を歩き、Sさんの歴史のいわれを聞いていると、その場に身を置いているような感覚になりました。清水寺の地主神社も有名な観光スポットの一つです。私たちは俗世間から逃れられず、恋愛みくじを引き、お守りを買いました。おみくじはとても的を得ていました。同時に日本人の商業的思考に感心しました。どのお寺でもその場所の特別なお守りがありました。それを見るとどうにもお金を失ってしまうのです。

この旅行中最も印象深い文化体験は恐らく温泉



体験です。温泉に入る前、みんなとても緊張していました。これまで他人に裸を見られることなんてありませんでした。私たちは目を閉じて入ると約束しました。しかし本当に解放されたら、みんな恥ずかしがるどころか、お互いのプライベートな話まで話し始めたのです。日本人も全く他人を気にすることなくのんびりと温泉を楽しんでいました。本当に理解しきれない民族です。私にとって日本人はとても細かい点にまで気を使う民族だと思っています。常に再三確認してから話を始めますし、礼節を疎かにすることはありません。それは一方で慎重すぎるとも言えます。しかし温泉文化では大胆な観念を持っています。こんなにも大きな文化の違いが私という今回初めて体験した台湾人に襲いかかってきたのです。さらに浴衣体験は本当に女の子たちを狂喜させました。まさか1セットの浴衣をもらえるなんて思いもせず、驚喜指数は100%です。ホテルのスタッフが着せてくれた時、ずっと優しく、きつくないか聞いてくれました。しかし美しさのためみんな笑顔で大丈夫です、と答えていました。しかし座って食事をする時こそ最大の難関でした。正座して背筋を伸ばします。優雅に食事をしなければなりません。ただ一言言えるのは、日本人になることは簡単なことじゃない、ということだけです。

この旅行で、私は多くの日本の大学生と交流し、台湾が好きな日本人がたくさんいることを知りました。芸能人、グルメ、風景のこと等、みんなよく知っていました。反対に台湾人もみんなとても日本が好きです。ですから私たちの交流はとても楽しいものになり、お互いの国を同じくらい大好きになりました。特にチーム毎に日本人と劇をしたとき、みんな日本語、中国語、英語を織り交ぜて話しました。一緒に劇の内容や演出などを話し合い、一緒に一つのことに向かって努力したことで、無意識にお互いの距離が近くなりました。非常に忘れ難い出来事でした。日本での最後の夜、



日本人学生は私たちをカラオケに連れて行ってくれました。こんな夢のような体験ができるなんて思っても見ませんでした。日本のカラオケルームはとても小さいですが、選曲も小さなタッチパネルで行い、なにかもとても新鮮でした。日本の女性が歌う姿はとても可愛く、ミュージックビデオの動作を真似していました。私たちも数曲の中国語の歌を披露しました。しかし楽しい時間はいつもとても短いもので、すぐに終了し、最後はとても分かれ難く感じました。

交流協会と当代日本研究センターが共同でこの活動を主催してくれたことに感謝します。私にとって、初めて日本に来て、こんなにも多様な一面を見ることが出来、こんなにも多くの優しい日本人と知り合え、この上もなく幸せでした。将来、多くの人に台湾を理解してもらいたいと思います。そのために私は日本語をもっと頑張り、いつの日か日台関係のために尽力したいと思います。

理解と交流

国立台湾大学 社会科学院経済学部
詹凱傑

今回の活動は台湾と日本の両方を含んでいました。まず先に台湾での2日間に及ぶ授業に対する

感想を、その後日本での理解と交流に関して比較的長く記そうと思います。政治大学国際関係センターでI教授は日本政治の現状を鋭く分析されました。それにより私はその分野に対しての知識を大幅に増やせただけでなく、多くの驚くべき台湾との相違点を知ることができました。その中で最も考えさせられた点は日本政治の「地方が中央を囲む」情勢でした。中央政府で総合的に判断し、国民が未だに満足していない政策を打ち出した際、地方の政治スターがそれを持ち出し、国民からの賛同を得るのです。尖閣諸島購入の東京都知事石原慎太郎や「日本維新の会」の大阪市長橋下徹がその良い例です。特に后者である、明瞭な態度で臨む第三勢力は民主党よりも高い支持を集めると同時に、二大政党の議員すら加入させるという魅力を持っています。歴史は常に示し続けています、経済危機と国家危機とは往々にして互いに支えあうものなのだと。第一次世界大戦後ヨーロッパの経済の惨状はヒトラーの台頭を促しました。中国大躍進は期待ほどでなかったために、政府は珍宝島事件を利用して国民の視点をそちらに逸らしたのです。様々な領土問題と不景気が交錯する現在、日本はアジア最先端国家として、その選択はアジア情勢に影響を及ぼすものであることは間違いありません。



以下は日本部分の感想です。私の貧弱な文才ではこのサマーキャンプが私にもたらした充実感や心の揺さぶり、感動を表現することは到底不可能です。サマーキャンプによって私の視界は大きく開かれました。そして知識を増やし、日本という国や民族に対する認識を変えてくれました。以下は2つの部分に分けて、湧き出る感動をどうか文字に置き換えました。所謂理解とは何か、なぜ理解するか、を中心とした「理解」の部分と日本人学生との交流を通して感じた「交流」部分の2つです。

子曰く「学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆し」、という言葉があります。ただ単に、文字を覚え、日本のドラマに狂い、景色を撮る、それは所謂「罔い」ということ。「日本式管理」「武士道精神」を空談し、その文化の多面性を顧みないこと、それは則ち「殆い」ということです。今回の日本旅行で私は次のことに気づきました。日本人は文句を言うこともなく、交通も整然としており、ホテルの部屋には掃除をしたスタッフの名前が必ず残されているのです。集団の結束力による相互信頼が無ければ、このようなレベルにまで達しない気がします。京都では多くの寺社仏閣を訪問し、茶道と座禅を体験したことで、日本人が心の中に求める富んだ変化と安寧を知ることが出来ました。日本の戦災や災害の遺跡を訪れ、未然に防ぐ、という展望を持った国民性に驚かされました。広島平和記念資料館では敵国を無情だと責めることもなく、むしろ親愛の情を持たせることにより戦争でお互いを憎み合う恐怖を際立たせていました。阪神淡路大震災の防災センターでは政府の無能や復興の遅延を責めることなく、一歩進んだ減災に関する技術を発展させようとしていました。その他、日本ではサラリーマンがほぼ同じスーツ姿をしていたことや、物作りの精巧さなど、私にとって驚嘆余あるもので、多くを考えさせられました。この旅行での体感した文

化的な身震いは言葉で言い表しきることはできません。

これら文化領域における考えで、私は一つの結論に達しました。台湾は日本を必要としているだけでなく、より深いレベルで日本を理解する必要があるということです。台湾にとってなぜ日本を理解する必要があるかという、一般的には日台の政治や歴史、経済関係などの密接さという回答がすぐに出されると思いますが、私はそれらの回答はより深く掘り下げられると思っています。日本はもちろん全てに於いて完璧だということはありませんし、一方で特異な民族性を持っています。しかし民族性という限定的な物事以外に於いて、例えば経営方法等、台湾は学ぶべき価値があります。例を挙げると、この旅行で私は日本の文化の保護に関して見習うべきだと感じました。もちろん台湾にも早くから保護方面の法令がありますが、日本では更にそれらが活かされ、国家の旧跡を保護しているのです。以下に2つの例を挙げます。その一つは姫路城です。現在姫路城は「平成の大修理」によって外観を望むことは出来ず、旅行客としては興味が削がれてしまいます。当然入場料も安くすべきだと考えていました。しかし、管理者は逆に修理の機会を利用し、エレベーターを設置し「天空の白鷺」という姫路城を見下ろすような施設を旅行客に提供しています。また、期間限定の「姫路お隠れバーガー」なども売られていました。2つ目に寺社です。各寺社は歴史的背景や宗派が異なるにも関わらず、どこも売り場を設置して、お守りやお札などを販売していますし、更には近くの商業地域をも活性化させています。寺院の中には座禅や抹茶体験等も提供している場所もあります。

各地訪問以外に、日本の大学生との交流はサマーキャンプの重要な活動です。私の日本語能力は高くありませんが、日本人学生はとても我慢強くゆっくりと私に話しかけてくれました。また多



くの人が中国語が流暢で、私に通訳をしてくれました。討論を経て私は初めて中国語にも文法があり、発音はとても困難なものなのだと知りました。他にも台湾の芸能人である羅志祥、王心凌や飛輪海などは日本でも高い知名度を得ていることを知りました。日本の学生は親切なだけでなく、日台関係の深さと厚さを知っていました。多くが台湾を訪れたことがあり、多い人では8度も訪台したことがあるそうです。彼らの笑顔から感じる温かさ、品性から感じる誠実さはこの日本旅行で最も美しく、最も忘れ難い風景の一つです。

今回の得難い経験に対して、交流協会にはとても感謝しています。まだまだ多くの見聞や感想がありますが、たった2000字では書ききれません。今回のサマーキャンプを経て、多くの学生が日本に対して素晴らしい印象を持ったと思います。また同時に留学を通して更に日本を理解したいという思いが芽生えたと思います。私自身も例外ではありません。台湾と日本の距離は遠くありません。まさに「あなたの家の前の水が私の家の前を流れる」というもので、各方面に於いてとても密に交流が行われています。しかし、もし言語が通じなければ「たった一筋の川にしか隔てられていないのに、言葉を交わせずずっと見つめているばかり」という状況になりかねません。大阪大学の

ある女子学生に尖閣諸島問題と沖縄米軍駐留問題に関して尋ねてみました。私は心の中に既に自分の答えがありましたが、言語の隔たりによってそれはスルーされ、とても残念でした。これも私がこの旅行で感じたことですが、日本語の勉強に専念せず、中国語・英語から日本を理解しようとしてもダメだということです。送別会で交流協会の総務部長がおっしゃった日本語をしっかりと学んで下さい、という約束を私は将来必ず守ります。

台湾は一つの島です。外の世界の人たちとコミュニケーションを取りたいという欲求に満ちています。そう言ったものの、そのチャンスには限りがあります。本サマーキャンプは円満に終了しました。それは同時に理解へ続く道が開けたことを意味します。日本の風景のすばらしさ、古刹の美、城郭の勇壮さ、人々の勤勉さ、学生の笑顔、どれもが団員たちの心の中に刻まれており、将来日台関係を促進させる原動力に昇華すると思います。

8 日間のシンデレラ

政治大学 情報管理学部
陳韋如

パソコンの前に座っていると、一体どこから書き始めようかわからなくなりました。この驚きと喜びに溢れた8日間では初めて味わう数多くの興奮と感動があり、それはまるで8日間だけのシンデレラになったかのようです。信じられないほどの驚嘆を感じた旅は終わりの時が訪れましたが、多くの思い出を持って現実へと戻ってきました。この短い8日間は私を成長させてくれただけでなく、もしかしたら私の未来をも変えるかもしれません。

最初Lさんから送られて来た合格通知書を受け取っても、もともと合格者番号が張り出される

だけだと思っていたので、まさか本物の合格通知書だなんて思いもしませんでした。たった20名の枠しかないのに、私はそれに合格したのです。嬉しいという言葉以外にはありません。私は幸運だったなんて言えません。なぜなら私も多くの労力を費やし日本という国を認識、研究して来たからです。ですから今回の活動はその期待に答えようと思います。

その他、交流協会は手厚く、台湾での説明会と出発前の2日間の集中講義を予定してくれていました。それにより、私は日本へ行く前に準備ができました。説明会当日、先に各々の大学から来た学生と知りあいました。そして日程の説明があり、それにより私たちは事前の準備ができました。政治大学国際関係センターでは3人の先生が授業をされました。日本に行った時直接関係するとは限りませんが、私たちは現在の台湾と日本との関係について一層詳しく理解でき、この授業を受けたことによって世界観が広がりました。その中でここ最近の日台関係の重要部分である尖閣領土問題がありました。これは政治問題に属し、厳粛な雰囲気になりましたが、台湾の大学生である私たちはこの議論の結果がどうあれ、国際的なニュースに関心を寄せるべきであり、台湾、日本、そして中国間の領土問題の原因とその影響を知ることができました。この2日間の授業は確実に私たちが日台関係の背景的知識を得る助けになりました。

日本、関西の8日間の旅行は日程表の細かな点からNさんのもてなしと心配りある手配が見て取れます。各種日本の公共交通機関を使い、各種多様な日本料理を食べ、刺激的な船に乗り、座禅、和服と温泉の体験、抹茶の点て方体験とパフェ作り、全てが初めての体験で、私たちは自ら日本の伝統文化を体感できました。Sさんの豊富な解説で私たちは広島、神戸、京都、大阪の各地でその場所を深く理解できました。もちろん、往復の

飛行機を除くと短い6日間しかなく、それで関西の幾つかの地域はもちろん、日本全体なんて認識するには全く時間が足りないことはわかっています。しかし、少なくとも私たちはこの旅行中は一時をも無駄にすることなく理解に努めました。夜にはホテルに戻ってから夜更けの街に繰り出し、朝は太陽と共に起き、付近を散策しました。見終わらなかった場所は・・・次回の日本旅行に取っておきます！

他に、「日本理解サマーキャンプ」が特別だった点は2度の日本の大学生と交流の機会があったことです。一度目は姫路獨協大学の中国語を勉強したことがある学生と一緒に、グループに分かれて各々のテーマに関して討論を行いました。私たちのグループは日台の漫画に関してです。台湾の漫画は比較的簡素な路線を行っていて、日本は華麗で複雑な方向に行っています。しかし流行の度合いに話が及んだ際、一人の日本側学生が台湾のコンビニで漫画を探した際日本の漫画しかなく、台湾の漫画はなかったことを話してくれました。このことから日本が台湾よりも漫画文化の程度を重視していることがわかります。もう1つは日台学生会議の学生と1泊2日の合宿活動です。時間は長くありませんでしたが、チーム毎のクイズラリー、BBQによって多くの日本の学生と台湾の留学生と知り合うことが出来ました。相互交流によって多くの考えを得ましたし、文化的な違いを感じることもできました。初めて簡単な日本語で日本人と会話しました。それが自信となり、日本語をマスターしたいという思いが芽生えました！

今回の日程で、私も日本の温泉文化を体験しました。以前小学生の時に日本へ来て一度体験したことがあります。しかし当時は恥ずかしさとお湯の熱さで数分ですぐに出てしまいました。今回みんなの推薦もあり、例え恥ずかしくても我慢して正式な日本式温泉を堪能しよう、と決めました。数人の友達と一緒に温泉に入りながらおしゃべり

をしました。お互い裸で向き合った後のおしゃべりはとても大胆になりました。恐らく日本人が温泉に入るのはその気持ちよさだけではなく、何事も隠さない公明正大な感覚を享受しているからなのかもしれません。

今回私が養った最も重要な習慣、それは「時間厳守」ということです。旅行前からずっと日本人は時間を守るという概念を重視する、と言われていました。一般的には約束の時間の5分前には到着しているそうです。なぜなら約束した時間こそが出発の時間だからです！ですから私たちも時間に余裕を持たせ、ちょうどに、もしくは早めに到着するようにしました。台湾にいたとしても時間を厳守する習慣というのは養う必要があると考えます。

その他、私が印象深かったことは日本のサービス業です。レストランであろうと、服屋であろうと、コンビニであろうと、接客する店員は顔に笑みを浮かべ、とても礼儀正しくお客と接したり、レジを打ったりしていました。レストランでは90度のお辞儀をし、顧客にとっても丁寧に扱われているという感覚を抱かせてくれます。まるで家に





帰ったかのような温かさで、私たちも自然と笑みを浮かべ頭を下げて対応するようになりました。彼らのサービスが良ければ顧客は再訪したいと感じます。それは台湾の西堤ステーキ館と同様で、最も人の話題にのぼることはサービスの部分です。これが彼らがサービス業で成功した主要な要因の一つだと考えます。

実は今回の活動は私にとって、一つの重要な転換点となりました。この活動により私は日本を好きになり、もっと日本との交流活動に参加したいと考えるようになりました。そして私は真面目に日本語を勉強し、日本への交換留学に応募してみ

ようかと思い始めました。今回団を率いて下さった劉冠効先生はこうおっしゃいました。「日本は本当に行く価値のある国です」と。今の私はその意見に更に賛同できます。日本にはまだまだ多くの勉強すべき点がある場所であり、時間をかけてゆっくりと理解する必要があります。私は現在目標が一つ増えました！

多くの違った活動に参加することで多くのことが学べますが、今回の経験は多くの気のあった仲間と出会えただけでなく、台湾と日本とが民間的な方法で多くの交流を行い、私たちと日本との外交はそんなに難しいものではないのだと感じました。たとえ台湾に戻っても、私は日本と連絡を取り続けたいと思いますし、台湾という宝の島の美しさを彼らにも紹介したいと思います。視野をまず日本へと広げ、その後全世界へと広げたいです。そうすることで全く違った観点から違った台湾を見ることが出来ると信じています。

今回の「日本理解サマーキャンプ」は私の1つ目の目標でした。今後何かのチャンスがあれば私は努力してそれを勝ち取りに行きます。そしてこれからも台湾の北に位置する独特の歴史と文化を持つ国——日本を探索して行きます。

台湾内政、日台関係をめぐる動向（2012年11月上旬-2013年1月上旬）

日本衆議院選挙と新政権に対する台湾の反応、 手当削減政治の展開

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員）
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

12月16日に投開票が行なわれた日本の衆議院選挙に対して台湾各界は、大きな関心を寄せた。自民党政権の復活に対して、台湾外交部は既存の良好な関係のもとに関係が発展することを望むとする旨のコメントが出された。11月下旬、台北で第37回日台貿易経済会議が開催された。また同時期に進展が期待される日台民間漁業の予備会合が東京で開催された。

台湾経済の失速と不景気を反映し、行政及び立法関係者などの公務員に対する「手当」、「特権」に対する不満が高まり、総統を含む行政首長及び立法委員の手当て、退職公務員に支給されてきた手当などに対し、廃止、削減など「手当削減政治」が展開された。

報じられた。³

1. 日本の衆議院選挙と台湾の反応

日本の衆議院解散、総選挙の動向に関して台湾では大きな関心が寄せられた。以下、選挙までのプロセス、選挙結果及び安倍政権の発足に対する報道振りをまとめた。

（1）選挙前の台湾メディアの関心

11月に野田総理が2012年12月の衆議院解散、総選挙を宣言してから、台湾のメディアは、大きな関心を持って日本の政局を報道してきた。当初から日本の世論調査を引用し、「民主党政権の終結、自民党政権の復活」が報じられたが、12月以降は選挙の様子として「有権者の関心を引き寄せるため各候補から民族主義的政見が荒れ狂っている」との右傾化を懸念する論調から¹、元グラビアアイドルが新党から刺客として出馬するなど写真とともに報じる週刊誌的報道まで見られた。²

投票直前の報道では、日本メディアの報道を引用し、「自民党主導政府の成立、小政党の崩壊」、「自民党の獲得議席によってその後の国会運営が決まる」などの選挙後の政局のあり方の予測まで

（2）衆議院選挙に対する台湾各界の反応

選挙当日の12月16日夜、台湾のテレビ各局は日本のテレビ局の開票速報を引用し、リアルタイムで報道し関心の高さを見せた。翌日の大手三紙はそれぞれ「日本政権交代 自民党が政権奪回」⁴、「日本政権交代 民主党 230 → 56 惨敗 自民党 119 → 293 政権復帰」⁵、「日本政権交代 自民党大勝 安倍総理誕生へ」⁶などと報じた。他には、投票率が史上最低の59.7%という低さに対して有権者の「冷めた感情」への指摘や⁷、6年で7人目の首相誕生に対する制度上の問題への論評が見られた。⁸

また安倍自民党総裁の過去の靖国神社参拝、選挙期間中の対中国強硬発言などの例を取り上げて日本政治の右傾化の動きを予測する報道⁹、尖閣諸島をめぐる日中間の緊張が鷹派的色彩の強い安倍氏が首相に返り咲くことを後押ししたなどの論評が見られた。¹⁰また日中、日韓の間で問題となっている「領土」にかかる論争は引き続き継続するであろうとの見方を専門家の意見を引用し紹

介した。¹¹

台湾外交部は、「自民党が過半数議席を獲得し、憲法の規定により1ヶ月以内に新しい首相が選出される見込みであり、自民党総裁の安倍晋三氏が首相に就任する予定である」と指摘するとともに、安倍次期総理の経歴を紹介し、同氏が「長年にわたり日台関係を重視し、最近では2010年10月に松山—羽田航空便の就航時に訪台し馬總統と会見したと紹介するとともに、自民党政権下の日台関係も既存の良好な関係の基礎のうえに双方の関係は更に安定して発展することを信じる」と指摘した。¹²

安倍政権の発足前から、新政権の動向、政策に関しては大きな関心を持って報道された。特に金融政策は、安倍次期総理の公約として2%の物価上昇目標、日銀が金融緩和政策を発表する動きなどが大きく報じられた。¹³また右動向に関しては、台湾中央銀行総裁が、安倍次期総理が掲げる物価上昇率の目標化は「金融危機を引き起こしかねない」と懸念する発言なども紹介された。¹⁴

(3) 安倍内閣成立に対する反応

12月26日、憲法の規定により特別国会が召集され、安倍晋三氏を総理大臣に選出したことにつき、台湾外交部は「馬英九總統、陳冲行政院長、林永樂外交部長及び廖了以亜東關係協會会長は祝電を送った」と指摘した。また自民党政権について、「今回の内閣は経済財政面を重視した内閣であり、麻生元首相が副首相兼財政金融担当大臣に就任したことは、日本政府が安倍総理の指導の下で成果をあげるものと信じている」と述べた。また日台関係に関しては、「日台双方はアジア太平洋国家であるとともに、自由と民主の価値観を擁し、経済貿易、文化、観光面での交流は密接であり、特別パートナーシップ関係を有し、また両国民の感情も良好であり、将来の両国関係は既存の良好な基礎の上に引き続き発展するものと期待さ

れる」と今後の対日関係の発展に期待感を示した。¹⁵

翌27日の台湾各紙は朝刊で「安倍が危機突破内閣を組閣」¹⁶、「安倍は外交、国防の主導権をしっかり握った」¹⁷、「安倍内閣は右派閣僚が多数」¹⁸などと大きく報じた。

『聯合報』は、4面全部を使い、外国メディアの報道を引用する形で、日本、中国、韓国に相次いでニューリーダーが誕生したが、鷹派的な人物が多く、東北アジアに新たな冷戦的な様相が生じる可能性を指摘した韓国学者の見方を報道した。¹⁹一方で台湾の学者が、「安倍氏が選挙時に見せたタカ派的な姿勢は政権成立後には温和なものに変更するであろう」との指摘も紹介された。²⁰安倍総理が選挙時から主張していたデフレからの脱却を目標とする政策に関しては、台湾の金融関係者は来年には円安が進み1ドル100円台にまで急落する可能性を指摘する者もいた。²¹他には、前回の政権では安倍氏は首相の座を1年あまりで投げ出したことにつきプレッシャーに弱いのではないかという指摘²²、安倍夫人が開店した居酒屋は、夫人自らの言葉で「今後も経営は続ける」との発言などが報じられた。²³

『中国時報』は、組閣人事に関して親友や党内のライバルを閣僚に任命したが、最も注目されたのは、麻生太郎元首相の副首相、財務金融担当大臣への起用のほか、甘利明経済再生大臣、下村博文文部科学大臣は友人であるが、ほかにも多くの閣僚が右派的な思想を持つ者が多いとの指摘がなされた。また自民党総裁選挙で争ったライバルでもある石原伸晃、林芳正の両氏をそれぞれ、原発担当大臣、農林水産大臣に任命したことは、前回の組閣が「友達内閣」と批判された反省を踏まえたものであるほか、石原氏の入閣は衆議院で第三党に躍進した日本維新の会代表の石原慎太郎氏への人質的な意味があるとの分析もなされた。²⁴外交政策は「経済と外交という二大難題があるが、先

に経済振興面に力をいれ、外交に関しては先に関係国との関係修復を優先し、右派的主張は抑制されることになる」との専門家の見方を紹介した。²⁵

『自由時報』は、組閣人事は「友達、側近の重用との批判を避けるべくバランスあるものになった」と論じたほか、陳調和駐日副代表が「18名の閣僚のうち、7-8名が日華懇所属議員であり、またほかにも7-8名は台湾を理解する議員であるところ、日台間の発展は期待ができる」との見方が紹介された。²⁶また同紙は組閣前に自民党の党内人事において野田聖子総務会長、高市早苗政調会長という党三役に女性二人を登用したことは、来年夏の参議院選挙での女性票の獲得を期待してのものであるとの分析がなされた。²⁷注目の経済政策に関しては、金融緩和政策に関しては更なる財政悪化を招きかないとしてその先行きを危ぶむ日本の学者の見方も紹介された。²⁸

「親台派」総理の誕生として、大きな期待を以って迎えられた2006年の第一次安倍政権の当時と比べると、第二次安倍政権の登場に対しては、客観、冷静な論調が目立ったと感じたのは筆者だけであろうか。

2. 第37回日台貿易経済会議の開催と相互認証取り決め等の締結

1972年の日華断交以来、日台実務交流の場として毎年東京と台北で交互に開催されている日台貿易経済会議が開催された。

(1) 大橋会長と馬総統、呉副総統の会談

公益財団法人交流協会と亜東関係協会は、11月28日と29日に台北で第37回日台経済貿易会議を開催した。同会議の合間を縫って、大橋交流協会会長を代表とする日本側代表団は28日、馬総統、呉敦義副総統とそれぞれ会見した。²⁹

馬総統は、「日台経済貿易会議は、日台双方に

とって最も重要な経済貿易イシューの意思疎通を行なうプラットフォームであり、毎年具体的な成果を生み出しており、双方の経済貿易関係の理解と深みが増進しており高く評価できる」と指摘した。具体的な交流促進の成果として馬総統は、「日台投資取り決め締結後、日本の対台湾投資は顕著に増加している。オープンスカイ協議の締結後は、利用発着空港は9割増、フライト数も45%増となった」と指摘した。更に「今年4月に特許手続分野における相互協力の覚書が交わされたが、右案件の申請はすでに143件に達し、その中ですでに56件が審査を通過するなど1件につき2.2ヶ月平均で審査されており、一般の審査が3年以上の期間を要することに比べて迅速な手続きが可能になり、経済協力を促進するにあたり有益である」と述べた。今後の課題として、「日台は未だに二重課税の回避にかかる取り決めを締結していないが、右取り決めは日台双方の投資を促進するものであるほか、自由貿易協定或いは経済協力協定などの締結にかかる議論は制度化されたアレンジを通じて行なうことで双方の経済関係が更に緊密に成ることを期待する」と表明するところがあった。

同日午後に会見した呉副総統は、「日台経済協力と観光の往来に関心を寄せている。統計によると台湾人の訪日者数は1-9月の統計で116万人となり、昨年と比べ37.8%増、日本人の訪台者数も同時期比で15%増の成長を記録している」と指摘した。また「台湾では1月の総統選挙が、今月はじめに米国では大統領選挙、中国でも第18回共産党大会が開催されたのに続き、12月には日本でも総選挙が実施されるが、結果はいかなるものであろうとも、日台双方の協力と友誼が引き続き前に向かって邁進していくことを望むと」述べるところがあった。

（２）第 37 回日台貿易経済会議の開催と成果

第 37 回日台貿易経済会議には、日本側から大橋交流協会会長、台湾側から廖了以亜東関係協会会長が団長として参加し、日台経済貿易全般について議論が行われた。29 日には、「電気製品分野の相互認証取決め」³⁰、「日台産業協力架け橋プロジェクトに関する覚書」³¹につき合意されたと説明された。³²

台湾外交部は、「『相互認証取決め』に関する日台間の協議は、5 年近く行なわれてきたが、双方は積極的に右取り決めの条文内容及び運営方式において議論を重ね、今般合意にこぎつけることができた」と指摘した。また、「行政院は昨年『日台産業協力推進方案』を承認し、今年 3 月には日台産業協力推進弁公室を成立させており、今回の『産業協力架け橋プロジェクト』の合意が今後の日台経済貿易協力の実質的進展を促進させることを期待する」と説明した。³³

さらに廖会長は、今後の日台間の交渉事項について、「年末にも薬事規範の協力にかかる覚書が締結される見込みである」と指摘した。今回の合意事項につき陳介山經濟部標準檢驗局長は「相互承認取決め」は、台湾にとって米、カナダ、豪州、ニュージーランド、シンガポールに続いて 6 カ国目の調印国となったと説明するとともに、同取り決めの調印により、「家電製品の対日輸出を例にすると過去の事例では商品を先に日本の実験室に送り、通常は 2、3 回の検査を経た後、合格するが、今回の相互承認調印で台湾の業者にとっては、コスト、時間ともに大きな節約ができ、日本における台湾製品の価格面での競争力が強くなる」とその利便性を強調した。³⁴

3. 日台民間漁業予備会合の開催

（１）事前の報道

9 月の日本政府による尖閣諸島三島の「国有化」措置以後、台湾では抗議活動が起きたが、10 月に

入ると平静を保つようになり、11 月以降は次期漁業交渉にかかる報道が散見されるようになった。11 月 3 日の『聯合報』は台湾側が予備会合を提案したことに対し、岡田交流協会台北事務所総務部長が「良い発想である」と予備会合に前向きな姿勢を示したことが報じられたほか、³⁵ 7 日には日本の報道を引用する形で予備会合では「領海」、「共同水域」の扱いが鍵となるなどの報道もなされたが、台湾側は漁業署の副署長が「仮定の話にはコメントできない」とローキーな姿勢を貫いた。³⁶

11 月 28 日付の『自由時報』は、日本メディアが「台湾側が主権問題を漁業交渉の中の文書に記載する主張をしていることから、開催が危ぶまれている」との報道を紹介する一方で、27 日外交部の蘇啓誠・亜太司副司長が、「予備会合では作業水域の画定及び漁業資源の保護管理問題も含まれる」、「日本側は台湾漁民の鯖、鰹の捕獲方法に計画性がなく、漁業資源を枯渇させないための具体的計画を提出することを望んでいる」、「シラスウナギに関しては日台間の協力強化を望む」などと展望も交えて課題を指摘した。³⁷

また主権問題に関して、蘇副司長は「台湾側が主権問題を完全に提起しないことは不可能であり、過去の会談で双方は各自が右諸島に対する主権を宣言していたが、我が方の限界ライン（底線）は争議の棚上げであり、少なくとも双方が争議の存在を承認してこそ、問題をいかに解決するかを議論できる」と強調した。また予備会合に関しても、「開催回数は 1 回とは限らない。必要であれば何度でも開催する。過去 16 回の交渉は事前に合意に達しないまま交渉のテーブルに座ったため具体的な成果を得ることができなかった」と述べるなど、今回の交渉では外交部は交渉のテーブルにつく前に交渉の細事に関し調整する必要があると指摘するところがあった。

（２）日台民間漁業予備会合の開催と台湾側の反応

11月29日、交流協会東京本部は、日台民間漁業予備会合が翌30日に当協会東京本部会議室にて開催することを公表するとともに、同日夜には右結果の内容をプレスリリースで発出する旨説明した。³⁸

翌30日、交流協会東京本部で漁業協議の予備交渉が開催された。台湾では右交渉の会場に向かう日本側関係者と見られる映像もニュース番組で放映していた。同日夜、予備交渉を終えて交流協会はプレスリリースを発出し、会合の結果につき説明した。³⁹右では「予備会合には、日台の窓口交流機関である、交流協会と駐日代表処関係者のほか日本側から、外務省、水産庁、海上保安庁のほか内閣府沖縄総合事務局の担当者が出席し、台湾側は外交部、漁業署、海岸巡防署の関係者が出席し、日台双方が自らの立場を述べたが双方の間で合意には至らなかったものの、今後も右協議を継続し、可能な限り次期協議を行なうことで一致した。」との説明がなされた。

台湾側は右会合を終えて、林永樂外交部長が、「我が方は、第17回日台漁業協議の正式会議を最も早ければ来年春にも開催したい」と述べるとともに、交渉担当者のレベルが低すぎるのではないかという一部世論の指摘に対し「日台間のハイレベル協議は他にも行なっている。今回の会合は技術的な性質のものであり、政策レベルのものでなく、双方が派遣した担当者のレベルは技術官僚による専門的な内容の意思疎通であった」と説明するところがあった。⁴⁰台湾の報道からは、2013年に漁業協議が進展する期待感が強く感じられた。

４．「慰安婦」問題のイベントに馬総統が出席

馬総統は、12月9日の世界人権日に『婦女救援社会福祉事業基金会』の主催による「第11回日本軍慰安婦問題アジア団結会議」（中国語：第11屆

日軍慰安婦問題亞洲團結會議）の開会式に出席し、アジア各国から訪台したおばあさん（阿嬤）たちの強い意志と勇気に敬意を示すとともに、婦女救援社会福祉事業基金等民間団体及び専門家の長期にわたる慰安婦たちの権利を獲得するための努力と右への貢献を高く評価した。⁴¹（注：以下の内容全て原文ママ）

馬総統は祝辞で「日本軍は第二次大戦期間にアジアの女性を迫害し、慰安婦として暴行を加えたことは全世界周知の事実である。1995年の国連人権委員会は完全な調査の後、慰安婦を『軍隊性奴隷制』（military sex slaves）とし、公式に日本軍が人道に違反する罪を犯したと確認した。しかし、遺憾で憤怒に耐えないのは、日本政府は未だに正直に歴史に向き合い、過ちを認めず、甚だしくは一部の政治家はこの史実の存在或いは証拠が不足しているとして否定していることである」と強調した。

また馬総統は「台湾の228事件の歴史を例に、人権迫害の歴史は許すことができるが、忘れてはならず、教訓とすることによって遺憾な事件が再度発生することを避けることができる」と指摘し、「日本は勇気をもって、歴史の真相に向き合い、正式な謝罪をすることで、合理的な補償と被害を受けたおばあさんたちに対する正義を取り戻さねばならない。わが政府は、おばあさんたちの生活支援をし、引き続き関連資料を保存し、おばあさんたちが日本に賠償を求める決意を支援していく」と強調した。

報道では台湾に生存している8人のうちの元慰安婦の1人が「日本は未だに賠償をしない。台湾人をいじめるにもひどすぎる」と怒りの表明を紹介したほか、同基金会が招待した韓国籍、フィリピン籍の慰安婦とともに「団結して、日本政府に過ちを認めさせよう」と指摘するところがあった。⁴²

5. 行政首長、立法委員、退職公務員に対する経費、各種手当の削減問題

世界経済の失速を受け、中国米国などへの輸出に頼る企業の業績悪化に伴い、多くの企業が「無薪假」（注：業績の悪化に伴い、経営側が従業員に賃金を支払わず「休暇」させる制度。その間、従業員は給与を得られないが、景気、業績の回復に伴い、従来の職場に復帰できるため、解雇に比べればソフトな方法であり、リーマンショック以降採用する企業が増えている）を実施しており、労働行政の主管機関である労工委員会の1月上旬時点の最新の統計では、62企業が4289人の従業員に対して実施している。⁴³かかる情勢の中で、経済情勢が良好な時代には慣例として問題視されることのなかった退職公務員に支払われてきた賞与に相当する「年末慰問金」、立法委員に対する各種手当、総統副総統を含む行政首長が擁する業務関連手当の廃止、大幅削減をする動きが見られた。

（1）退職軍人、教員、公務員に支給されてきた「年末慰問金」の削減問題

10月16日、民進党籍の林淑芬立法委員は、立法院で陳行政院長に対し、「月ごとに退職金を受領している約44万人の退職公務員に対して、未だに旧正月前に年末慰問金が支払われ、右に対し年間200億元が費消されており、法的な根拠も曖昧なところ、右制度を廃止する意向はないのか」と問うたところ、陳院長は「関係部局と議論の余地が有る」と検討を考慮する旨回答した。⁴⁴新北市三重区という中小企業の多い選挙区選出の林委員は、「公務員には右手当のほか、春節、端午説、中秋節などの手当の他、子女教育の補助もあるが、右手当とは無縁の労働者はどう思うだろうか」と公平性の観点から同制度の廃止を強く促した。

当初、行政院は「年末慰問金の支給は40年にわたり実施され慣例となっており、必ずしも法的根

拠を必要としない、来年も支払う予定である」と弁明したが⁴⁵、その後、民進党委員が法的根拠のなさを指摘するとともに台湾メディアは、一斉に公務員の福利厚生の良さにつき報じた。かかる政府への風当たりが強まる中で、政府関係者は、「右制度が実施された当時は公務員の給与水準が低く、慰問金は生活費の不足分を補う意味があったが、現在公務員の待遇は大きく改善されており、1965年に制定された年末慰問金にかかる支払いを定めた規定は2011年1月1日に廃止された」として現在は、法的根拠がないことを明らかにした。⁴⁶

蘇貞昌民進党主席は、「民進党政権時代に右問題は見落としていたが、現在問題に気がついたからには、決断して処理すべきである」と反省を述べながらも政府に対して迅速な対応を促した。⁴⁷その結果18日に陳院長は閣議開催前の根回し的な会議で、「引き続き支給するか否か」、「富裕層への支給を排除するか否か」、「減額支給にするか否か」などの可能性について検討されたと報じられた。⁴⁸

24日、陳院長は立法院で危機が叫ばれて久しい年金問題に関して、「政府が最終的な支払いに対して責任を負う」と明言するとともに、「年末慰問金」について、「来年2月に支給される対象は、毎月受給する退職金金額が2万元以下の基層レベルの退職公務員及び遺族と作戦或いは公務で障害者になったか死亡した退役軍人とその遺族にのみ支給される」と表明した。⁴⁹新制度の施行により、42.3万人が受給していた「年末慰問金」は基層レベルの退職公務員4.2万人へと減少、支給額も192億元から10億元へと大幅な減額となる見通しと報じられた。⁵⁰右措置に対し、毎年支給されてきたものが政治的な理由で急遽廃止になった感のある「既得権益者」たちからは、不景気という情勢を理解しながらも「公務員いじめ」、「屈辱的」といった政府に対する厳しい声があがった。⁵¹

一貫して公平正義を唱える馬總統は、23 日に開催した党と政府の意思疎通の場であり、政府高層幹部会議を兼ねる『中山会報』で行政院秘書長から新措置にかかる説明を受けた際、今回の措置は「公平正義」と「弱者を助ける」を体現しているとして、行政院方案への支持を表明した。⁵²また翌日開催された党中央常務委員会の席で、陳院長の決定を「迅速で叡智ある決断である」と称えるところにも、「余剰経費は経済振興、発展を促進するものに活用することを望む」と述べるところがあった。⁵³

立法委員は与野党ともに、行政院の迅速な決定に対し概ね肯定的な反応を示したが、蘇民進党主席は、「今回の決定が一時的な措置であってはならず、新制度は法制化することが望ましい」として、一部に噂される、来年度以降の「復活」支給の可能性に釘を刺した。⁵⁴

その後、右問題は一見落ち着いたかに見えたが、11 月にはいると退職軍人、公務員の支持を背景にしている一部の国民党の立法委員らが巻き返しの動きを始めた。まず彼らは行政院の措置に対し、「行政院は立法院と意思疎通を怠り独断的な決定

をした」などの批判を展開したほか、⁵⁵年末慰問金の支給復活を試みるべく立法院内で署名活動を行う動きが公然と散見されるようになった。しかし、總統府と行政院は従来の方案をひっくり返すことは許さないとの姿勢を強調した。⁵⁶また民進党は「慰問金の支給が復活するようなことがあれば、デモ活動を実施することも辞さない」⁵⁷とするなど、与野党間でつばぜり合いが継続した。

（２）立法委員の諸手当削減問題

退職公務員の年末慰問金問題が話題になる中で浮上してきたのが、立法委員に支給されてきた緒手当の問題であった。年末慰問金の新制度の方向性が報じられた 10 月 24 日の朝刊では、立法委員の秘書の指摘をもとに、立法委員は歳費以外に年間に海外視察費 32 万元、有権者へのサービス及び研究費（文具、秘書補助費、電信等）183 万元、利用の可否にかかわらず支給される宿舍補助費 21.6 万元、研究室維持費 73.2 万元のほか国内交通費（航空、高速鉄道含む）が無料などと報じられた。⁵⁸立法院は政府提出の法案及び予算審査の権限を有しているが、その「彼らの予算を誰が

表 1 立法委員手当の削減額一覧

蔡正元提案版		与野党合意版		
項目	金額	減額後金額	新項目	従来額（調整後）
宿舍補助費	21 万 6 千	0	誕生日金券	2 千（0）
法案研究補助費	10 万	0	運転手食費	1 万 6 千（0）
高速道路通行費	5 万 7600	0	携帯電話維持費	2 万（0）
秘書業務活動費	4 万 2 千	0	立法委員食費	11 万 2 千（0）
文具、郵便費	24 万	18 万		
通信費	18 万	14 万 4 千		
ガソリン補助費	31 万 4880	24 万 9120		
国際交流事務費	32 万	20 万		
事務所補助費	24 万	24 万		
健康検査補助費	1 万 4 千	1 万 4 千		
総 額	172 万 4480	総額一人当たり 86 万元の減額		

資料元：「立委 9 A 津貼刪減表」『聯合報』（2012 年 11 月 2 日）頁 1。

監督するのか？」という脈絡の中で浮上した右問題は、慰問金問題の後を襲い、その後1週間台湾のニュースの中心となった。

翌日の台湾各紙は、右議論を引っ張る形で国民党籍の立法委員である蔡正元、李貴敏委員が、法的根拠の無い諸予算から海外視察費、宿舍補助費など9項目の手当て172万4480元の削減にかかる法案を提出した。⁵⁹右提案が採択されれば、113名の立法委員分合計1.9億元が節約できると報じられた。その後、台湾メディアは立法委員が9項目の手当てを不等に受給しているというニュアンスで「9 A問題」として呼称することとなった。

立法委員に対する厳しいメディアの取り扱いは、台湾社会の感情をある程度代弁するものと言え、他者の予算を削減することに躍起となっていた立法委員が自身の立場を律することとなったとしてメディアは、「退職公務員の手当ての削減だけをして自身の手当てに手をつけないのはダブルスタンダードであるとして」削減支持の論調を展開した。⁶⁰8日間の議論を経て、11月1日に与野党で合意に達した内容は、従来提出された9項目のうち、4項目は全額カットされ、3項目が減額、2項目が保留された一方で、小額ではあるが、委員の食費、誕生日の金券など新たな4項目を廃止した結果、総額では立法委員一人当たり、86万元の減額となり、立法委員113名の総計は9736万元となった。⁶¹右金額は、蔡委員が提案した金額のほぼ半額となった。新制度は2013年度から実施される。減額の内容をまとめたのが表1である。

王金平立法院長は、「与野党で手当て減額について議論した際、立法委員の本来の職責を全うするにあたって有利か否か」、「台湾の発展に有利か否かの角度から合理的な検討と調整を行なったが、この検討のプロセスは理性的なものであった」と指摘した。また「手当ての全てをカットするのは国会の発展にとって有害である」として、国民

に対して理解を求めた。

立法委員の諸手当て減額のプロセスは、メディアの前では「改革派」を標榜し、「全額カット」を叫ぶ委員たちが、密室の協議では、少しでも多くの手当てを残そうと努力したり、減額提案者の蔡正元委員に「立法委員を侮辱することとなった」として謝罪を求めるなどの裏話も報じられた。⁶²今回の騒動を見ていて筆者が想起したのは、2004年に「改革」と称して選挙制度改革と定数の半減を立法委員自身が率先して断行したことである。委員定数の半減は、半分の現職委員が失業することになるわけだが、当時の台湾社会では雰囲気的に「立法委員定数の削減=改革」というものがあり、委員定数削減の反対者は「非改革者」とのレッテルを貼られることに等しいものがあった。今回の議論でも、当初はどうか「全項目死守できないか」という動きもあったが、世論の圧力の高まりに対し、率先して手当減額を主張しながらも、「Aはカットしても良いがBは残せ」、「AとBは残したいが、Cは全額削除でもOK」といった各委員の思惑に沿った議論が展開されたが、最終的には世論の圧力の前に屈し、身を削ることとなった。

(3) 馬総統が自ら国務機密費の一部を減額

立法委員が「自身」の手による手当て削減を行った翌日に、民進党立法院議員団は記者会見を開催し、次なる「改革の矛先」を行政機関、中でも各部会の首長が擁する特別費、総統の国務機要費、行政院長の行政機要費も半減すべきであると主張した。同議員団によると2013年度予算を例にすると三者の合計金額は1億9481万元になり、半減できれば、約1億元の国庫の節約になると強調した。⁶³陳院長は立法院で、「自分の行政機要費は個人の用途に費消することはなく、同僚に対する報奨、業務上の必要に応じた適切な支出を行っている」と説明するとともに、自身の特別費が

半減されることは問題ないが、他者にも影響することなので詳細な検討をしたい」と回答するにとどまった。

しかし、1週間もたたぬ11月6日に、馬総統と陳院長はそれぞれ別の場で、来年度の国務機要費（総統）と政務連繫費（行政院長）を25%カットすると表明した。またその削減については、馬総統は「経済が低迷し、財政状況が厳しい事に鑑み、国務機要費の1千萬元の削減に同意するが、与野党と台湾社会は経済振興を推進するという目標に戻り、不要な権力闘争はやめるべきである」と訴えた。⁶⁴陳院長は、「関連手当の削減については、昨今の世論の意向に考慮し、馬総統と相談の上削減を決定した」と説明した。

今件は退職公務員、立法委員の「手当」削減に続く第三段の「改革」の予先となったが、馬総統の決断は、予算カットが「国民運動」になる様相を示す中でかかる競争に躍起になるばかりで、本来担うべき国政が疎かにされることを回避すべく、これ以上国政に費やすエネルギーを消耗すべきではないとの立場から自発的に予算削減を行なったものといえる。台湾住民にとって、国庫の節約は望ましいことであるが、経済振興、福利の安定といった国民の最も望む 이슈に政治が積極的に取り組むことに期待したい。

（4）2013年度予算の予算案が通過

立法院の会期終了直前の1月15日に、民国102年度（2013年）予算案が通過した。不景気を背景に、今予算は前述の、「慰問金」（110億元）、立法委員手当（約1億元）、首長特別費（3645万元）のほか、公務員の交通補助費、水道、電気補助費等福利厚生関連費用（213億元）など総額370億元が削減された。削減金額は総予算の1.91%に達し、10年ぶりの削減幅となったと報じた。⁶⁵国民党の議員団書記長の呉育昇委員は、削減幅が大きくなったのは、経済情勢が厳しい中で、ともに困

難な局面を乗り切る姿勢を示したと肯定した。一方で、民進党議員団幹事長の潘孟安委員は、もっと多く削減できたとして「不満ではあるが、受け入れられる」と述べた。

民進党中央はプレスリリースで、蘇主席が「民進党委員は、（全113議席のうち過半数に満たない）40議席という限られた数の中で改革にかかる議論を引っ張った」として敬意を表した。⁶⁶また「今後は国民の関心の高い『年金法』、『反メディア独占法』、『非核関連法』などを推進していきたい」と説明した。『自由時報』紙は、公平正義の立場から廃止にかかる議論が始まって久しい、退職軍人、公務員、教員などに実施されている18%の預金金利予算が温存されるなど国民党の支持者に多い公務員に対して供与されている福利厚生関連予算は260億元もあるとし、これらの予算を護った国民党を批判した。⁶⁷また、同紙は国民党には反改革勢力がおり、彼らの支持勢力である公務員に対するばら撒き予算の復活を来年度予算で虎視眈々と狙っているとする指摘もされた。⁶⁸

7. 国民党内部の動き

ポスト馬英九の動きは、昨年夏以降一部で具体的な動きが見られたが、米牛肉問題の混乱に代表される施政への不満は野党だけでなく国民党内にも強く存在し、次期直轄市長選挙の後任争いなどもからみ、一部で顕在化することとなった。

（1）呉伯雄国民党名誉主席が馬総統の施政、人事に不満表明

11月3日、国民党は四中全会などの会議を開催した。その席で呉名誉主席は、「馬総統は、政策を推進する際の時機、方法及び手順などにつき検討すべきであり、外部の者は馬総統が重用する人材の範囲は一部の側近だけであり、同質性が高く召集する範囲も狭いと批判している。自分（呉）はそうは思わないが、確かに有力な支持者が国民党

から離れている」と諫めたと報じられた。⁶⁹また連戦元副総統の息子で台北市長選挙への出馬が噂される、連勝文中央委員は、メディアからの市長選挙への出馬についての質問に対しては、明言しなかったが、「経済を良くすることが最も重要であり、経済を良くしなければ、誰が当選しても乞食グループのリーダーでしかない」と述べるころがあった。右発言に対し、国民党の関係者は、「経済が好転してから選挙に出馬するという態度は、国民と一緒に苦勞を分かち合うことを望んでいないと思われることになり、このような発言は国民党支持者からも支持を得るのは難しいであろう」と暗に批判するところがあった。⁷⁰

次期台北市長の候補には、馬総統は江宜樺行政院副院長が意中の人物と見なされている一方で、世論調査では連勝文中央委員が他の有力者を圧倒している結果がでており⁷¹、水面下では、他の有力候補も交えた公認争いが始まっているとされている。また連中央委員は、馬総統が重要な改革として位置づけている 2013 年 1 月から施行予定のキャピタルゲイン課税について、昨今の不景気に鑑み、実施を暫時遅らせるべきと主張するなどしていることも事態を複雑化させている。かかる内部の権力闘争の勃発に対し、『聯合報』は、馬総統は党内世代間の権力分配を公平に行なわず、側近政治に偏ると党内がバラバラになり 2014 年の直轄市長選挙、2016 年の総統選挙でも敗北する可能性がある」と指摘した。⁷²

馬総統自身は 5 日、連中央委員の父親の連元副総統が APEC 特使として外交で活躍しているな

ど称えるなどして連委員をはじめとした馬総統の施政に不満なグループとの関係修復を試みると報じられた一方⁷³、6 日に開催された『中山会報』では「乞食グループのリーダー」発言について不適当であると指摘し、党内同志の談話内容は国民に誤解を与えないよう慎重にすべきであるとの持論を展開した。⁷⁴

党内の馬主席への不満及びポスト馬の動きが加速するのは、2014 年の次期直轄市長選挙の公認争いか次期党主席選挙にかかるプロセスの中だと考えられてきたが、状況によっては、もう少し早い段階で党内の暗闘が展開する可能性を感じさせられた。

（２）国民党建党 118 周年記念活動の開催

11 月 24 日、国民党は建党 118 周年記念式典を開催した。右式典で馬主席は「建党 118 周年の本日、革命烈士の犠牲と貢献に思いをはせるとともに、我が党が見逃したり、不十分なところが無いかどうかまじめに検討する必要がある、必ず努力を通じて改善し、引き続き前進する」と指摘することで、改めて改革堅持の姿勢を全面に押し出した。

また昨今の経済情勢に関しては「厳しいものがあると前置きしながら、台湾が困難に直面している今こそ、全党が一緒に努力し、改革を推進することで困難を克服し、引き続き前進することを望む」と強調し、党員に団結を求めることとなった。⁷⁵

¹ 「日眾議院大選 政見瘋民族主義」『聯合報』（2012 年 12 月 4 日）頁 14。

² 「日本大老當心 美女刺客魅惑選民」『聯合報』（2012 年 12 月 5 日）頁 16。

³ 「自民黨主導聯合政府 小黨崩解」『中國時報』（2012 年 12 月 15 日）頁 8、「自民黨贏多少 牽動日國會運作」『自由時報』（2012 年 12 月 16 日）<http://www.libertytimes.com.tw/2012/new/dec/16/today-int1-2.htm>。

⁴ 「日本變天 自民黨奪回政權」『中國時報』（2012 年 12 月 17 日）頁 1。

⁵ 「日本變天 民主黨 230 → 56 慘敗 自民黨 119 → 293 重返執政」『自由時報』（2012 年 12 月 17 日）頁 1。

⁶ 「日本變天 自民黨大勝 安倍將回鍋」『聯合報』（2012 年 12 月 17 日）頁 1。

⁷ 「選民冷感 投票率 59.7% 創新低」『中國時報』（2012 年 12 月 17 日）頁 3。

- ⁸ 「一年一首相 制度造就動盪政局」『中国時報』（2012年12月17日）頁3。
- ⁹ 「鷹派首相安倍宣告 日本政治像右轉」『聯合報』（2012年12月17日）頁3。
- ¹⁰ 「不滿中國武赫 日政壇享有轉」『自由時報』（2012年12月17日）頁3。
- ¹¹ 「日中韓島嶼之爭 火續燒」『聯合報』（2012年12月17日）頁3。
- ¹² 外交部ホームページ「日本眾議院選舉結果揭曉」（2012年12月16日）<http://www.mofa.gov.tw/official/Home/Detail/bc-614656-b09c-4257-9168-b46864521f51?arfid=88ce0e14-af13-4a76-8015-83fe91b55db0&opno=fe15c741-bf77-468b-bb7d-0f7eff7b7636>
- ¹³ 「日銀因鈔 製造同膨」『聯合報』（2012年12月21日）頁2。
- ¹⁴ 「通膨目標化 彭淮南：恐掀金融危機」『聯合報』（2012年12月21日）頁2。
- ¹⁵ 外交部「我政府祝賀日本安倍新內閣成立」（2012年12月26日）<http://www.mofa.gov.tw/official/Home/Detail/fe984ce-2-c9d4-45a4-bbdc-ef1576aa26ed?arfid=7f013c3f-f130-44a9-905f-84cbaba2eca6&opno=907477b5-1d95-4205-a89d-320ed4806d4b>
- ¹⁶ 「安倍組『危機突破內閣』」『聯合報』（2012年12月27日）頁1。
- ¹⁷ 「日新內閣佈局 安倍緊抓外交國防主導權」『自由時報』（2012年12月27日）頁6。
- ¹⁸ 「安倍組閣 右派一籬筐」『中国時報』（2012年12月27日）頁1。
- ¹⁹ 「東北亞領袖多鷹派 恐變冷戰新對抗」『聯合報』（2012年12月27日）頁4。
- ²⁰ 「日學者評估 鷹派安倍比選前溫和」『聯合報』（2012年12月27日）頁4。
- ²¹ 「日圓貶破 85 明年有機會 3 位數」『聯合報』（2012年12月27日）頁4。
- ²² 「安倍曾閃辭首相 日擔心抗壓性仍不夠」『聯合報』（2012年12月27日）頁4。
- ²³ 「盈餘助政壇日第一夫人 繼續經營居酒屋」『聯合報』（2012年12月27日）頁4、「韓劇迷第一夫人 居酒屋不收攤」『自由時報』（2012年12月27日）頁6。
- ²⁴ 「石原伸晃入閣 人質意味濃厚」『中国時報』（2012年12月27日）頁16。
- ²⁵ 「安倍兩大難題 緩外交拚經濟」『中国時報』（2012年12月27日）頁16。
- ²⁶ 「日新內閣佈局 安倍緊抓外交國防主導權」『自由時報』（2012年12月27日）頁6。
- ²⁷ 「自民黨三大要職 女性佔兩席」『自由時報』（2012年12月27日）頁6。
- ²⁸ 「印鈔救經濟 日學者看衰」『自由時報』（2012年12月27日）頁6。
- ²⁹ 總統府ホームページ「總統與副總統分別接見「日本交流協會」會長大橋光夫」（2012年11月28日）<http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=28699&rmid=514>
- ³⁰ 公益財団法人交流協會ホームページ「『相互承認に関する相互協力のための公益財団法人交流協会と亜東關係協会との間の取決め』（略称「日台民間相互承認取決め」）について」（2012年11月29日）http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top/8530C02AD8F1B47349257AC500252AD4?OpenDocument
- ³¹ 公益財団法人交流協會ホームページ「『公益財団法人交流協会と亜東關係協会との間の日台産業協力架け橋プロジェクトの協力強化に関する覚書』について」（2012年11月29日）http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top/45ED5DA38F6878BA49257AC500245811?OpenDocument
- ³² 公益財団法人交流協會ホームページ「第37回日台貿易經濟會議の開催について（結果）」（2012年11月29日）http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top/08D2B853B93A6C2249257AC500178015?OpenDocument
- ³³ 外交部ホームページ「臺日就電機電子產品檢驗與產業合作等簽署「臺日相互承認合作協議」與「臺日產業合作搭橋計畫合作備忘錄」」（2012年11月29日）<http://www.mofa.gov.tw/official/Home/Detail/99cadd0e-2633-4206-ad4d-1f7cfed5883d?arfid=7f013c3f-f130-44a9-905f-84cbaba2eca6&opno=907477b5-1d95-4205-a89d-320ed4806d4b>
- ³⁴ 「台日簽相互承認協議 11 產業合作」『聯合報』（2012年11月30日）頁20。
- ³⁵ 「台日漁業談判 日方贊成預備性會議」『聯合報』（2012年11月3日）頁21。
- ³⁶ 「台日談釣島漁權 卡在領海？」『聯合報』（2012年11月7日）頁11。
- ³⁷ 「台日漁業預備會議 先談水域、漁源養護」『自由時報』（2012年11月3日）頁4。
- ³⁸ 公益財団法人交流協會「日台民間漁業協議予備會合の開催について」（2012年11月29日）http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top/B232C1EA405B51BC49257AC5000D9D73?OpenDocument
- ³⁹ 公益財団法人交流協會ホームページ「日台民間漁業協議予備會合の結果について」（2012年11月30日）http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top/2203A4719C3CF63549257AC600390AEA?OpenDocument
- ⁴⁰ 台日漁權預備會議 我重申釣魚台主權」『聯合報』（2012年12月1日）頁21。
- ⁴¹ 總統府ホームページ「總統出席婦女救援社會福利事業基金會『第11屆日軍慰安婦問題亞洲團結會議』開幕式」（2012年12月9日）<http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=28773&rmid=514>

- ⁴² 「拖 60 年不賠 慰安婦批日欺負人」『聯合報』（2012 年 12 月 10 日）頁 12。
- ⁴³ 行政院勞工委員會ホームページ「勞委會公布事業單位實施勞雇雙方協商減少工時累計資料」（2013 年 1 月 2 日）http://www.cla.gov.tw/cgi-bin/Message/MM_msg_control?mode=viewnews&ts=50e3880c32f5&theme=
- ⁴⁴ 「44 萬退休公僕 竟年年拿年終」『蘋果日報』（2012 年 10 月 17 日）頁 7、「退休軍公教年終是否取消？陳揆：與師院討論」『自由時報』（2012 年 10 月 17 日）頁 4。
- ⁴⁵ 「軍公教退休年終 維持發放」『聯合報』（2012 年 10 月 18 日）聯 3。
- ⁴⁶ 「月退軍公教領年終是慣例 立委斥黃富源違法亂紀」『自由時報』（2012 年 10 月 19 日）頁 3。
- ⁴⁷ 「蘇：退休軍公教領年終 懸崖勒馬」『聯合報』（2012 年 10 月 19 日）頁 3。
- ⁴⁸ 「退休軍公教年終 排富裕、打折」『聯合報』（2012 年 10 月 19 日）頁 1。
- ⁴⁹ 「陳揆拍板 政府負勞最終責任」『聯合報』（2012 年 10 月 24 日）頁 1。
- ⁵⁰ 「42.3 萬退休軍公教 剩 4.2 萬人可領」『聯合報』（2012 年 10 月 24 日）頁 5。
- ⁵¹ 「錢泡湯 軍公教：欺負人」『聯合報』（2012 年 10 月 24 日）頁 5。
- ⁵² 「馬總統支持政院」『聯合報』（2012 年 10 月 24 日）頁 5。
- ⁵³ 中国国民党ホームページ「行政院提出退休軍公教年終慰問金調整方案馬主席肯定陳院長處置『快速且睿智』」（2012 年 10 月 23 日）
<http://www.kmt.org.tw/page.aspx?id=32&aid=7734>
- ⁵⁴ 「年終新制 蘇貞昌：應立法」『聯合報』（2012 年 10 月 24 日）頁 5。
- ⁵⁵ 「退休年終慰問金 政院立場未變」『中國時報』（2012 年 11 月 13 日）頁 3。
- ⁵⁶ 「府院：年終慰問金不容翻盤」『聯合報』（2012 年 11 月 13 日）頁 1。
- ⁵⁷ 「慰問金若翻案 綠嗆街頭見面」『中國時報』（2012 年 11 月 13 日）頁 3。
- ⁵⁸ 「津貼浮濫 預算誰砍 立委問政、住宿、交通全補助」『聯合報』（2012 年 10 月 24 日）頁 5。
- ⁵⁹ 「立委『A 國家 9 項津貼』砍不砍？」『聯合報』（2012 年 10 月 25 日）頁 3。
- ⁶⁰ 「只砍軍公教不砍自己 說一套做一套」『聯合報』（2012 年 10 月 25 日）頁 3。
- ⁶¹ 「砍一半 9 A 津貼 每位立委刪 86 萬」『聯合報』（2012 年 11 月 2 日）頁 1。
- ⁶² 「雙重標準的國會現形記」『聯合報』（2012 年 11 月 2 日）頁 2。
- ⁶³ 「綠委要砍特別費 陳揆：我沒問題」『聯合報』（2012 年 11 月 3 日）頁 4。
- ⁶⁴ 「馬自砍 1000 萬國務費 陳揆砍 225 萬」『聯合報』（2012 年 11 月 7 日）頁 3。
- ⁶⁵ 「大砍 370 億 總預算過了」『聯合報』（2013 年 1 月 16 日）頁 1。
- ⁶⁶ 民主進步黨ホームページ「蘇主席對立法院第八屆第二會期會期結束的回應」（2013 年 1 月 15 日）http://www.dpp.org.tw/news_content.php?sn=6439
- ⁶⁷ 「刪 18 趴等案遭或民黨封殺」『自由時報』（2013 年 1 月 16 日）頁 1。
- ⁶⁸ 「反改革逆流 下年度恐捲土重來」『自由時報』（2013 年 1 月 16 日）頁 3。
- ⁶⁹ 「吳伯雄諫馬：外界批評『用人圈太小』」『聯合報』（2012 年 11 月 4 日）頁 3。
- ⁷⁰ 「連勝文：經濟搞不好 當選只是丐幫幫主」『聯合報』（2012 年 11 月 4 日）頁 3。
- ⁷¹ 11 月の支持率調査では、連勝文 28%、丁守中立法委員 14%、蔡正元 6%、江宜樺 4%となっている。参考「2014 年台北市長可能人選民調」『TVBS』（2012 年 11 月 7 日）http://www1.tvbs.com.tw/FILE_DB/PCH/201211/cuxdvqg6zx.pdf
- ⁷² 「後馬時代的兩個焦慮」『聯合報』（2012 年 11 月 6 日）頁 3。
- ⁷³ 「止血！馬讚連戰有功 修補關係」『聯合報』（2012 年 11 月 6 日）頁 3。
- ⁷⁴ 「馬點名連勝文『丐幫說』不妥」『聯合報』（2012 年 11 月 7 日）頁 1。
- ⁷⁵ 中国国民党ホームページ「馬主席：經濟出現正面訊息 政府持續努力不懈」（2012 年 11 月 24 日）<http://www.kmt.org.tw/hc.aspx?id=32&aid=8068>

 コラム：日台交流の現場から

交流協会設立 40 周年と私の「自分史」

公益財団法人交流協会専務理事 井上 孝

交流協会設立後の 40 年における私の自分史と台湾との接点から、台湾の歴史の一端を振り返ってみたいと思います。

交流協会が設立された 1972 年は、私にとって翌年からの通産省入省を控えた大学生最後の年でした。当時の社会的ムードは、佐藤栄作長期政権にたいする倦み、ニクソン・キッシンジャー訪中に置いてきぼりを喰わされた同政権に対する失望感、焦燥感、さらに閉そく感といったものが、立志伝中の人と喧伝される田中角栄通産大臣の予想外の内閣総理大臣就任と、続く電光石火の北京訪問、日中共同声明発表によって一挙に吹き払われ、日中国交回復歓迎ムード一色であったように記憶しています。この中では、突然に国際空間から放り出されることになる台湾民衆への想いなどの余地はなかった気がします。現在では当たり前となっている共産党独裁下の大陸 vs 自由台湾という体制比較についても、時の台湾は蒋介石・蔣経国と続く国民党独裁下であり、どちらもどっちで、台湾への共感の余地はありませんでした。

そのような私の台湾観を変え始めたのが、1983 年から 3 年間にわたるロスアンゼルス総領事館勤務でした。時の米国大統領はロスを政治的出身地とするレーガンであり、勤務面でも非常に刺激的な 3 年であったのですが、その時に台湾に関連した二つの経験をしました。

一つは、ロスオリンピック開催の興奮まだ冷めやらぬ 84 年 10 月に、蔣経国の伝記作家であった米国籍の江南がロス郊外の自宅で惨殺される「江南事件」が発生したことです。米当局の捜査により、台湾特務機関の指示で台湾の暴力団員により

実行されたことが判明するのは少し後ですが、発生当時から現地マスコミは蔣経国政権による暗殺であると報じていたように思います。私の率直な印象は、蔣経国政権の粗暴さへの驚きと同時に、レーガンの支えを頼りにしている独裁政権がレーガンのお膝元で暗殺事件を起こすとはなんたる失態か、何かおかしくないかというものでした。事実、日本に続き米国との外交関係も失い孤立感を深める蔣経国政権にあって、蔣経国の糖尿病が悪化するという混乱の中で発生した特務幹部の暴走であったようです。他方、このような混乱の中でこそ、李登輝をはじめとする本省人の中枢への登用、立法院定数増加、党禁解除方針など次の民主化につながる動きが出ていた訳です。

二つ目は、在日の本省人で、御主人は台湾におり、本人だけがロスに移住し日本総領事館で勤務しているという複雑な背景を持つ現地職員の存在です。台湾には蔣経国とは別にその下で必死に生きる努力をしている民衆がいるという当然の事実初めて思い至った時でした。

次が、96 年の台北事務所への赴任となります。大陸のミサイル発射という緊張の中で実施された最初の台湾総統民選において李登輝が大勝し新任期が開始された直後の赴任でした。その後三年余台湾民衆と直に接する経験を持てたことが私の現在の台湾観を決定しました。

ちっぽけな私の自分史ですが、私のそばにも確実に台湾の歴史はあったように思います。

なお、申しあげるまでもありませんが、以上はすべて筆者の私見です。

編集後記

豚の角煮、鶏、野菜の煮物とカウンターに置いてある料理のサンプルを確認していたら「魚のフライがお勧め!」と突然日本語で言って横を向いた70歳過ぎの食堂の老板の顔を見た次の瞬間、思わず綻んでしまったことを隠すため咳払いをした。台北市の南港展覽館で開催された2012年台湾国際グリーン産業見本市出展のため、8年ぶり2度目の台湾出張、双十節の昼のことである。

1回目の台湾出張は2004年2月、日本貿易振興機構（ジェトロ）のFOOD TAIPEI初出展の準備のためであった。ジェトロは2003年2月に輸出促進準備室を立ち上げ、輸出促進に重心を移したが、農林水産・食品分野については経済発展に伴う高所得者層の増加が著しいアジア、とりわけ親日的で、安心・安全な日本食品がブームとなっている台湾は有望市場のひとつに数えられた。交流協会が2008年から実施している「台湾の対日世論調査」のような調査報告は確認できないが、例えば2003年11月1日発表の台北市青少年育楽中心が行った青少年流行文化調査の結果でも、韓流ブームは席捲しているものの、15～18歳の青少年が嗜好する外国のポップカルチャーの割合は日本39.8%、欧米23.1%、中国本土19.1%と、日本好きが抜きんでていた印象が思い出される。

実際の日本パビリオンの出展については、ジェトロが台湾に事務所を持たないため、交流協会と共催で行うことになり、以降FOOD TAIPEI 2012まで9年連続で実施している。

農林水産・食品の輸出拡大への取り組みはその後、2006年4月に小泉内閣が制定した「21世紀新農政2006」で農林水産物・食品の輸出額を2004年の3,604億円から5年で倍増する目標が掲げられ、同年9月に第1次安倍内閣で輸出額を2013年までに1兆円規模とする目標が新たに示された。目標の達成時期はリーマン・ショックや震災等もあり2020年に再設定されているが、輸出額は2013年1月5日に安倍首相が経済再生に向けた成長戦略の一環として輸出額1兆円を目指すことが伝えられている。台湾向け輸出については、この間一貫して香港、アメリカに次ぐ第3位で日本の農林水産・食品の輸出総額の13%強を占め、有望市場であることは今も同じである。

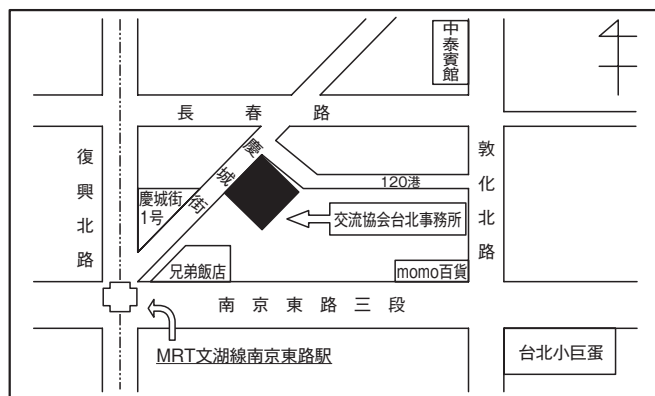
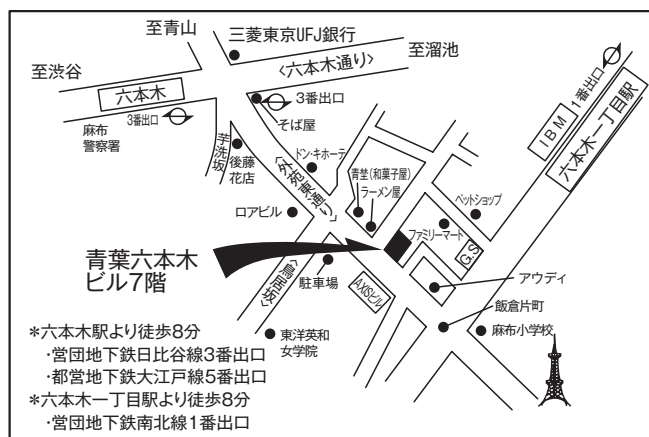
2012年9月18日に交流協会貿易経済部に配属され、8年ぶりに訪れた台湾で日本と同じ居心地の良さを感じることができただけでなく、12月8日の交流協会設立40周年を職員の一員として迎えられたことはやはり巡り合わせではないか。既に出展に向けて動き出したFOOD TAIPEI 2013の次は「日台架け橋プロジェクト」、いやあれもあるなあ。2013年は何をするか。思いだけが前のめりになる自分が何とも可笑しい。

皆様、ご指導・ご鞭撻よろしくお願いします。

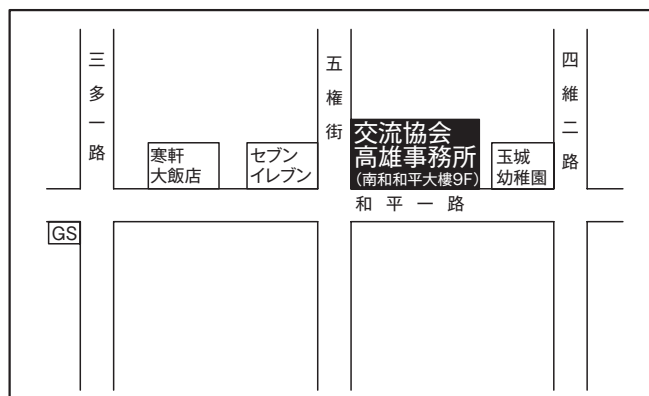
(貿易経済部次長 皆川 幸夫)

平成25年1月31日 発 行
 編集・発行人 井上 孝
 発 行 所 郵便番号 106-0032
 東京都港区六本木3丁目16番33号
 青葉六本木ビル7階
 公益財団法人 交流協会 総務部
 電 話 (03) 5573-2600
 F A X (03) 5573-2601
 U R L <http://www.koryu.or.jp>

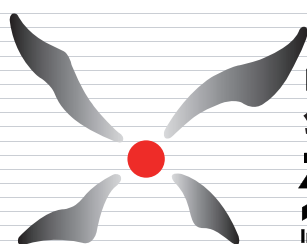
表紙デザイン：株式会社 丸井工文社
 印 刷 所：株式会社 丸井工文社



台北事務所 台北市慶城街28號 通泰大樓
 Tung Tai BLD., 28 Ching Cheng st., Taipei
 電 話 (886) 2-2713-8000
 F A X (886) 2-2713-8787
 URL <http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3contents.nsf/Top>



高雄事務所 高雄市苓雅区和平一路87号
 南和和平大樓9F
 9F, 87 Hoping 1st. Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan
 電 話 (886) 7-771-4008 (代)
 F A X (886) 2-771-2734
 URL <http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3.contents.nsf/Top>



日本と台湾との架け橋
公益財団法人
交流協会
Interchange Association, Japan (IAJ)

